
デッド・バラード

鈴鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッド・バラード

【Nコード】

N0916C

【作者名】

鈴鹿

【あらすじ】

目を開けると、そこは白い世界。地平すらないそこは、神秘的というよりもむしろ不気味だった。そして、頭に響く心地のいいソプラノ。言われたとおりに目を閉じると、今度は黒い世界。全てのモノの輪郭は白、中は黒。写真のネガのような感じ。声の主は目の前にいた。西洋系の顔立ち、腰ほどまである髪、長いまつげ。風もないのに揺れるそれは、彼女の優雅さを際だたせていた。そこで俺は、死を宣告される・・・おねえさん、冗談きついっすね。

プロローグ1

それは、一瞬の出来事だった。

私の目の前は、真っ赤になった。

私はその日も、彼と帰路を共にしていた。

付き合っていたとかそういう話ではない。私にとってその話はやぶさかではなかったが、彼がどうであつたかは知らない。

人付き合いの苦手な私が、気がねなく話せる相手の一人が彼だったというだけだ。

彼は、変だった。

趣味は家事という時点で逸脱している。特技はいつでもどこでも寝られることという特技なのか特技でないのかよく分からないものだった。弓道の有段者で この年齢で弓道の有段者になることは凄いいことらしい 学校には弓道部があるにもかかわらず何故か天体観測部に入部。その際、弓道部の先輩はかなり悔しがっていた、らしい。入部の理由は『楽そうだったから』

特技に違わず、授業中のほとんどは睡眠を敢行。たまに起きだして机の下で読み始めるのは経済誌。株とかつて意外と面白いですよ、先生もどうです？というのは彼がそのことを注意した先生に対して言った言葉だ。そんな学校とは全く関係ないことを普段しているのにもかかわらず、成績は良好。上の中。また、実力テストで総合2位をたたき出すほどの頭脳の持ち主だったというのは一学期に行われた最初の実力テストで発覚する。

そんなこんなで周りから一目置かれているが、普段の行動が行動だけにそんなに友人は多くないようだった。少ないというわけでもなさそうだったが、あまり自分から話しかけるといふことはないように見えた。休み時間は授業中と変わらず眠っているし、昼休みも

食事を済ませるとどこかへ消えてしまふ。他人とのかかわりを避けているというより、他人は他人、自分は自分と分けているようなところがあつた。

一匹狼、というわけではないのだろうが、友達とつるんだり、じやれあつたりどうこうしている彼を私は見たことがない。おそらくみんなもそうだろう。

そして、彼が変だと思う一番の理由は

私なんかには、声をかけてきたということだ。

「高崎さんつてさ、いつも本読んでるよね」

一学期の最初。

出席番号で並んだ席で、私たちは隣同士だつた。私は高崎。彼は千葉。四十人クラスで男女は同数。出席番号10番と30番。そのあと、何回も隣同士になった。確か、二回目の席替えの後だつたと思う。休み時間に、珍しく彼が起きていた。メールを打っていたのだろう、携帯電話をいじる指を動かしながらそんなことを言った。

「千葉君だつて、いつも寝てるじゃない」

「一応、授業は聞いているけどね」

「なにそれ」

私が笑うと、携帯電話の画面を見ながら彼も微笑んだ。

短い会話だつたが、何年か必要最低限のことしか喋つてこなかった私にとって、久しぶりの会話だつた。懐かしいとさえ感じた。

私と彼の会話が増え始めたのは、そのあとからだつた。

挨拶なんてろくにしなかった私だが、それから毎日するようになつた。彼に対してただけだけど。あいさつから、友達同士の人間が交わすような、下らない、他愛のない話まで。私たちは、言葉を交わした。

それに何か意味があつたわけではない。普通の人なら日常の範疇で終わることだろう。

だけど。

だけど、私にとってそれはとても 大切な時間で、幸せな時間だった。

話の話題など探さなくても自然に出てくる。そんな風にまで私は変わった。相変わらず、彼に対してただだけど。

そんな私に、彼はこう言った。

「別にいいんじゃない？高崎さんは高崎さんだし。無理に周りに合わせて変わろうとする必要はないと思うよ。それに、変わるチャンスなんていくらでもあるじゃない？それを見逃さなければきっと変わるよ」

と。

その言葉。

その一字一句が、どんなに私の心に響いたかは、想像に難くないだろう。

無理に変わる必要なんてない。

彼が泣き黒子をほころばせて柔和な表情を浮かべて言った、その言葉も励ましになり、私の自信になっていくけれど。

私は、むしろ彼が初めて見せたその表情に心を奪われた、んだと思う。

その言葉と一緒に彼の顔を思い出すと、胸が高鳴る。普段の彼からは想像もできない表情だったからだというのもあるんだろうけど、私でなくても女の子は彼のその表情には惹かれるだろう。

要するに、そういうことだ。

私は、彼に惚れた。

だから、『千葉と高崎はできているらしい』なんて噂が流れ、真相を聞かれるのは困ったけれど、不思議と嫌ではなかった。彼がそれをどう思っているのか、それが気になった。

一緒に帰るようになったのは、そんな噂が流れ始めた直後だった。週番になって最初の月曜日だった。私たちは出席番号が男女を別々にしたときに一緒になるので、当然週番などクラスの仕事は一緒

にこなすことになる。

月曜は授業が一般生徒下校時刻十五分前まで行われる。それから週番の仕事を済ませるとなると、夏が近く明るいとはいえ遅い時間になってしまう。そのことを心配したのだろう、

「高崎さん、家どっち？」

と彼は聞いた。

「瀬上の方」

「じゃあ途中まで一緒だ。送って行くよ」

「え、いいよ。千葉君自転車でしょう？」

とつさに遠慮して、私はすぐに後悔した。これで彼が引き下がってしまったらどうしよう、と考えた。

「大丈夫、押して行くし。時間も時間だしさ」

が、彼は引き下がることなく、私と一緒に帰ろうと言った。

「・・・ありがとう」

私はそれとなく言ったつもりだったが、心は躍っていた。顔に表れていたかもしれない。

それから週番は一週間続くので金曜日まで一緒に帰った。最後の金曜日、これでこの時間も終わりなんだな、と思うと寂しかった。しかし、そんな日に限って。

事故は起こる。

学校を出て五分ほど歩いていた時だった。周りが住宅街であるので、道が狭い。しかし、大通りが近く、車の出入りはそれなりに多かった。だから、そんな道をトラックが暴走してきたら避けようがない。そもそも、大型車の出入りは禁止されているはずだった。

しかし、あのトラックは走ってきた。

国道を回りこむよりも、こちらを通った方が近いと思ったのだろう。実際、時間は短縮される。だけど

飲酒運転をしていたとはどういうことか。

近道のことは酔った頭で考えられるのに、大型車進入禁止の看板は目に入らなかったというのか。

狭い道で、前から猛スピードで壁にぶつかりながらこちらに突進してくるトラックを、どう避けるというのだろうか。私たちに逃げ場は、なかった。いや、ないはずだった。しかし私の逃げ場は。

彼が、作った。

私をかばうようにして抱き込み、自転車を捨てて電柱の陰に走りこんだ。

彼が必死の形相で彼がそんなことをするものだから、私は抵抗しようとしなかったし、出来なかった。

たとえ、そのままでは彼が死ぬかもしれない、と分かっていたとしても。

ようやく事態に気がついた運転手が、ブレーキをかけながらクラクションを鳴らした。鳴らしてどうする。この状況を作り出したのはお前だというのに。

その時は、刻一刻と近づく。多分、私は分かっていた。

彼の体越しに、トラックのメーカーのロゴが見えるくらいまで近づいて、そして

ぐじゃっ。

それは、一瞬の出来事だった。

私の目の前は、真っ赤になった。

プロローグ：エリアV

「ようこそ、我らが“エリアV”へ」

その白く細い線が描くシルエツトはあまりにも細かったが、確かにそこに女性と思われる造形は存在していた。その色は白と黒の二色のみで、およそ色という概念が彼女の姿の上には反映されていなかった。

腰まで届く長い髪は風もないのに横に揺れる。色は分からないが顔立ちからしておそらく西洋系。髪の色は薄く、肌も白いはずだ。まつげは長く、二重の瞼が瞬きをするたびにそれは揺れる。

美しい、の一言に尽きる。

その人型は続ける。

「私はこのエリアの統括者^{ルイー}。周りの者たちには“ヴァルクユリア”と呼ばれています」

その女性　ヴァルクユリアは腕を両側に広げ、何かを説くようにこちらに話しかける。

「あなたは、選ばれました」

周りには、眼を開けていれば果てしなく続く白い開闢。そこには何もない。地平ですらも白く塗りつぶされ、空との境界が分からない。ただの白い空間。

眼をつぶれば、終わりのない黒い深淵。しかし、そこにはある。白い世界では存在しなかった地平線、雲のような靄が空と思しき空間に漂っている。黒き世界の土台。すこし向こうには建物のようなものも見える。

彼女が見えているのも、当然黒の世界だ。

俺が立っているのは、草はらのような場所。眼を開ければ感触されないそれは、眼をつぶると風になびく姿、互いがこすれ合う音も映し出される。

彼女は少し浮いている。存在が浮き立っているという現代語のそ

れではなくて、本当に浮いているのだ。

俺が立っているのが地面だとするのなら、そこから一メートル弱上のところに。しかし踵と爪先は水平でなく、つま先の方が若干垂れ下っているのを見ると、彼女が重力に逆らっているのだろう

こんなところに重力という観念があるのかどうかは知らないが。

「何にとも思いでしょう。突然の召喚の無礼はお許しください」
申し訳なさそうに目を閉じる彼女。

その顔に、どことなく懐かしさを感じる。

「あなたに、戦っていたきたいのです」

再び開いた彼女の眼には、真剣さが表れていた。

「百年に一度の戦争、どうしても勝たなければいけない戦いがあります。我々にとっても、あなたにとっても」

「現世での、支配権を争う戦いです」

「三百年来、あなた方の国のほとんどを我々が勝ち取ってきました」

「あなた方の平和と発展はあなた方の努力の賜物であることには間違ありませんが、同時に、あなた方の国が我々の統治下に置かれていたからでもあるのです」

「我々が行う統治とは、あなた方が行うような政治的なものではありません。もっと、本質的なものです」

「本質的？」

「本質的な支配　　いわば事象の管理です。運命や因果律

簡単に言ってしまうえば何がどんな風にどこで起こるかを決めるのが我々の仕事です」

「仕事？あなた達にそこまでの力がある？」

「左様。現に死んだあなたの魂をここに呼び寄せたのも我々に許さ

れた能力です」
チカラ

「死んだ？」

眼の裏に神経が行く。

蘇るヴィジョン。

ノイズがかかった映像。

引き攣った誰かの顔。

後ろから爆発のような衝撃。

朱に染まる視界。
あか

一筋の涙を眼の縁から流す少女。

重力に逆らえなくなる体。

耳に飛び込む怒号。

心配そうにのぞきこむ何人もの顔、顔、顔。

下側から。

ノイズのかかった視界すらも、浸食されて

「・・・・・・」

「思い出したようですね」

「俺は死んだのか？」

「ええ。残念ながら。六月十九日午後五時十五分三十七秒五〇。あ

「あなたの正式な死亡時間です」

「や」

「っぱり。」

明確に“死”という感覚すらなかったが、何となく「ああ、これは死ぬな」という感じはした。

それが、現実になつていているとは、思いもしなかったが。

「話を戻しましょうか。」

あなたが、この戦いに参加するのか、否か、ということを」

「参加もしくは不参加は自由です。あなたの意思に委ねられます」

「不参加の場合は」

「不参加の場合は？」

「そのままこのことは無かったことになります。同時に、あなたの魂が復活したこともなかったことになります」

つまり。

戦いに参加しないのなら、死ねと。

「そういうことになりましたが、一回復活した魂というのは扱いが難しいのです。」

もしかすると、ただ死ぬ方が幸せと思うような方向へ進んでしまいかもしれません」

彼女の言葉は、いいような不安を募らせる。

「参加の場合、一先ず現世に帰っていただくことになります。戦いは現世での“裏世界”^{アナザー・ワールド}で行われますので」

現世に、帰る？

それはつまり。

「俗に言う蘇りです。が」

「が？」

「……いえ。いいです。いずれ分かることでしょう」

「……?」

そういう含みのある言い方はやめてほしい。

けれど、それを聞くのを恐ろしいと思ってしまうている自分がいる。

「そして、アナザー・ワールド“裏世界”というのはあなたが今見ている世界。眼を閉じて見ている世界のことです」

「眼を閉じて見えるものと見えないものがありますね？現実世界は人間、あなたたちが作ったものですがアナザー・ワールド“裏世界”は我々が作った疑似の世界です。特定の人間が眼を閉じればそこにリンクするように設定されています」

「そこで戦うと？」

「そうです」

「誰と？」

「他のエリア 特に注意すべきはエリアAや です。彼らは、過激派の上に、有用な能力を持っている」

その言葉に、俺は耳を疑った。

「過激派とか穏健派があるんですか？」

「ええ。言ったとおり、我々がつかさどるのは因果律や運命。

それを争いにもっていきたがるうとする連中のことを我々は過激派と呼んでいます」

彼女の眼には。

怒りが表面に浮かんでいて。

その奥には

どこことなく悲しみが浮かんでいるように思えた。

千葉利明の事情

「ちょっと、何するのよ姉さん。私がそれやろうと思ってたのに」
「うるさいわね。普段はあんたたちがトシの世話してるんだからたまには私たちにも・・・」

「何をそんな子供っぽいことをいつてるの？」

「何を、って・・・姉さんもそんなとこで突っ立ってると私達でトシ兄とっちゃうよ？」

「・・・それは」

「もう、素直じゃないよねー、有紀姉さんは。カノ姉さんは素直・・・っていうか実直？っていうか欲望に忠実っていうんかねえ」

「ちよつと、失礼ね」

「あ！ 澄香が抜け駆けしてる！」

「え、別にそんなつもりじゃ・・・兄さん服脱がされっぱなしで・・・寒そうだったから」

「だからってそんなにくつつく必要ないでしょ！何も無い孤島じゃないんだから、肌で暖めあう必要なんてないの！」

「そうそう」

「・・・・・・」

うるせえ。とにかくうるせえ。

三人寄れば文殊の知恵というが、女四人集めれば鳥類の喧噪とでもいうのか。この状況は。

ここは都内の某国立病院。

搬送時、まさに虫の息だった俺は、それはもう全身ぐちゃぐちゃで、左腕なんてもう完膚なきまでに粉々に砕けていたそうなの。ちよつと大きさが。

それでも、致命傷だったのには間違いなく、病院を舞台にするドラマなんかでよくみられる、医者が親や保護者に対して「最善を尽くしましたが、息子さんは・・・」なんていうところまでいったら

しい。

なんでも、その「最善を尽くしましたが、息子さんは・・・」なんて医者がぬかしてる時に、俺の心肺機能は再び活動を開始。なぜか臓器なども完全にではないが生命には問題ないほどに回復していて、その「最善を尽くしましたが、息子さんは・・・生き返りました」になったわけで、手術は終了。っていうか、あけた穴をふさいただけらしい。それくらいいきなり回復して、医者としては気味が悪かったろうが、こっちとしても、家族としても、生きてるんだから万々歳だ。

で、しばらくは様子見ということで　突然の回復のメカニズムを少しでも明かしたかったのかもしれない　面会謝絶。しばらく医者とその額を突つき合わせる生活を余儀なくされた。だが、そのメカニズム解明という目的をその医者はあけっぴろげにおれの家族に口外したらしく、その間の入院費はタダ同然になるということで、おれの親は買収されたわけだ。特になんもされなかったけど。バリウムとか胃力メラとか飲むのがアレだったけど。

一週間続いた面会謝絶も昨日で終わり、公然とした個室に移された。ぐしゃぐしゃだったはずの骨もただの骨折程度になっており、入院は二週間ほどで済むらしい。そんな説明を聞いて、もう夏休みだなあなんて思っていると、千葉家四姉妹、通称（自称）利明護衛隊（即席）がやってきて、このありさまだ。護衛隊を名乗るならもつと静かにしてろってんだ。

まあ、うれしくないわけではない。

おれの両親　母親と父親は、現代風に言うなら『地味に』優秀で、容姿は『メチャ』いけている。息子のおれがいうのもなんだが、たとえば父兄参観などで、学校を訪れた親の顔ぶれを見ても、おれの両親は際立っていた。二人とも背が高く、スタイルがいいのだ。どちらも鼻筋がすっとしており、おれはあこがれの対象としてはまず親父を挙げるだろう。息子にそれほどまでさせるカリスマを彼は持っている。

そんな二人の遺伝を受け継ぐのだから、そのままでも十分なはずだ。しかし、おれの姉妹　　上から花音、有紀、弥江、澄香

はそれを拡大解釈してそれを受け継いだらしく。その容姿、身体および脳レベルは常人のそれを明らかに超えている。しかも、二人ずつ双子で似ているから、千葉四姉妹は近所でかなり有名だった。

都大会。これは、うちでは当たり前のように発せられる単語で、彼女たち全員が最低でも何らかの種目でそこまで行っている。運動神経が一番あると思われる花音ネエがテニスで全国優勝しそうだった、というのが最高記録。ちなみに、花音ネエはその試合の前夜に風呂で足を滑らせ、その捻挫が原因で負けたらしい。もつとも、捻挫なんて思い起こさせない試合だったかな。たしか6・5で惜敗だった。

そして、71.3。これ、なんの数字かわかるか？四人のある全国模試の五科平均偏差をまた四人で平均したものだ。四人そろって化け物だよな、ほんと。ちなみに、うちで一番優秀なのはいちばんおとなしくもある澄香で、一回、超難関といわれる模試　平均点が三十点くらいのテスト　で、すべての科目に於いて八十点を越し、数学なんか百点を取っていて、偏差値が100を超えていた気がする。勘弁してくれ。

そんな逸話があるから、千葉四姉妹はかなり有名だ。加えて、親譲りの容姿もあり、かなりモテる部類ではある。が、彼女たちは男と別れたことがなく、男つ気が全くない。たまに花音ネエや弥江が男友達を呼んできたり、そいつらと遊びに行ったりすることもあるがそれつきりで、有紀ネエと澄香にいたってはあまり男子と談笑している場面すら見かけない。

まわりの人間は口ぐちにおれがいるからだというが、彼女たちが男に走らないのとおれがいるのでは全く関係のない話だ。と思うのだけど。最近そんな気がしてきてなんか不安だ。彼女たちの人生を狂わせたらしよう、なんて思っているわけで。

で、まあおれはみんなのあこがれ千葉四姉妹の全員に介抱されて

るわけだが。

このあと、鵜方たちもくるんだよなあ。

クラスメートがこの状況を見たらどんな顔をするか。

おれ、ハブられるかも。もともとみんなとつるんでいるつもりはないが、マジで口をきいてもらえなくなるかも知れん。

「なあ、姉さんたち、いつまでいるんだ？」

「ん？ずっと」

「ふうん、ずっと・・・って、ずっと!？」

「何よ兄さんそんな驚いちゃって」

「いや、お前な。今のは普通驚くぞ。学校があんだろが」

「ここから通うし」

「はあ？教科書とかどうすんだよ？」

「二週間くらいまとともに勉強しなくても私たちは大丈夫さ」
う、確かに。

「着替えは？」

「もついろん・・・」

「もってきてまーす！」

やっぱりな。

ってことはやっぱり・・・

「澄香や有紀ネエもここにいいのか？」

澄香は首肯し、有紀ネエは、ん、と短く返事をした。

「寢床は？　どうするつもりだよ？」

「リネン室から寢袋借りてきた」

手の速いやつだ。こんなとき、優秀な姉妹って、微妙にいや。

「はあ・・・」

どうしよう、マジで。

窓の外を見れば鵜方たち来ちゃってるし。なんか見知らぬ女子もいるし。

あーあ。終わったな。

なんて心の中でぼやいているおれをよそ眼に、四姉妹は甲斐甲斐しくおれの介抱を続けていた。

焼き付く視線・ジェラシー・ストーム

ベッドの後ろから差し込む陽光が、俺の汗の滴りをせかさように首筋を照りつける。

「・・・・・・・・」

無意味な沈黙が、続く。

ベッドから上半身だけを起こしている俺を、殺伐とした雰囲気包む。ベッドを囲む八人は、目に明らかな殺意を浮かべていて、目を合わせただけで殺されそうだったので、俺の頭はうつむいたままだった。

「なあ・・・・・・・・」

不意に八人のうちの一人、俺の悪友、鵜方が口を開いた。

「あのさ、千葉。おれは今、ものすごい後悔をしている。なんだか分るか？」

「・・・・・・・・いや」

俺はゆっくりとかぶりを振った。もちろん、顔はうつむいたままだ。

「そうだな、分らないよな。人間ってさ、自分にあるもののありがたみには気づかないけど、自分にないものに異様に憧れるんだよ」

「・・・・・・・・そうだな」

汗をこれでもか、というほどにかき、乾いた唇と喉を懸命に動かして俺は答える。こいつが、何を言わんとしているかは大体分かる。

「おれが何を言いたいか、分るよな？」

視線という名のレーザーが俺の首筋を焦がすように睨みつけた。

「あ、あのさ。言いたいことは分るんだけど、あいつらが勝手にやってるだけで居たら居たでうざいとおも」

うぞ、と最後まで言い切ることは出来なかった。

「千イ葉ア ああああああ！！」

「わっ！？」

鵜方ではないまた別の奴が、発狂したように叫びだしたからだ。

俺が入院している部屋が、家族――主に姉と妹だが――のお陰で個室に泊まらせてもらっている。ので、相部屋の人が居なかっただけ良かったといえれば良かったのかもしれない。

その叫びは、かなり悲痛な感情に彩られていた。

そいつは、俺がほぼ回復したとはいえ一応病人であることを完全に忘れ、入院中の胸ぐらをつかんで揺さぶった。その頬にはうつすらと涙が一筋。

「お前、お前なあ！」

「うあああう」

胸ぐらを掴まれ、首がガクガク揺れている状態なので、まともに口が利けない。口を開いても意味を為さない言葉が口を衝いてでる

だけだ。

「あんな美人の姉妹がいるだなんて、一言も言っていなかったじゃないかあ！」

何で一言も言ってくれなかったんだよ、とそいつは続ける。

「いや、言うのはちよつと・・・」

俺にとってはトラウマを若干含んでいるし。

それに、あいつらは外面がいいだけで、家では我が儘を尽くしている。勝手に俺の布団に潜り込んできては子守歌を歌えだの、成績が良かったから褒めるだの、頼みごとをすればキスしてくれるとかほざき始める。家事とかは分担してやってくれるし、仲が悪いわけではない、という点では幾分かマシなのかも知れないが、とりあえず、年頃の青春真っ盛りな少年にそういう赤面するようなことを要求するのはやめてほしい。

兄弟の話をするときには、皆たいてい彼らを褒めたりはしないだろう。特に、男はそいつが姉であろうが兄であろうが、弟であろうが妹であろうが、プラスのイメージの言葉は出てこないことが多い。

そんなわけで、俺が姉妹の話をしようものなら、そういうことを話さないわけにはいかず、家の恥をさらしたくない俺は、誰にも――相談所なんかにも――打ち明けることができず、一人でトラウマを抱えているわけだ。

そんな努力をこいつらはちつとも分かつちやいない。代わりたいたいなら代わってやるよ。・・・どうせ、アイツ等が許しはしないだろうがな。

「今からでも遅くはない、誰か、一人でもいいから紹介してくれ！」

「あ、テメエ、抜け駆けを！」

「うつせえ！お前はメス付きだろうが！」

「彼女たちにお近づきになれるならば、俺は――」

などと、すごい話にまでなっている。

別に紹介するのは構わないんだが、どうせ結果は見えている。

「それでもいい、俺にチャンスを！可能性を！慈悲を！カノジヨを
~~~~~」

ください、と最後まで言い切ったところで、そいつはリノリウム  
の床に土下座までし始めた。ぬう、どうやら、本氣らしい。

そこまで言われては、今更断ることはできない。というか、断つ  
たら八人の集中砲火を受けてしまいそうだ。

「当方は千葉家四姉妹の紹介の仲介のみをするものであり、その後  
の損害、被害、傷害、生涯、障害について、いっさい責任を負いか  
ねます。それでもいいという人、身命をなげうつ覚悟があるという  
人は、前へ」

俺が不吉なことを言ったからか、前に出てきたのは三人だけだっ  
た。

## 哀愁の背中 プロンプト・ティアーズ

「いいのか、本当に？」

ゴクリ、と固唾をのむ音が俺達しかいない病室に、低く響いた。

「ああ・・・覚悟はできている」

「右におなじ」

「古い関係よりも、俺が求めるのは、レボリューション革命、だ」

三人はそれぞれ首を力強く縦に振った。

ヤバい、目がマジだ。据わってしまっている。適度な「イけるんじゃないか」という期待と「ダメかも知れない」という諦観の念が程良くその瞳を彩っている、んだと思う。単に、ウマく行ったその後の妄想に興奮しているだけなのかも知れない。その証拠に、三人とも鼻息が少々荒い。今脳味噌を切り開けば、きっと18禁ワーズに縁取られた、ピンク色の渦が飛び出てくるに違いない。

「何度も言うが、俺は事後のお前たちの障害や傷害、および生涯について一切の責任を負うつもりはない。たとえ、癒しようのない傷トラウマを負ったとしても、こちらは関与しない。ケアや慰め、フォローも一切ないと思ってくれ・・・それでも、いいか？」

三人は、俺がつきあってきた　つつつても、二ヶ月くらいだが　それまで見たことがないくらい、そして多分、これから見ることもないだろうというくらいの真剣な表情で、強く頷いた。

「ああ」

「覚悟は出来ている　結果はどうあれ、俺たちはやるしかない」  
「何かを得るには、犠牲を厭わないことも時には必要だ。俺はそう

考えている」

・・・そんなに重い話でもないんだよなア、これ。ただ単にナンパが成功するかどうか、しかも、友達の姉妹を、だ。なんだか台詞のこの部分だけを聞いていると、何かシリアスな展開が待ち受けていそうな感がある。

ぶっちゃけ、俺の予想では弥江か花音ネエと遊び友達になる、というのが精一杯だと思う。澄香は俺以外の男とまともに向き合うことすら出来ないし、有紀ネエは多分奴らに心的外傷を負わせる可能性がもつとも高い。その物言いと冷たい目は、俺と親父以外のすべての男に対して向けられる。俗語で言うツンデレだとか、そんなものなのだろう、多分。親父に対しては普通だし、俺に対しては普段の態度が信じられないほどに甘い声と表情をする。普段からそうしていればいいと思うんだがな。

「でさ、聞くの忘れてたんだが、お前ら、誰がいいんだよ？」

今まで俺は自分の姉妹の存在を大っぴらにしたことがなく、よってこんな風な展開を経験したこともなかったので、やつらの身を案じるあまり（結構マジ）、やつらが誰と仲良くなりたいのか、つまりは誰狙いなのか、というのを聞くのを忘れていた。

「あの背が高いハーフっぽいお姉さん！」

「あ、おれも多分それ」

「俺はあれかな、眼鏡かけてておとなしそうな子かな」

・・・

三人とも、見事に大ボスを引き当てた。

見た目と中身は必ずしも一致しない、というのがこの世の理であ

るということを理解しているのはこの中で俺だけなのだろうか。こいつらみたいなを見てみると、なるほど世界はすでに欺きの上にある、とかいうどっかの学者さんの格言みたいなのも本当なのだと頷ける。

ちなみに、「背の高いハーフっぽいお姉さん」は有紀ネエ、「眼鏡かけてておとなしそうな子」というのは澄香のことだ。ウチの姉妹の中で、どちらかというこの二人は「モテる」方。弥江や花音ネエは、「好かれる」方。

まあ、それでも全員、モテることには変わりないんだが、公共の場 特に海とかテーマパークとか に行った時に、声をかけられやすいのは前者の二人。後者の二人はアクティブなタイプで、細い。髪も短く、ボーイッシュ。が、有紀ネエと澄香はグラマーとまでは言わないが 俺はいまいちああいう言葉の基準がよくわからない 出ているところが出ていて、ひっこむべきところは引っ込んでいる。一言でいえば、モデルっぽい。外見<sup>そとみ</sup>だけ見たときにどちらが好印象を受けるかは一目瞭然だろう。

有紀ネエは初対面の男に対しても信じられないほど冷たい対応をするからどっかに連れて行かれたりすることはないが、問題は澄香で、知らない男には話しかけられただけで委縮してしまう。彼女もスポーツは得意だが力は強くないので、これまでに何回か脳みその腐った鬼畜に連れて行かれそうになったことがある。ま、その他の四人 俺も含む がすべて未遂にして、そいつを再起不能にするけどな。あえて、男子諸君のためにどことは言わないが、たぶん一生後悔する部位だ。

「あー、えーと、本当に、いいのか？」

が、こいつらに今更そんなことを言っても聞かないだろう。先ほどの諦観はどこへやら、具体的な目標が出てきたからか、その眼は



すでに期待だけが宿っている。

「俺たちはやるぜ！」「」

ヒヤッホーウ、なんて病人にはついていけないテンションを振りまく。三重奏。

「・・・いいんだな？」

念のためにちゃんと聞いてやっている俺の好意をちつとも汲もうとしない。三人で円陣を組んで、「やるぞ！」「オーツ！」「なんて気合いを入れている。お前ら、ここは病院だぞ。俺は別にかまわないが、静かにしろってんだ。

「あー、悪い。鵜方、有紀って人と、澄香ってやつを呼んで来てくれるか？たぶん、この階のロビーの自販機の前で四人でたむろしてと思う。あと、他のやつらは出て行ったほうがいい」

・・・こいつらの死にざまを見ることになるから。

俺が目で語っただけで、例の三人以外のやつは、俺の言わんとすることがわかったらしい。たぶん、こいつらはどうせ駄目だということが分かっているって自薦しなかったやつらだ。

「がんばれよ・・・」

「幸運を祈る」

「骨は拾ってやるよ」

なんて、声をかけていくあたりこいつ等はいいやつだ。

鵜方が率いる、例の三人以外のやつらが出て行って、五分くらいしたあとだろうか。

こんこん、とドアがたたかれる音がして、  
「利明、入るよ」

と、有紀ネエの声がして、若干ドアが開けられる。

ふおおお、なんてさっきの二人の鼻息が荒くなる。

たしかに、顔だけ出していると有紀ネエ、可愛いかも。つ  
て、そんなことではなく。

「有紀ネエ、ごめん、ちょっと」

「どうしたの？ どこか痛いのか？」

ちなみに、このときの声と表情は普通の男に向けるものではなく、俺だけに向ける、いわば甘いマスク。それだけを見ているこいつら二人は幸せだったろうにな・・・これから現実を見ることになるなんて。自分で落とし穴を掘って自分で落ちるガキみたいだ。

有紀ネエが、本当に心配そうな顔をして、ベッドに駆け寄ってくる。艶々した漆黒の髪の毛が振りまく甘い匂いは、たぶんシャンプー。俺も同じものを使っているはずなのに、それを発する人が違うとやっぱり感じるものも違う。

「ああ、いや、そういうわけじゃないんだ」

ベッドの横にしゃがみ、ベッドの縁へりに手をかけ、やはり心配そうに俺の顔を見上げる有紀ネエに、先の二人のほうを見るように指をさした。

「・・・？ どうしたの？」

「えと、あの、大変言いにくいんですが、その・・・」

俺がしどろもどろしているのを見かねてか、そいつらは自分で勝手にしゃべりだした。

「われわれが頼んだのであります！」

「は？」

有紀ネエが意味がわからない、という顔で、二人のうちの右側  
誰だったか、田渕とかいうやつだったか　　のほうを見た。

「われわれが、貴方様にお近づきのチャンスを与えるように彼に頼んだところ、実に快く快諾を・・・」

え？俺、快諾なんかしてない・・・って、有紀ネエ、そんな怖い表情で見下ろすなよ。たしかに悪いとは思ってるけどさ。

「ふうん？　あなたたち、私とお友達になりたいとか、そういうお話なのね？」

「は、その通りで　　」

「ごめんなさい、私、好きな人がいるの。そんな話を受けたら、その人を裏切ってしまうことになる」

目の前でね、と有紀ネエは小さく付け足した。

本当に小さな声だったので、たぶんやつらには聞こえていない。

目の前で、ってここにはそんなやついるようにとは思えないけど。というか、有紀ネエに好きな人がいるってこと自体、かなり驚き。

「利明、用はこれだけ？」

立ち上がった有紀ネエが、こちらを見下ろす。さっきの怒気を孕んだ表情は消え去っていて、俺はとりあえず息をつく。

「え、あ、ああ。うん。ごめん、有紀ネエ」

「いいわ別に。このくらい、慣れているし、それに　　」  
それに？

「なんでもないわ。うん、なんでもない」

そういつて首を振る彼女の顔には、なんとなく笑みが浮かんでいるように見えたが、俺が下から見上げているせいだったのかもしれない。

「じゃあ利明、何かあったらすぐ呼んでね。お友達が帰ったら戻っ

てくるわ」

そう言っ て手を後ろ手に振りながら彼女は病室から出て行った。

二人は、あまりにも唐突に、迅速に断られてしまったことを受け入れられないというか信じられないらしく、しばらく呆然とたたずんでいたが、しばらくすると、正気に戻ったようで、二人で肩を組んで病室の隅っこでいじけ始めた。

有紀ネエお得意の「フリーズ・トーク」が出るかとひやひやしたが、そんなこともなく、やつらの傷は最小限に抑えられたようだ。俺は、有紀ネエの「フリーズ・トーク」をくらって本当に精神科医通いを強いられることになった哀れな人間を知っている。

「・・・馬鹿な。おれの無敗記録が・・・」

最初に声を発した、田淵がそんなことを呟いていた。たぶん、ナンプアの勝敗記録だろうが、今回は相手が悪かったとしか言いようがない。

「・・・あれ？ おれは？」

そうそう。

忘れていたが、澄香は何の話をされるか、呼び出された時点で察したらしく、花音ネエたちと一緒にいたらしい。

話すらさせてもらえなかったそいつも加わって、三人で部屋の隅でいじけ始めた。

哀愁の、背中。

俺は、初めて人の悲しみに共感して涙を流した。



哀愁の背中 プロンプト・ティアーズ (後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。

まだまだ未熟ですので、ご指摘等、あったらお願いします。

## グッバイ・マイセルフ - 罪の代償 -

・・・どうしよう。緊張する。

未だに信じられない。絶対、生きてはいまいと思っていたのに。彼が奇跡的に息を吹き返した、という連絡を病院で知り合った彼の母親が涙ながらに電話してきたとき、私の心は、変に跳ね上がった。

奇跡に対する喜びと、彼に合わせる顔がない、という背徳感。

その両方を受けたからか、私の心臓は、跳ね上がったと言うよりも、その場に強く叩きつけられたように鳴動した。

彼が生き返ったというのは素直に嬉しい。嬉しいはずなのに、心は躍らなかった。

もちろん、私が殺した訳ではない。

だけど。

だけど、何も出来なかった。

否、何もしようとしなかった。

私が、殺したも同然だ。

彼が死ぬのはイヤだった。人付き合いが苦手で、引っ込み思案で、自分でも嫌になるくらい、根暗だった私に出来た、初めての男友達。知り合って半年も経たないが、私は彼と一生とまではいかなかったも、出来るだけ長く関わりを持ちたい、そう思っていた。

あの笑顔を、普段誰にも見せないようなあの表情を、また見たいと思っていた。

私は、理由もなく、彼が好きだった。

でも。心ではそう思っている。痛いくらい、自分の心がそう自

覚していても。

体は、動かなかった。

彼を、自分の身を挺してまで、守ろうとすることは出来なかった。彼を好きだ、守りたい、という気持ちよりも、自分の身が可愛いという念の方が勝っていた。

彼を死なせたくはなかった。

だけど、それ以上に、私は自分が死ぬのが嫌だったのだ。

私は。

私は、本当にどうしようもない、大馬鹿だと思う。

自分でも思う。コイツは救えない、と。

私のことを自分を犠牲にしてまで守ろうとしてくれた彼は、きっとそんなこと、気にはしていないだろう。

だからこそ、合わせる顔がない。

思い出す。あのときの、彼。

頭に突如降ってきた温かい、粘性を帯びた液体。

彼の、血。

私を強く握っていた彼の腕が悲鳴を上げ、私の右側で氷が床に打ち付けられて砕け散るような音がした。

骨が、碎ける音。

強い衝撃が、彼を襲った。私にもその衝撃の余波が伝わってきたが、その衝撃は微々たるものだった。が、押し出すように彼が息を



苦しげに吐く。

肺が、潰れた。

横にあった電信柱は、折れてトラックの助手席と荷台に寄りかかるようにゆっくりと倒れた。その音で、周辺の住人が窓から顔を出したり、家を出てこちらをのぞき込んでいる。

こちらの様子に気づいたらしい一人が、「救急車を！」と叫ぶ。

「かつ・・・、た、か崎、さん？」

「千葉君！？ ダメ、喋っちゃ！ 今、救急車がくるから・・・」  
体を支えることが出来ず、私に寄りかかっていた彼が、私の耳元で呟く。その吐息は、驚くほどに熱かった。彼の生气という生气を、すべて含んでいるかのように。

「ぶ・・・じ？ みたいだね・・・よかった」

ホツとつくそのため息も、火傷するくらいに、熱い。

「喋っちゃダメだったら！ すいません！手伝っていただけますか  
！」

集まり始め、こちらを遠巻きに眺めていただけの野次馬に私はほとんど怒鳴りつけるように呼びかけた。

ハツとしたような表情でこちらに駆け寄ってくる人たち。出遅れた人は、傍観に徹するか、周りの人と憶測を並べ立てて喋っているだけだった。ふざけるな。

思えば、このときの私にはいつも人に話しかけるときに感じる、妙な恥ずかしさはなく。迷うことなく言葉を紡げた。それほど、必死だった。

駆け寄ってきてくれた人たちの手を借り、彼をとりあえず道路に

横たえさせる。さつきまで荒かった呼吸は、もうすっかり大人しくなってしまうていた。

終わりが近いのだ、と無駄に聡い私は、悟った。

悟ったところで、何の意味もない。分かったところで、彼は助からない。

「千葉君！千葉君！しっかりして！」

彼に呼びかける。

私の声は、きつと悲痛に彩られていたはずだ。

彼は、弱々しくもきちんと頷き、私が握った手を、同じく弱々しくではあるがきちんと握り返した。

「うつ・・・」

そううつめいた声が後ろで聞こえた。

例の、トラックの運転手だった。

壁にぶつかった際、割れた窓から吹っ飛ばされていたようで、道路の隅っこ、トラックの陰に隠れていて、野次馬もその存在に気づかなかったようだ。

やはりというか、無事ではなかったらしく、右腕をだらりと垂れ下げるようにして、左腕だけで体を起こす。

それを助けようとする人間は、その場には誰一人としていなかった。そいつの周りには直前まで飲んでいたのだろう、ひしゃげたビール缶が2本転がっていた。飲酒運転の何よりの証拠。

そいつは、何の言葉も発しない。

一度こちらを見、目を丸くしたが、すぐに反らした。

一応けが人だからか、誰もそいつに対してあからさまに怒鳴りつけたりはしなかった。が、その周りの人間の視線は語っている。

「お前がやった。お前の愚考のせいだ」

と。

私にはそんなことはそのときはどうでも良かった。

次第に薄くなつていく彼の呼吸と、弱くなつていく手の力を必死に止めようとしていた。

「千葉君！ 千葉君！ しっかりして！ もうすぐ救急車が来るから、それまで頑張つて！」

それでも、衰弱は止められない。呼吸は薄く細く短くなり、焦点の定まらない目が閉じかけ、私が持ち上げるようにして握る手も、私が離せば落ちてしまいそうだった。

「イヤ、嫌だよ・・・」

居なくなつちゃ、やだ・・・と言い掛けたとき、私の目はいきなり曇った。

あまりにも久しぶりだったので、最初自分に何が起こつたのか分からなかった。

涙が、出た。

何時頃からか、涙を流さなくなったのは。それすら覚えていないほど、最後に泣いた記憶は古い。

彼が死ぬのは、やはり嫌だった。

でも、もう遅いというのも自分で分かっていた。

この結果を招いたのは、自分なのだから。

多分、それが悔しくて、涙を流した。

握った手は離さなかったが、もう一方の手で目を拭いながら、メガネを外して私は泣いた。彼の額と頬に数滴、流れ落ちたが止めどなく流れる血で、すぐに紅色に染まっていた。

「た、かさ、き、さん・・・」

まだかろうじて息を保っていた彼が、私の方に顔を向けて、言った。

「メガネ、外したほうが、ぜ、つたい、カワイい・・・」

よ、と最後まで彼は言い切らなかった。そこで、意識が途絶えた。

手は、離さなかった。離して落ちてしまったら怖いから。  
力を失って首を横たえる彼の顔は、寝ているときよりもずっと、  
安らかだった。

あれから、すぐに救急車はやってきた。

病院に運び込まれ、手術室の前で30分ほど待っていると、彼の父と思しき男性と、母親らしき女性、そして、二人ずつ雰囲気似た四人の少女、とずいぶん多かった。親戚だろうか。

私は、彼らが来てから状況説明をしてすぐに帰った。

彼の死に、立ち会いたくなかったから。多分、そんなことを考えていた。

だからだと思う。

私は、自分の身のかわいさに、彼を見捨てたようなものだ。私は、このような仕打ちを受けて当然とも言える。

彼に

「君、だれ？」

と心底いぶかしげな表情で問われても、おかしくない。

彼に言われたとおり、メガネを外したのは原因ではない。

それだけ、私の行動は罪深かったのだ。

彼が忘れたくなるような行動をとった人間が、私なのだから。

## グッバイ・マイセルフ・罪の代償 - (後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。

ご感想等、お待ちしております。

しばらく、シリーズが続きます。ご容赦ください。

## 失くしたモノと ・フオゲツタブル・メモリー・（前書き）

最近、読者数がかなり増えました。

理由は分かりませんが、とにかく読んでいただいております。ありがとうございます。

## 失くしたモノと　・フォゲッダブル・メモリー・

「君、だれ？」

俺は、そう答えるのが精いっぱいだった。

その相手は、俺を執拗に　　と言ってしまつと彼女がストーカー  
ーみたいだが、俺が有段者だという噂をどこから聞きつけてくれ  
ば、勧誘もしつこくなるだろう　　弓道部に誘ってきた二年生の  
女王将、宮城景さん。ではなく。

その隣、性格は控えめだと空気で読むことができる。言つてしま  
えば、内気そうな美少女。

艶がかつた髪の毛を後ろで縛り、左に流すという髪形で、前髪は  
額を適度に出すように開いている。切れ長ではあるが大きな瞳が印  
象的で、美少女というよりは美人、という表現のほうが相応しいか  
もしれない。着物が似合いそうな、そんな感じの少女。

「　　」

宮城さんに連れられるようにして病室にはいつてきた彼女は、俺  
のその言葉を聞いて息を呑み、瞳を潤ませた。

その瞳には、まるで、俺に話しかけるべきではなかった、とでも  
云うような後悔の念、そしてよく分からないが、自責の念。その二  
つが、交互に彼女の瞳の上に浮かぶ。

「何言つてんだ、千葉、照れてんのか？高崎さんだろ？メガネはず  
しててさ、大分印象が違ったから最初は分らなかったけどさ」

印象？

メガネ？

・・・違う。

そんな、こと。

そんな、もの。

そんなわけ。

「違う。そんなわけ、ないだろう・・・」

「はあ？ 千葉、どうした？ この子は高崎さんだよ、なあ？」

高崎と呼ばれた少女に、鵜方はうしろから話しかける。

彼女は、その言葉に全く反応しない。俺のほうに視線を向けているだけだ。

睨むでもなく、見詰めるでもなく、俺のほうに視線を向けているだけ。その視線の線上に、俺がいるだけ。彼女の瞳に俺ははたして映っているか。きっと、うつってはいない。

違うと言ったのには、理由がある。

彼女が、俺の中での高崎という少女でない、というわけではない。彼女は周りのやつらから高崎と呼ばれているし、そこを俺が否定する由はない。きっと、彼女は高崎という少女で間違いないのだろう。違うといったのは、印象だ。

印象、とりわけ、一個人に対するものは、そいつと付き合って

交際という意味ではなく、だ  ある程度そいつに対して築き上げられるイメージというものを印象というのではないか。俺には、それがない。彼女に対する、イメージがないのだ。

「あいつ、印象が変わったよな」

なんていうのは、ある程度そいつを知っていないと通じないセリフだ。

初対面のやつには、その印象が変わった姿が、第一印象、ファースト・インプレッションとして刻み込まれる。

が、さっきも言ったように、俺には予め築き上げられたイメージというのが存在しない。

それはなぜか。

簡単だ。



彼女とは、これが初対面。

俺が、彼女を知らないから。

「しつれいしまーす・・・」

そんな感じで、来客をし知らせるドアのノックと、控えめな声が聞こえたのは、先刻の事件から少し経った頃だった。

どのくらい経ったかというと、心に傷を負った奴らが立ち直り、その哀愁溢れる姿に涙した俺だったが、その涙もすっかり引き、目の赤みも引いてきた頃。

奴らは、アクシデントをやり過ごし、無傷なままの連中と一緒に、四姉妹のうち好かれる方、花音ネエと弥江との談笑に興じていた。

彼女たちの持ち味は、ジャンルを問わない持ちネタと（アホなイメージが先行しているかも知れないが、頭はいいのだ。くやしいけど）、高い適応能力。初対面の奴らとでも、10分くらい話せば相手の方もすぐ打ち解ける。

それに、彼女たちには苦手なタイプがすくなく（極端なアキバ系はパス、だそうだ）、守備範囲が同年代のお年頃的女子に比べて圧倒的に少ないのも、彼女たちが好かれる理由。通訳とかに向いてそうだな。あとは、テレビリポーターとかタレントとか。

で、あとの二人はどこに行ったかというところ。

主に俺が、談笑している男子たちの射たい（痛い）視線を受けながらだったけど、やっぱり俺のベッドの両脇にスタンバイ。

うち、澄香は、男子が持ってきてくれた果物を片手間に剥きながら、俺と話をしている。手元を見ずに、リンゴの皮を剥く様は、すごすぎて逆に滑稽に見える。

そして有紀ネエはというと。

俺の腿――こういうのは膝枕ならず、腿枕とでもいうのか？――を、頭に敷き、放っておいたらとろけて落ちてしまっくんじやないかというくらい、無防備にリラックスした顔でうつらうつらと寝起きの間を行き来しているが、すぐに寝てしまいそうだ。

普段居眠りなどしない有紀ネエが、こんなふうにつつらうつらとしているのは、きっと、かなりの疲労がたまっているからだ。

俺が病院にかつぎ込まれたとき、一番に血相変えて飛び込んだのも有紀ネエだったらしいし、俺の輸血のために一番血を抜かれたのも有紀ネエらしい。

千葉家長女である有紀ネエは、父親を除く（当然、俺も除く）ウチの家族の中で、一番の常識人。まあ、そうなると俺のカテゴライズでは母親も残りの姉妹ともども変人という扱いになっているわけだが、それは今は置いておくとして。

有紀ネエは他の姉妹のように理不尽な要求――女馴れしていない高校生には、とてもとも出来ないようなヤツ――も滅多にしていこないし（たまに連中に唆されてやることもある）、家事をしている俺をよく手伝ってくれる。

普段男に対して冷たい態度を取る彼女を知っているからかも知れないが、俺が一番優しいと思うのも有紀ネエ。家事を手伝ってくれるのももちろんそうだし、勉強も見てくれる。

また、夜遅くまで勉強していると、よく夜食を作ってくれたりもする。有紀ネエお手製のホットチョコは、甘い物が苦手な俺の、唯一の甘味。あれ飲むと、すごい落ち着くんだ。ついでに、勉強も見てもらう。

俺が学校で寝ている割には好成绩をキープしているのは、ひとえに有紀ネエのお陰。本人はそう思っていないかも知れないが、少なくとも俺はそう思っている。

一週間面会謝絶に一番反対したのも有紀ネエだったらしいし、学校でも家でも一番そわそわして落ち着かなかったのも有紀ネエだった。

たそうだ（花音ネエと有紀ネエは同じ大学に通っている。栄えあるＴ大だ）。

多分、俺のことを本当に一番に考えてくれているのは有紀ネエ。他の奴らは、何に対する気持ち先走るのか、鵜方たちが来る前と似たような状況を作り出す。有紀ネエは、それが俺のためにならないことが分かっているから、参加しない。・・・まあ、止めもしないんだけど。

最近、将来の相談にも乗ってもらっている。その話を聞くときの有紀ネエはとても嬉しそうな顔をする。やはり、下の兄弟が語る夢というのは可愛いのかも知れない。俺も、澄香や弥江の話を聞いていてそう思うしな。シスコンじゃねーぞ。

そんな、姉としての優しさが、俺にとってはくすぐったく、とても温かい。

ついに、有紀ネエが寝息を立て始めた――涎が垂れそうだったので、拭ってやる。こうして見てると、有紀ネエも普通の女の子だし、十分可愛いんだけどな。物言いと態度をどうにかしないと。

心配をかけた、という詫びを込めて、腿の上で気持ちよさそうに寝息を立て始めた彼女の頬と髪を折っていない右手で撫でてやる。

俺の手元を見てはすぐに戻すという行為を残りの三人は繰り返ししていた。俺の左腕、そんなに痛々しいかな？　すこしシヨック。

「しつれいしまーす・・・」

そんな控えめな声と、ドアのノックがしたのは、平穏な空気が充滿しきつてからだった。そのあと、事態が思わぬ方向へ転がっていきなんて、その平和な空気に酔っていたそのときの俺は、知る由もなかった。

「おそらく、記憶喪失でしょうね」

俺の目の前の、白衣を着た女性は言った。

俺の担当医、萩原麻貴那さん（年齢不詳）。27才らしいが、花音ネエの予測によると、三十前半くらいではないか、ということだった。27でも十分通じると思うけどな。

けだるそうにポケットに手をつ込み、レントゲンの写真を何枚か片手でもって、それを眺めながら彼女は言った。

「脳に特に異常はないけれど、あなたたちの話を総合するにそう言うことになるんでしょう。というか千葉くん、あなたは生き返ったこと自体が奇跡だからねえ。記憶喪失だなんてベタな症状を引き起こされてもこっちは驚かないのよ」

・・・なんだ、今の医者とは思えない台詞。

別に俺はあんたら医者を驚かせるために事故にあつたわけでもないし生き返つたわけでもないんだが。

俺の肩を握る有紀ネエの力が強くなつた気がする。上を仰いで、目で必死に止めた。

「そういつてもねえ。この前の奇跡の回復に比べたら、どうつてことないわよ」

「どうつてことないって・・・」

あまりにもいけしゃあしゃあと言うからか、宮城さんも怒れないようだった。

「とにかく、脳に支障は全くない。あんな事故にあつて、何でこんなに綺麗なままなのかが不思議なくらいにね。傷も、異常も一つもないわ」

「じゃあ、原因はなんなんですか？」

鵜方が聞いた。

後ろにいたのでどんな表情をしているか分からない。だが、多分声音と口調からして難しい顔をしているんじゃないかと思う。

「うーん、と。まあ、原因は色々考えられるんだけど・・・まあ一番ありそうなのは、千葉クンの脳が一時的に麻痺しているんじゃないか、ってところかな」

「麻痺、ですか・・・」

「でも、その割には記憶を失った部分がピンポイントすぎるのよねー。さっきの簡単なテストなんだけどさ、あれ、あなた満点で脳の考える部分には全く異常がないのよ。」

失った部分があるかどうかは知らないけど・・・この調子だと、多分、あの子一人だけの記憶がないんでしょうね」

うしろで、少し息を呑む音が聞こえた。

大丈夫、あなたのせいじゃない、と萩原さんも宮城さんも高崎という少女に言った。

うーん、と難しい顔をして萩原さんは何かを考えている。

「お姉さんたちの話だと、あなたは全く女っ気がないっていうことだったんだけど・・・」

「よけいなお世話です」

俺はてっきり彼女が冗談で言ったのかと思って、すこし笑いながら言ったのだが、彼女の真剣な表情は崩れなかった。

ていうか、姉さんたちそんなこと医者に話すなよ。上を見上げると、有紀ネエは全く悪びれた風もなく、俺を見返してきた。その隣の花音ネエは、にやにや笑いを止められないでいる。・・・帰ったら一発殴ることにしよう。

「ねえ・・・」

彼女は、真剣な表情を崩さないまま、また俺に問いかけてきた。

俺は、さっきの笑みが顔から完全に消え去っておらず、

「あなたたち、付き合ってたりにしてなかった？」

その問いで、完全に消え去った。

失くしたモノと - フォゲッタブル・メモリー - (後書き)

メインの話になかなか入れず。  
もう少し待っててください。

## 大切なモノと・サムシング・プレシヤス・

「え、そうなの？」

その俺の台詞は、さぞ間抜けに聞こえたことだろう。

というか実際、俺は間抜けな面をしていた。実際に鏡を見ていたわけではないが、顔の形や筋肉の張り具合やなんかで大体分かる。

「ふむ。やっぱり、彼女に関する記憶は一切合切消え去ってるみたいだな」

腕を組んだ鵜方が、難しい顔をして言った。

ところ変わってここはまた俺の病室。なんか、いつのまにかかなり時間が経っていて、鵜方以外の男子は全員帰った。今、ここにいるのは姉貴たち千葉四姉妹、鵜方、宮城さん、そして、高崎という少女。

で、位置関係として。俺のベッドのそばに居るのは鵜方と宮城さん、そして、その後ろに隠れるようにして高崎という少女。四姉妹は部屋の隅、ソファが置いてある一角で、本を読んだり、こちらの話に耳を傾けたり、携帯を眺めたり、思い思いの行動をとっている。「俺はよく分からないんだが・・・まあ、お前が女子と話すということ自体、かなり珍しいことだったからな。俺もそういう仲間なんだと信じて疑わなかったんだが・・・」

「いやまあ、確かに俺は女子とは話さないが。理由、なんとなく分かったろ？ 別に女が嫌いとかじゃねえんだよ」

普段、寝ていることが多く、起きても最小限のコミュニケーションをしかほとんど男子としか交わさない俺は、良くて女嫌い、悪くて人嫌いだと思われるらしい。男好きと思われるだけではないだけまだマシというべきなのか。

クラスメートには悪いと思うが、俺のプライベートな事情を知ったら少しはそのイメージも変わるかも知れない。まあ、俺から打ち

明けることは絶対ないけどな？

「ああ。お前の一週間に及ぶ連続十人斬り事件。そういう理由があったんだな。ミス候補の先輩にも言い寄られてたのに、勿体ないことだ」

確かに俺が普通に一人っ子だったり普通の姉妹に恵まれていれば、断るのは勿体ないと感じていただろう。が、俺の場合「女は化け物だ」という諦観にも似た先入観が強すぎる。

特に、それが可愛かったりすると、どうにも完璧な超人である姉貴や妹たちに重なってしまう。

だからといって、不細工なヤツにときめくわけでもない。多分、俺は絶対一目惚れとかしない。あくまで多分だが。

「けどさ、んなこと言ったらお前もそうだろ。一週間で何人だったか、俺より絶対多かったろ。女泣かせの異名は俺よりもむしろお前につけられるべきだと思うんだが」

鵜方京一。

身長は俺と同じ、175くらいで、高1にしては高い方。ハーフの父と日本人の母の間に生まれたクォーター。

イギリス生まれのイギリス育ちで、中学の途中まで向こうにいた。英語はペラペラというより、ベラベラ。それはもう、本当に淀みな話す。

向こうでサッカーをやっていたらしく、そこそこ上手かったらしい。進学校の割に部活等の成績が優秀なウチの学校のサッカー部で、一年レギュラー。サッカーはよく分らないが、ポジションはMFで、攻撃に参加することが多いようだ。コイツにボールを持たせると、止まらないってのが俺の印象。すいすい間を縫うように敵陣に割って入っていく。

父は大学教授。母は薬剤師。っていう家族に恵まれたからか、成績がめちゃくちゃにいい。俺が当てずっぽにより二位を獲得した実力テストでコイツは余裕で一位。その差は約30点。環境に恵まれたんだ、と本人は言うが、たとえ親がサラリーマンだったとしても



コイツはコイツのような気がする。

やはり西洋系の血が混じっているの鼻が高く、これは遺伝だろうが顔立ちが整っている。特徴的なのは、栗色の髪と、薄い感じの茶色の瞳。セルフフレームのメガネ。

かつてジャーズや劇団、その他諸々のスカウトも来たというその容姿はすれ違うすべての人間を振り向かせる。女子だけでなく、男子も振り向くんだ。コイツと街を歩けば分かる。

成績

容姿

運動

となれば、モテないはずがない。

今思い出したが、確か、一週間で24とかだった。うちの学校は公立なので（ゆとり教育万歳）、一週間を五日とすると、一日で五人。相当のハイペースだな。

あくまでこれは生徒会の警戒度MAXであるパソコン部と新聞部のコラボにより調査され、広められた情報（どっからそんな情報聞きつけてくるんだ、と思うが）なので、悪しからず。が、本人も否定はしないので、それくらいの数値で間違いはないんだと思う。

「お前は・・・まあしょうがないっちゃあ、しょうがないんだろうな。近くにあるモノほどその存在に気づきにくいって言うし」

鵜方は、俺の顔を見ながらそんなことを言った。

「・・・なんかお前、失礼なこと考えてないか？」

「いや、別に？　ただ、お前も難儀な人生を送るんだろうなと思うと、ちよつとね。くれぐれも、痴情のもつれなんかで刺されたりしないようにな」

ぐつ、と親指を立ててそんなことを言う鵜方の頭を叩いた。いい気味。

「でさ、結局どうだったん？　トシ兄とその女の子、付き合ってたの？」

脱線しまくっていた話の筋を半ば強制的に引き戻したのは弥江の

その言葉だった。

弥江は花音ネエと共に立ち上がり、互いに目配せしてからこちらにやってきた。

「いやだから、俺は知らないんだよ。覚えてないんだからーおい、花音ネエ、その手をやめろ、ワキワキさせるな、じりじり近づくな。うわ、弥江、そんなとこまで花音ネエに似なくていい、そいつは真似しちゃ・・・イヤヤヤヤめろ、止めてくれって、俺は何もーキーヤアアアー！！？」

俺の弱点が露見した瞬間。

俺は、くすぐりに全く耐性がない。

背中に指を優しく這わされ、首筋と耳の裏にかけて息を吹きかけられようものなら、そのときは絶叫した後に卒倒しそうになるくらい。

だからーやめろっつーてるのに、うひゃひゃひゃは、ダメだ、わき腹はダメだって、いひひひ、首筋を撫でるな、あ、イテっ、ちよっ、今ドサクサに紛れて傷口に触れた、っていうかあひゃひゃははははひー・・・・・・・・・・

「全員、ヤメロー！！！！そこに居直れ馬鹿共が！！！」

そこで全員ーくすぐりに参加していた花音ネエ、弥江、鵜方（コイツは絶対後でクロス）、宮城さんーの動きが、ひきつった笑みを浮かべて止まった。

腹の傷が痛まない程度に怒鳴ったつもりだったが、かなり痛い。この凄く鈍い痛みには俺はいつまで耐えなくちゃいけないんだろうか。いてて・・・」

とつさに、わき腹を押さえる。押さえたところで何も変わらない。むしろ痛くなるが、どうしても手が伸びる。なんなんだろうな、この心理。

「利明！？ 大丈夫、平気？」

嗚呼有紀ネエやつぱりウチで頼れるのあんただけだよ。

花音ネエたちをベッドから引き剥がすようにしてどかし、俺の顔を真剣な表情で有紀ネエはのぞき込む。

こくこく、と冷や汗を浮かべながらではあるが首肯で有紀ネエに無事を示す。さすがに傷口が開いたりはしなかったようだ。

「花音、弥江、ちよつとこつちいらつしやい」

にいつこり、という擬音がしつくりくる、そんな目が笑っていない笑いで、有紀ネエは花音ネエと弥江の方を向いた。その額には、微妙に青筋が浮いていたのを俺は見逃さなかった。

「あ、や、やだなア姉さんたら。弟と戯れてただけじゃない」

「そうよ、有紀姉さん。ボヤボヤしていると、私たちでトシ兄貰っちゃうって言ったでしょ？」

花音ネエはそれなりに後悔しているみたいだが、弥江は全くそんな素振りを見せない。ある意味開き直り以上だな。今のことを悪いことだと認識していないようだ。これぞまさに確信犯。

「ふふふ・・・大丈夫よ痛くしないからー」一瞬で終わらせるわ。鵜方クン、宮城サン？あたなたちも、反省して頂戴ね？澄香、手伝って」

「え、俺もっすか？」

「お、お姉さん何をするつもりで・・・？」

「すいません鵜方さん、宮城さん。これからは、気をつけてくださいね？」

澄香も、結構怒っていたようだ。

その気迫にやられたらしい鵜方と宮城さんは、青い顔をしながらもやたら素直に有紀ネエと澄香に連れられていった。

「・・・あーえつと、高崎、さん？」

「え、あ、うん、何？」

いや、そんな嬉しそうな顔されてもね。別に何かがでる訳じゃねっすよ。

高崎と言う少女はそれまで俺と一定の距離を置いていたように見

えたが、このたびそれは一気に縮まった。ベッドに走るようにして寄ってきた彼女の顔はそうとう嬉しそうである。何かうやむやになってしまったが、俺たち本当に付き合ってたのかな？

俺は記憶を失う前も失った後もあまり好色ではないという自覚と自信だけはある。自分で言うのもなんだが、まだ誰とも付き合ったことがない。そういうことをする気になれないし、別れてしまうとその後が面倒そうだから。

そういうことを極力避けていた俺が、彼女とそういう間柄だったというのはなんか変に思える。彼女は俺に声をかけてきたミス候補の三年の先輩よりも可愛い（完全に俺目線で申し訳ないが）。可愛い故に、前の俺でも接触を避けていたはずなんだが。

しかし、今はそんなことを言っている場合じゃあない。

来るべき時に備えて、少し準備をする必要がある。

「うーんとね、どこやったかな・・・ああ、あったあった」

ベッドの脇に置いてあった鞆から、耳栓を2セット取り出す。こういう時の為に、常に用意してある。

「？」

彼女は俺が何をしたいか分からないみたいだ。それが当たり前。

「これ、つけて。もうそろそろだと思う」

「・・・何で？」

「いいから早く」

いぶかしげに俺の顔を見、首を傾げながらも彼女は耳栓をつけ始めた。両方をつけ終わる前に、俺は

「ねえ、俺たちって付き合ってたの？」

と聞いた。

丁度二人つきりだったので、少し大胆に言ってみようと思ったのだ。

彼女も俺が彼女自身のことを覚えていないことを先の医者による宣告で知っているだろうし・・・と踏んだ。

「・・・・・・・・」

彼女は、何か思い出に思いを馳せるように目を上げて遠くを見た。  
・・・両耳から少しでている耳栓の突起がなんとも間抜けに見える  
て仕方がない（台無し）。

「私は・・・」

と、彼女が言い掛けたところで

外の方で、窓越しに悲鳴が聞こえた。4名ほど。

刑が執行されたのだ。

俺は旅だった者に対し、十字を胸で切って、こう願った。

（もう帰ってくるな）

と。

で、彼女、高崎さんかというと。

「・・・・・・？」

起こった事態を飲み込めないらしい。まあ確かに、耳栓してても  
聞こえる悲鳴なんて、そうそうない。

俺が右手だけで耳栓をはずし、手元にあった袋に入れ、彼女に袋  
を差し出すと、彼女もそれに倣って耳栓を外した。

そして、時計を見る。

「あ、もうこんな時間・・・お稽古に間に合わなくなっちゃう」

と、ベッドから離れて、ソファにおいてあった荷物の山から、彼  
女のモノと思われるハンドバッグと、宮城さんのモノと思われる帽  
子とショルダーバッグを取った。

「ごめんなさい、千葉くん。お大事に」

そそくさと部屋を出ていこうとする彼女。

さっきと違って、どこかよそよそしい。

「高崎さん」

ドアを開けようとしていた彼女の背中に呼びかけると、彼女の背  
中が飛び上がった気がした。こちらに顔を向けようとしなかったが、  
止まってくれただけよしとしよう。

「今日は、ありがとう。それと・・・ごめん」

その謝罪は、彼女の忘却に対して。

彼女に謝るのも筋違いだと思うのだが、忘れられていい気をする人間なんていないだろう。そのことに対して、俺は謝った。

「なるべく早く君のこと、思い出せるように頑張るから・・・また来てくれるかな？ 君との話を聞かせてほしい」

そう言うのが精一杯だった。

彼女なんて居たことがない俺は、こんなこっぴどかしい台詞、吐いたことないから。

「私で、よければ・・・」

そう言う彼女の耳は、見事に真っ赤だった。正面から見れば、トマトみたいになってるかも。

「千葉くん」

意を決したような声で、彼女はこちらに語りかけてきた。顔は、相変わらず向こうを向いたままだが。

「私と千葉くんは、付き合って、なかったよ。席がずっと隣で、普段話すことが珍しかったあなたが、私と話していることは多かっただけ。でも、私にとって、千葉くん、あなたは、最初に出来た友達で、なにより・・・」

私の、大切な人です。

そう言っで、彼女は出て行った。

言葉の意味を理解するまで少し時間がかかったが、理解してから顔が熱くなった気がする。

顔の赤みを隠すために、フェイスナルペーパーで顔を拭いながら冷やそうと試みたが、赤みは増し、熱は上がっていくだけだった。躍起になって押さえようとした結果、俺の顔は拭きすぎでもっと赤くなってしまった。

ヒリヒリする肌が熱く、霜焼けみたいだった。

夏の夜に、虫は鳴かない。

たなびくカーテン以外、音を立てるものがなく、驚くほど静かなこの空間。

ベッドの周りで、四つの寝息が聞こえる。

俺は、四人を起こさないよう、至極小さな声で、喋っていた。

「うん、多分間違いない。俺のこの能力チカラの代償は、彼女の記憶だ」

そう、あのエリアに行ったヤツにしか見えない、位相の異なる並行世界の住人、俺の付き人として派遣された「天使」と呼ばれるモノーエリーに向かって、そう告げた。

## 大切なモノと・サムシング・プレシャス・（後書き）

利明の学校の設定が矛盾してたので変更しました。  
申し訳ありませんでした。



手に入れたモノと・キャプチャリング・アビリティ・

天使とか悪魔、神や死神っていうのは本当にいるらしい。

つか、今俺の目の前で俺の飯を食らっているのがそのうちの1つ、天使だ。「食べて」いる、ではなく「喰らって」いる。こんなモノが天使だとすれば、昔の絵か何か、ルネサンス、ってやつとかに描かれてるアレって何なんだろうな。

まあ、こいつらがただ単に「向こう」の人間に天使と呼ばれているだけで、人間が思い描く、優しく微笑んで死者の魂を運んでくれる慈愛に満ちた天国の住人なんかではない。

本当に混じりつけない、まっさらに白い羽を持っているだけ。

その翼も、コチラに來ると消えてしまいうらしい。向こうでは肩口についていたそれも、実際今は見えてないしな。

「ひよれへ？ ひからのふかひかひかははれは？」

「・・・口にモノを入れたまま喋るな」

食事に集中していた視線を上げ、こちらに解読不能（とりあえず一回聞いただけではムリ）なメッセージを送った輩にそう告げる。食い物の詰め込みすぎでリスみたいだぞ？リスって知ってるのかな、コイツ。

「はっへ、ほいひいひゃん、ほほほひょうひんほほはん。ふいふいはひは、ゲホッ！」

「うつわ！ きったねー！ もー何やってんだよー！」

口にモノを入れて喋ってるうちにそれが喉に逆流したらしい。ベツドの備え付けのテーブルが主に被害を受けた。

唾液で妙に湿り、粉々に噛まれた食物の飛沫がリアルにテーブルの上に散らばっている。

「・・・てへ」

「・・・・・・・・」

ガン。

目から星をとばす勢いで、エリーの頭を思いっきり殴った。星はでなかったが、涙は出ている。さっさと拭け。

「あいたたた・・・もう、わざとじゃないのに」

「わざとじゃないなら、もっと悪びれるよ。お前のさっきの行動を鑑みるに、反省の色が全く感じられないね」

「ぶー」と文句をたれ、頬を膨らましながらもちやんとテーブルを拭くあたり、根はまじめなんだろう。

彼女の名前はエリー・グラッドストーン。実年齢は八十を越えてるらしいが、見た目は俺と一緒に、十六才くらい。

なんで実年齢80なのにこんなに若々しいんだとか、天使なのに人間に見えていいのかだとか、そもそもお前は本当に天使なのか、なんて野暮なツツコミはしない。

だってそうだろう？

・・・俺にとっちゃ、自分が生き返ったことそれ自体が一番ツツコミたいんだからな。それにツツコまずにいるのだから、他のことに理由の如何を問うてもそれは野暮と無駄以外のなんでもない。

だから、あえていわない。

話を戻そうか。

特に何もいじっていない銀髪は軽やかに風に揺れ、艶やかに光を発する。茶色っぽい目は、クリクリとしていて、全体的に小さく、童顔なので綺麗、というより可愛い。

愛らしい、という言葉が何より似合いそうだ。

「で、お前さっき何言おうとしてたんだ。まったくききとれなかったんだけど」

「え？」

彼女はいつの間にかテーブルを拭き終わり、備え付けの水道で布巾を洗い終わったらしい。唇を突きだしてこちらに身を乗り出していた。

目的は明らか。出会ってからこんなシチュエーションには何回も出くわしている。

もう馴れた。

「おい。近い」

「だっ・・うにゃ」

何か言い掛けた彼女の頬を押して、体ごと引き剥がした。

「お前、今飯食ったばっかだろが。なんでいつも隙を狙っては俺の精気搾取しようとするんだ。別にお前らの食事は俺ら共闘者<sup>パートナー</sup>じゃなくたっていいんだろ？」

「それはそうんだけどさあ・・やっぱり、質が違っつていうの？普通の食事じゃ、あなたたちでいう、ミネラルやビタミンが足りなくなるのよ」

無茶苦茶なこと言ってくれるじゃないか。

つまりは、普通の食事じゃ取りにくいモノが、精気搾取で得られるってことだな。

「うん、そういうコト。よく分かってるジャン。最近さあ、口内炎出来ちゃってえ、それに、肌が乾燥気味なのよね」

肉の食い過ぎで野菜を食ってないからだろ、それは？

肌が乾燥するのは季節の変わり目だからじゃないのか？

「そっいうんじゃないの、ねえ」お願い。ちょっとでいいから、ね？」

「ダメだ」

いすの上で手を合わせて懇願するそいつの願いを鼻の前で手を振ることで無碍に蹴った。

まあこれはよくある話。

天使っていうのは突き詰めれば人間だが、表面上はやっぱり人間じゃないらしい。機能もそれなりに人間のそれからは逸脱しているらしく（なんか、羽使って飛んだり出来るらしいよ）、その機能の維持のためには、普通の食事――俺たちが普段食べるようなモノだけではいけないらしい。

俺は栄養学とかよく分らないんだが（ていうか、そもそもコイツらの体に人間としての栄養学を当てはめることが出来るのかということ自体謎だが）、炭水化物は基本的にエネルギーになり、タンパク質は体を作るものになる。

それはコイツらも一緒らしい。もとを正せば人間ということなので、「人間」としての機能はそれで保てるってことなんだろう。

が、「天使」としての機能はこれとはまた事情が違ってくるように。

もともと人間である天使は、色々なプロセスを経て天使となるらしい。聞いた話だし、その色々なプロセスをコイツが話そうとしないのだ。別に興味ないからいいけど。

その天使としての、証？ともいうのか。そいつを天使たらしめる理由――なんか臓器みたいなものだろうか――は、放っておくと体から出て行ってしまうらしい。

何故か？そんなこと俺に聞くなよ。

で、それを体内に閉じこめておくための精気、らしい。

なんでも、精気は「人間」としての自覚を保つためのもので、正確に言えば「天使」のチカラは出ていってしまうのではなく、一部はその体にまんべんなく浸透するんだそうだ。

そうなると天使、のチカラが強すぎるからか、内側から溢れるチカラに耐えきれず、たいていのヤツは事切れるようだ。

事切れるだけならいいんだが、精神が壊れても肉体が壊れないヤツ、ってのがたまにいるらしい。

それが、俗に言う墮天使。まさに、心が「墮ちた」天使だ。

心が壊れる、すなわち人格の破壊を意味するのだが、残留思念、っていうの？心の奥底から深く思っていることは変わらない、っていうか壊れないんだそうだ。

理性、恐怖、矜持や信念といったストッパーがぶっ飛んだそいつがどういう行動に出るか。

簡単だ。

自分の思うがまま、その思念を遂行するだけに決まっている。

しかも、体に「天使」が染み込んでいるから、そのチカラが半端じゃないみたいで、過去に何人も巻き込まれただけで死者が出たりしてるらしい（向こうの世界でな）。

みんな、それを恐れてる。怖い、んだと思う。

自分が、いつ「食われ」るのか。

欲望、自分の本能が赴くまま、破壊と殺戮を繰り返すバケモノとなり果てるのか。

正直言って、恐ろしい。

だから、精気が必要なんだとか。

だが、そういう精気は天使を内包する身であつても人間である限り作れるのであつて。

単に、生きてる人間からそのまま精気として分けて貰った方がラクなんだそうだ。

天使の機能を維持するのにその精気が必要で、かつ自分が人間であることを自覚するためにさらにそれが必要になる。

天使の人口は1000万人位だと言うから、それならば少しずつ分けて貰った方が効率がいいと考えるのも当たり前だ。

が、問題はその「方法」なのだ。

俺には見えないが、精気つてのは普通体中から漏れ出してるモノらしい。しかし優れた武術家や、悟りを開いちゃったお坊さんなんかからは、漏れてこないという。

武術家は自分の「気」を完全にコントロール出来ているらしいし、お坊さんは気を「鎮める」ことに長けてるからだそうだ。全くわかんねえけどな。

普通は、そういう気の扱いに長けている人ではなく、一般人から漏れている精気をかすめ取ってかき集めるのが主流らしい。かすめ

取る、っていう手に出るならな。

が、それだと何百人もの精気をあつめてやっと一ヶ月を過ごせる程度らしく、とても効率が悪いんだとか。だから、普通これをやる人はいない。

で、まあ想像ついてる人も居るんだろうが、人の内部と直接繋がっている部分から取るのが一番いいみたいだ。つまりは、粘膜を介する接触ってこと。

キで始まる欧米では普通でも日本では普通じゃないジェスチャーに近い習慣や、カタカナで書いても漢字で書いてもセで始まる生殖の手段とか。そんなとこだ。

特に、男側の子種は凄いい精気のカタマリらしい。一回で一年過ごせるんだとか。

だから、天使の皆さんは普通、そのチカラの一部「メタモルフォーゼ」で容姿を変え（変えない人もいるみたいけど）、色々と誘惑してきては精気を搾取してるらしい。

今蔓延してる性犯罪って、実はコイツらの仕業なんじゃないか？で、その精気にも万物と同じく良い悪い、クオリティーの高い低いがあるわけで。

何故か、俺の精気は旨いらしい。

なんでも

「なんかねー甘くて濃くって、冷たいの」  
だそうだ。

・・・なんか、シエイクみたいだな。俺の精気。どうでもいいけど。

コイツが味を知っている、すなわち俺の精気はテイスティングされちゃってるわけだが、心配無用、粘膜接触は一切ない。

・・・え？なに？それじゃ物語上つままないだろ、だと？

誰だそんな口を聞くヤツは。

俺はシスコンであることは多少否めないが（つかぶっちゃけ真実）ロリコンじゃねえ。こんなヤツには萌えないね。

いかん。なんか物語の指向性が違ってきてるぞ。早く修正しろ、作者。

「何をぶつぶつ言ってるの？」

「ああいや。なんでもない」

いつの間にか言葉になっていたらしい。

とにかく、今までコイツに精気を取られた際は、俺の漏れてる精気を取っている。

が、弓道やつてるからか、普段、俺の体から漏れ出す精気はあんまり多くないらしい。そんなガバガバ取られても困るからいいんだけどな。

だからというか、アイツはああいう行動にでる。

まあ俺たちで言う食事だから全否定は出来ないんだが、俺はムリ。彼女に我慢して貰うしかないだろう。

今度こそ話を戻す。

「なあ、お前さっき何言おうとしてたんだ？」

そう、俺の顔を下からのぞき込んでいた彼女に言った。すると、彼女は思い出すように上を仰ぎながらこう言った。

「んー？ あー、なんかね、ヴァルキュリア様が「ヴェイク」の使い方には馴れたか、って」

「ヴェイク」

俺が、授かったチカラ。

彼女、高崎さんの記憶を代償に、エリアVの統括者ヴァルキュリアに与えられた能力。

来るこの戦争で、俺たちのエリアが勝機を掴む鍵となる、チカラ。それは今、俺の中にある。

誰がために・フォー・フーム・（前書き）

やっと章が二桁に。

ここらへんから色々戦闘とかに

入っていかうか

と思います。



## 誰がために・フォー・フォーム・

「・・・まさか、とは思いましたが」

黒い世界の白い輪郭。

西洋系の女性を思わせるそのシルエットは、驚きを隠せない、という表情で俺を見た。

「あなたが、そうでしたか。確かにあなたが持つオーラは他の人とは違いますね。今気づきました」

そう言って、気づけなかった自分を嘲るように彼女は笑った。

それは見ているだけでこちら悲しくなる笑い方。

何故そんな悲壮な顔をするのか、そう問いたくなる。笑っているが、不自然。まったく、笑えていない。

「そのチカラ、今しがたあなたが獲得した紋様は、出る人間がほとんどいないのです。百年前の戦いでは、それを扱う人間は出なかった」

「・・・そうなんですか」

黒い世界。

そこでは、俺も目の前の女性のように白く縁取られているようだ。手のひらに走るスジや、腕に浮かび上がる血管ですら白く、髪は真っ白。極端すぎて、少し気味が悪い。写真のネガっぽいな。

「・・・」

俺が冷たいリアクションしかなかったからか、彼女ーエリAVの統括者、ヴァルクリアーはバツが悪そうにおし黙ってしまった。

「あの、どうかしましたか？」

おい、という感じで手を彼女の目の前で振ってみる。当たり前だが、手を通る跡も白い。

「・・・っ！　だうじよいびです。なでんも、あまりせん」

「は？」

いや、ぜんぜん大丈夫じゃなさそうなんですけど。

「だじょういぶですらか、気にしないでくらしい」

ああ、なんか大丈夫そうに見えるけど良く聞くと大丈夫じゃない。  
「らいじょうぶだったら、大丈夫られす！」

「・・・ふざけてます？」

「・・・すいません。私としたことが」

よく分らないが、頬のあたりが白っぽくなった。もしかすると、顔を赤らめたと言ったことなのかも知れない。

かもしれない、っていうか、絶対そうだな。

「大丈夫ですか？　なんか、落ち着きがないというか」

「いえ、その、あの、久しぶりなのでなんと言ったらいいか分からないというか」

「何にです？　チカラに対して、ですか？」

「いえ、それを持つあなたに対して、です」

なんか俺と彼女、話し方が似てるような。

声は全く違うんだけどさ。彼女は綺麗なソプラノだ。

「そのチカラ、名前をー」といっても、私が呼び始めただけです  
が・・・Vacancy、といいます」

う　え・・・なんだって？

「Vacancy、です。知りませんか？」

「いや、知ってますよ。いきなり英語を出されたのでよく聞き取れなかっただけです」

ヴェイキャンシー、Vacancyー空いている、使用されてない場所とかスペース。あとは、思慮深くないだとかいうニュアンスも含むんだっけか。それとー空虚、もしくは虚空。何も無いところを言うんだっけ。

「その年齢でよくそこまでご存じですね。留学の経験でもあるんですか？」

「ああいや、そういうんじゃないんですよ」

感心した、という風に少し嬉しそうに言う彼女の言葉に、俺はそう答えた。

「？」

「ただ単に、俺自身が英語を好きなだけです。あとは――親父の影響ですかね」

ウチのハイパーな大黒柱は、海外をあちこち飛び回る技術研究者で、その旅のほとんどに通訳をつけない。自分で大概のことは話せるからだ。

日本語、英語はもちろんのこと、スペイン、フランス、ポルトガル、中国とか、とにかく、話す人口が多そうな言語は何でもござれ、って感じ。

そんな親父の影響を受けて、って言うていいのか分からないが、とにかくその語学の才は俺に受け継がれたっぽい。一つくらいは分けてやるうっていう、神の思し召しかな。お情け、ってやつ。

英語は今向こうに行っても大丈夫だと思っう位に話せるつもり。今は、スペインとドイツ語を勉強中。文法がややこしいんだよな。単語混じるし。

英語一点に絞るのならば、他の姉妹にも・・・たぶんだが（自信ないけど）引けを取らない、はず。

「そうでしたか、お父様の」

「まあ、息子の俺から見ても十二分にカッコイイですからね、あの人」

今、どこにいらんだっけ。

確か北極で掘削機の改良とか言ってたかな。お土産は期待できないな。あっても、中継地の免税店で買ったヤツだろうし。

「ふふ、お父さんのこと、好きなんですネ」

「いや、好きっていうか・・・尊敬してはいますよ」

父に恋する息子なんて聞いたことないな。想像するだけで・・・うつぶ、吐きそう。

「なにか、よからぬコトを考えましたね？」

ぎく。

読まれています。

「いやあ、そんなことないっすよ」

と濁しておくが、多分「ぎく」の部分も読まれてるだろうな。

「それはいいとして・・・話を戻します。千葉利明」  
いきなりだった。

いきなり真剣な表情と声音に戻るの、なんか怒ってるんじゃないかと思ってしまったくらい。

「別に怒ってなどいません」

だから人の思考読まないで下さいって。

「読んでもいいです。あなたの表情がわかりやすすぎるだけです」  
よ

そうなのか？

俺、学校では無表情で無関心、無気力がウリ（とは言わないだろうが）なんだけどな。

「聞いていますか？」

「はい、ダイジョウブです」

やっぱり怖いです。

が、今回は読まれなかったのか、ツッコまれたりはしなかった。ツッコむ気が出なかっただけかも知れないけど。

「あなたが今体に秘めるそのチカラ――Vacancyですが、さつきも言ったとおり、発現する人間が少ない。

エリアVに来る人間のほとんどはこれに対応できません。持つことすら出来ない。現に、前回の戦いではこれが出ず、常時東アジア一帯を取り仕切ってきた我々の管轄エリアを大幅に削られました。その戦いで丁度運悪く欧州をエリアM、米国をエリアAが勝ち取ってしまい、戦争が起きてしまった。

それまではわれわれ穏健派のみが、エリアで徒党を組み、力を合わせながら過激派と戦ってきたのですが――前回の戦いで初めて彼らも徐々に協力し始めた。それが誤算でした。

強いだけで協力という言葉を知らないうちは良かったのかも知れませんが、誰に知恵を付けられたかは知りませんが、とにかく彼らは協力によって我々に敵対し始めた。

もともと過激派な上、強力なチカラをもつ輩でした。協力によって戦いのバリエーションが増えれば、そういったチカラの差を協力によって埋めてきた我々がそう簡単に打ち碎けるはずもなく、あえなく敗退してしまいました。

東アジアのほぼ全域を支配していた我々の領土は今は日本と韓国の一部のみ。我々の領土からは離れた場所は、我々穏健派の支配下に置かれていたときよりも明らかに臭いです。それを煽ることは、絶対にしてはいけません」

そう言う彼女の表情は真剣と怒りが入り交じったような表情をしていた。よっぽどそいつらを許せないんだろう。

「しかし今回は、我々に運が傾いたようです」

その強ばったとも言える表情を崩し、彼女はさっき見せた少し嬉しそうな表情よりも、数段嬉しそうな顔で言った。

「エリアVのメインアタッカーとも言えるべきチカラ―他のエリアの人間にはトライ・ヴァンガードと呼ばれるようですが―のうち、あなたで既に二つが揃った。前は、一つも出なかったのです。それら三つに適合する人間が、一人も。まったく、出なかったのです」

Tri-Vanguardねえ。三つの尖兵、ってか。

なるほど、エリアVのエリア名、Vにもかけてあるわけだ。

それは別にいいんだけど。

「え、もう一人出たんですか」

ってことはもうそいつは戦うことを承認したってコトか。

「はい。それはもう快く。日本の平和を自分の手で守れるなど、それ以上の役目はない、と」

誰だそいつ。

ぜったい、偽善者だな。いや、偏見と言われたらそれで終わり

なんだけど。そんなことを恥ずかしげもなく言える人間など、この  
ご時世、どこの国にもいないだろう。

・・・いたらごめんね？ いやまあ、現にいるんだけどさ。

「ですから、我々としてもあなたには是非参戦していただきたいと  
考えているのです。トライ・ヴァンガードが全員揃った場合、この  
エリアに負けはない。たとえ彼らが協力してきたとしても、勝算は  
十分にあります」

俺の余計な思考をよそに、彼女はしゃべり続けている。

が、ぶつちゃけ、そうやすやすと返事するわけにはいかないんだ  
よな。

正直な話、これが夢ってことも否定できない。

夢だったらどちらを選択しても問題ないだろうが、夢じゃなかつ  
た場合、俺はそのエリア同士の管轄区域争奪戦なる仮想世界で繰り  
広げられる戦争に参加しなきゃいけないわけだ。

正直、残してきた姉妹や親には申し訳ないけれども、このまま死  
んでしまってもいいんじゃないか、なんて思ってるわけで。

なんか俺、誰かを守って死んだみたいだし。助けられた人は俺に  
対して申し訳なく思いながら生きていくんだろうが、俺は別に気に  
してない、ってことだけ伝えられればいいかな、って思う。

「参加して、いただけますか？」

うっ、そんな目でみないで下さいよ。

断りづらいじゃないですか。

「あの、それ勝った後はどうなるんですか？」

これ、重要だよな。

彼女の潤んだ瞳に少し心が揺らいだ俺だったが（姉妹ので慣れて  
ると思っただけだな）、

「勝った後は自由です。あとで紹介しますが、天使若しくは悪魔と  
呼ばれる存在となるか、生き返るか、自由です」

天使？ 悪魔？

「そう呼ばれているだけです。あなたたち人間とほぼ変わりありま

せん。この世界に住む人間か、あなたがたの世界に住む人間か。それだけの違いです」

ふうん？

そこにあまりメリット・デメリットはなさそうだな。

要は生きる世界を変えるかどうか、ってことだろう。

「負けた場合は？」

「この戦いに明確な「負け」の定義はありません。そのエリアの参戦者が戦おうと思えば、十年でも二十年でも戦えます。ですが、敢えて定義するのであれば・・・エリアにおいての兵力の損壊、でしょう。人間の魂を呼び込む作業はそれなりに準備が必要です。戦いの間は、我々統括者も色々な指揮や作業に当たらなければいけませんから、そんな暇はないのです。」

兵士の全滅、これがこの戦いにおけるエリアの敗北の定義です」  
だそうだ。

・・・ってことはだ。

「それって、戦いが終わるまで生き残ってさえいれば個人レベルでは生き返れるのでは？」

そういうことにならないか？

「理屈だけ聞けばそうなりますが、普通はそうなりません。参戦者はその魂を統括者、我々に掌握されていますから」

なるほど、つまりは――

「我々が戦いに於ける勝利の見返りとしてあなた方参戦者を蘇らせる、ということ。当然、無様な結果しか残さず、我々統括者の怒りを買えば、魂はなかったことにされる。すなわち、存在の抹消です」

つまり、戦いに参加しなくても。

参加したとして、負けてしまっても。

俺の存在は、抹消。

それは別にいい。未練があるわけでもないし、生に異様な執着があるわけでもない。

遅かれ早かれ、人は死ぬ。別に人生の達観を気取るつもりはないが、そういうものだとは俺は思っている。師匠の受け売りだが、そういうものだと思う。

だから、俺がそのまま死んだことになるのはいいことに構わない。死にたいわけじゃないが、生き返りたいとも思わない。微妙なところだが、今はそんな感じだ。

が、そのあとは。

彼女、ヴァルキュリアは、今までの日本の平和はエリアVの統治下にあったお陰だといった。日本も色々抱えているが、確かに他の国に比べたら荒事はめっぼう少ない。戦死者なんて、最近自衛隊がアメリカに協力を要請されてやっと出てきたようなものだ。

もし、もしもだ。

その言葉が本当だとして。

そして、戦いに負けてしまったら。

過激派と呼ばれるエリアの統治下に入ってしまったら、日本は戦争を普通にする国になってしまうのか。

「いえ、すぐにはならないでしょう。事象の管理、といっても我々は戒律ではありません。人を、世の流れを徐々に自分たちが良しと思う方向へ運んでいくのが我々の仕事。日本が本格的に戦争を始めるのは、早くても五年後ぐらいでしょう」

五年。

そうすると俺たちは二十二才。普通に徴兵されるだろう。俺は敗北によって彼女に存在を消されているだろうが、俺の友人はそうもいくまい。

日本が負けるとは限らないが、今までのように安寧の日々を過ごすことはもう叶うこともなくなってしまうかも知れない。

それは――ダメだ。



「侵攻状況にもよりますが、仮に日本を奪われたとして、周りも過激派のエリアに統治されてしまうと、おそらく火がつくまでのリミットは速まります。これを我々は波及、インフェクトと呼ぶのですが・・・せめて日本海全域、日本の排他的経済水域はカバーしておきたい。それさえあれば、なんとか百年持つと思います」

Infect、ね。やっかいだ。

あーあ。生きるのが面倒だったわけじゃないけど、このまま楽になれるのもいいかと思ってたんだけどなあ。

俺は今回の戦いで勝利の鍵で。

しかも負けたら俺の故郷や友人、家族が危ないと来た。

これはもうー

「もう一度聞きます。参加の、可否を」

俺の答えは決まっている。

愛する者の為に戦う、なんて身の毛がよだつような（使い方違う）セリフを吐くつもりはない。

ただ、死後の世界ーー天使や悪魔、なんてものがあるんだからそれもきつとあるんだろうと思うーで、日本が荒廃していくのを見たくないだけ。

俺の大切な家族や友人が死んでしまうのを見て、後悔したくないだけだ。

「ああ、あのとき参加しておけば良かった」  
などと。

後悔するくらいなら、当たって砕けよう、そう思ったただけだ。

何もしないで後悔するのはバカのこと。あいにく俺はバカじゃあない。

俺の答えはもちろんー

「参加、します」

だってもう、そこまで言われたらやるしかないだろ？

束の間の休息・アイドル・トーク・（前書き）

最初に投稿したのを読み返したらあまりにも酷かったんで書き直しました。すみません。

## 束の間の休息・アイドル・トーク

「ふうん・・・そう。俺、そんな話までしたんだ。よっぽど氣イ許してたんだな」

「う・・・ん。私はよく分からないけど」

時刻は現在午後一時半。とちよつと過ぎ。

驚異的な回復力で（手術中の蘇りの際の傷の回復はヴァルキュリア、ここ最近の傷の回復はエリーによるもの。さすがは統括者と天使だ）、もう普通に腕も折り曲げられるようになったし、足のギプスも外れた。

医者連中は、もうツツコむことをやめた、というより諦めたようだ。前回の一週間に渡る怒濤の――俺にとっては――検査の嵐で何も分かんなかったみたいだし。分かってても困るんだけど。

この調子でいけば、明日の検査と検診で問題がない限り、明後日には退院できるそうだ。担当医の萩原さんは

「もっかい腹かつさばいて見れば原因分かるかも知れないよ？」

と冗談か本気がよく分からない表情で言つてのけて、花音ネエにまで睨まれていた。

俺は原因分かつてるし。分かつてなかったとしてもわざわざ知ろうとも思わない。世の中は不思議なことだらけだからな（遠い目）。で、今。

俺の目の前には、いすに座った、大人しそうだという印象を受ける、和服が似合いそうな可愛いというよりも綺麗と言う言葉の方が相応しいクラスメート。

学校をわざわざ抜けてきたという彼女、高崎さんと、彼女にとっては久々の、俺にとっては二回目の会談中。

連絡も何もなかったから、ドアをノックされたときかなり驚いた。

最初の方は、彼女があまり喋ろうとせず、会話は難航を極めた。

宮城さんの話によると、彼女は俺の事故に関してかなり責任を感じているということだった。多分、そのことが気になって話すことが難しくなっていたんだろうと思う。

俺が一言、「気にしてない。高崎さんには全く責任ないし」というと、少し楽になったようで、表情も柔らかくなった。

それから、打ち解けるのは早かった。

もともと彼女は俺のことを知っていたわけだし、俺も学校で寝てばかりいるが友人は少なくない。家の事情で多少なりとも社交的である自信はあったし、その自負もあながち外れてなかったようだ。

最近の学校の様子、授業の進度（俺はどうせ聞かないが）、そのほか、男子高校生と女子高校生が交わすような、本当に、くだらない、記憶の片隅にも残せない話。

そのどれほどが実のある話だったかというところ、一割にも満たないだろう。

それでも、色々、話した。

話した内容はあまり重要じゃない。

彼女と話した、その記憶の共有の方が大事だと俺は思う。

会話の内容は覚えていなくても、彼女と話したという事実は俺の中にきつと残る。それで十分だ。

二度と、無くさないようにすればいいんだから。

俺が通う学校は一応進学校なので、授業は他の学校に比べると比較的長いようだ。八時半に始まって、四時に終わるのが普通。

それでも、金にモノを言わせた私立特有の施設の豊富さゆえ、部活の時間を削られるということもない。七時くらいまでは、試合前の部活じゃなくても残れることになっている。

・・・俺は部活入ってないから関係ないけどな？

道場に行けば九時くらいまで射に打ち込むことも可能だ。長年

（っていつても弓道を始められるのは最低でも小学校の高学年。

俺は中一から）通っているということもあって、師匠がそれくらいは融通してくれる。

俺が学校の部活に入らなかったのは、ゲンキな話で申し訳ないが、施設面での話。特に学校で弓道をやる理由がなかったからだ。

でまあ話が反れたんで戻すと、現在時刻は一時半を回ったところ。まだ学校は授業中のはずだ。

俺たちはまだ高校一年生であるとはいえ、私立の進学校の授業はそれなりにレベルが高い。彼女の成績を詳しく把握してないのでよく分からないが、大丈夫なんだろうか。

ていうか、授業をサボりそうにない彼女が、わざわざ抜け出してまでこんなところまで来た、というのが俺にとっては意外。

正直に言えば嬉しいが、俺のために（かどうかは知らないけど）授業を抜けるのは如何なものかと思う。俺はそんなにされるほど価値のある人間じゃない。卑下しているわけじゃなく、マジで。

しかし、彼女は

「うーん・・・普段はまじめに授業受けてるから、大丈夫。一応、先生には言っておいたから。それに、私、また千葉クンの隣なの。鵜方君がそうしたのかも知れないけど。だから、隣がいなくてつまんなくって」

抜けて来ちゃった、と後ろで束ねた髪を揺らしながら微笑んて言った。えくぼが可愛い。

ふむ？

おかしいな。

下半身にかけてる布団が暑いのか？ それにしちゃ関係ないところが熱くなるな。顔がいつもより火照ってるような気がするのさそういう気がするだけか。

なんか耳のあたりがピクピクするし、背中をなんか寒気のような

モノが駆け抜けた。

・・・風邪か？

やだなアこの期に及んで風邪だなんて。そんなものひいたら先生になんて言われるか分かんないぞ。

「どうしたの千葉くん？ 顔、赤いよ？」

心配していつてくれてるんだろが、ちょっと顔が笑ってますよお姉サン。ごめんにありがたみが感じられないというか。

「いや、多分大丈夫。なんでもない」  
うー。

なんか恥ずかしいときに感じる暑さと似てるな、これ。

心拍数の方は腐つても（最近サボりがちです、ハイ）弓道家であるので、ある程度は抑えることは可能だーっていうか武術やってりゃたいていの人は出来る芸当だと思う。

特に弓道は集中を要する競技だからな。心頭滅却とまでは言わないが、雑念を振り払い頭をクリアにする能力がそこそこ必要だ。そこから的に当てるイメージを描いていく。

・・・ま、興味の無い人にはどうでもいい話だ。最近アーチエリの方が流行ってるみたいだし。流してくれて構わない。

「うー」

なんか今日の彼女は機嫌がよろしいようだ。鼻歌がその証拠。リ  
ンゴ・・・じゃなかった今日は梨。それを剥く手つきも軽い。料理  
上手いんだろな。澄香のように目を離してはいないが、十分手慣  
れている。

学校でいいことでもあったんだろうか。先生に褒められたとか。  
今日びの高校生はそんなことじゃ喜ばないか。

じゃあなんだと理由を自問してみるが、女心など俺に分かるはず  
がない。分かってたらあの姉妹を手玉に取ってるだろうからな。

女心って分からね。っていうか、苦手だ。

彼女の話によると、俺はあまり人に話すことのない自分の生い立ちや境遇、果ては将来の夢までベラベラと喋っていたらしい。

境遇（すなわち、姉妹がいるということ）に関しては、鵜方にも話してなかったのだが、その話からすると、彼女はココに来る前からアイツらを知っていた、ということになる。

「俺、どんな話してた？」

と問うと

「うーんと、なんか、有紀ってヒトーあのスタイルがいいモデルさんみたいなヒトがそうよね？ー以外は、全員（ピー）だ、って」

おっと、アイツらを俺がどう評価しているかに関してはトップシークレットだ。そんなにひどい言葉ではないが、万一知られるとまずい。

ホント、今日この時この場所にアイツらがいなくて良かったと思う。

聞かれてたら何されるか分かったもんじゃないからな。今のところ大事に至ったことはないが、一番行動力があり（馬鹿力）、思い切りのいい（考えなしの）花音ネエが今のところ要注意人物。

最初になんかやらかすとしたらコイツしかいねえ。

「はい、剥けたよ」

おお、なんとまあ綺麗に。山盛りなのは気にしないことにしよう。明らかにあのバスケットの中に入ってた量じゃないが、どこから持ってきたんだ、彼女。

おや？

しかも、皿渡してくれないんですね。自分で食べるつもりなのか？

あ、フォーク出して自分で刺しちゃいましたよ。そのまま口に持つて行く・・・と思ったら

「あ、あーん？」

シンプルな銀のフォークとともに突き出されたのは、彼女の胸あ



たりで急に進路を変え接近した梨。

なんで疑問形なんですか？ 自分でやってることだろうに。それに、顔トマトみたいになってますよ。恥ずかしいならそんなことしなくてもいいのに。

いやまあ、嬉しくなくはないが、これくらい昔から姉にやられている。彼女たちは俺の四つ上。彼女たちが七歳の時、俺は三歳だ。さすがに小学校に入学したら止めたが（つか、母親に止められたようだ）、風邪引いたりすると絶対に食物は俺の手で食べさせてくれない。

つまり、慣れてしまっているのだ。

しかし、彼女の行為を無碍にするわけにもいかない。

ので、ありがたく頂いておくことにする。

「あーん」

ぱくつ、とな。

ふむ、旨い。リンゴにはない、このシャキシヤキ感がまたー

目の前には、また白い果物。

いやいや、まだ食い終わってねーですよ。

つか、まだ顔真っ赤だし。恥ずかしいならやんなくてもいいのに。言った方がいいんだろうか、これ。

「あの、美味しい、ですか？」

「ふん、うひゃい。ふぁりふぁと」

小さめに切った梨といったって、食ったまま喋れば口から出そうになる。手で口押さえながら喋ったらこんなしゃべり方になった。

なんで敬語なんだとかは気にするまい。彼女の頭は今そんなことを考える余裕などないだろうから。

「っ、あゝ。高崎さんも食べたら？ 結構美味しいよ、この梨」

噛み損ねた大きなカタマリを無理矢理喉に押し込んだら、ちよつと喉が痛かった。実は二個目。間髪入れず出された梨は既に喉を通

った。

「え、あ、うん」

膝の上の皿から一個梨を刺して、口に持って行く。

そこで、青春まつただ中の俺たちには結構重要な問題に俺は気づく。

俺は気にしないからいい。

あー、彼女も気にしないのかな。ならいいんだけど。

フォーク同じの使ったべ？

「っ・・・」

フォークを口にツツコんだところで彼女は漸く気づいたようだ。

白く通常の顔色に戻りかけていた彼女の顔が、また首もとから真っ赤になっっていく。

「ご、ごめんなさい」

「え？ いやいや、謝ることないけど。俺そっこの慣れてるし。

気にしなくても」

「そっ、ですか？ 良かった・・・」

彼女の顔が途端に安堵の表情に変わる。

ふん？

安堵の際、彼女が見せた笑顔。

それはいい。可愛いから許す。オヤジっぽい発言かも知れないが、これ事実。

問題は、俺の方。俺の体。

なーんか、心臓が跳ね上がったまま元に戻らないんだよな。顔もさつきみたいに熱いし。やっぱ、風邪か？

「千葉くん、本当に風邪じゃない？・・・私といたから、疲れちゃったのかな？」

申し訳なさそうに彼女は言う。今度は、本当に心配してくれてるようだ。

実際、そんなことは全くない。彼女と話せて楽しかったと思う。原因不明の動悸と熱っぽさは、急激な回復の副作用のせいにする

ことにする。なんなんだろうな、コレ。

心配そうにこちらを見る彼女に、

「いや、今日は楽しかった。ホント」

本当に簡単ではあるが、謝礼を兼ねて彼女に本心を告げる。

こういうとお別れみたいだが、実際今日はお別れだ。もうすぐ面会時間が切れる。

姉貴たちには今日友達がくるから面会時間切れるまで帰ってくんな、と言ってある。かなり不満そうだったが、今日は彼女とゆっくり話したかったのだ。

その時間ももう終わる。

「うん、私も、楽しかった。明後日、退院だね？ また、明日来ても、いい？」

「もちろん。高崎さんなら大歓迎」

照れ隠しで、大げさに腕を広げる。

彼女は嬉しそうにはにかんで、部屋を出る際、小さくコチラに手を振ってドアの外に消えた。

途端、静かになって、少し寂しい感じがしなくもない。

名残惜しい気はするが、別にこれが今生の別れだとか、そういうものではないし。

病院の玄関までまっすぐ延びていく道に行く彼女の背を見ながら。  
俺は

（退院したらどっか遊びに誘おうかしら？）

などと、今まで考えたこともないことを考えていた。

自分がすでに戦いに参加するという意思表示をした後だということ、すっかり忘れて。

奮い、後悔、そして破壊・オウス、リモース、コラップス・

やってみると、意外に簡単だった。

何が、だつて？

決まってるじゃないか。

俺に託されたチカラが、だ。

V a c a n c y --- 空きスペース。

普通は直訳するとそうなるっばい。こういう使い方が一番多いんじゃないか、ってこと。

ただ、それは元々の持ち主、ヴァルキュリアその人がそう呼び始めたただけだ。

彼女の意図するところ、彼女が示したかったそれ。

V a c a n c y --- すなわち、虚空。或いは、空虚。

どちらもほぼ同じ意味。ぽっかりと空いた、何も無い、虚ろなイメージ。V a c a n c y。

生物はもちろんのこと、無生物ですら、有機、無機、発熱問わず存在しない。

そんなイメージだった。それまでの、俺には。  
だが、彼女の言葉に依れば

「虚空とは、一般には何もない空間、もしくはそら——雲が浮かぶ、あなた方の世界では青いあの空を指すようですね」

そう、あの世界には色が全くない。

まるで、そんなものをはじめから存在しない、概念すらないのではないか、と疑ってしまう。

白と黒も色だからその表現は必ずしも合っていないのだが、形を区別、判断するための最低限のものしか使われていない、というのはちよつと異常だ。

あのときは俺がまだ俺が瀕死だったのと、彼女の庇護をうけることを決めてなかったから、らしい。今度行くときは、ちゃんと色彩が施されているのが目に映るだろう、ということだ。

まあ、俺が再びあそこを訪れるのはまた後の話。

「ですが、あなた達の国では有名でしょう——仏典では、虚空とはそれすなわち、

・・・一切の事物を包容してその存在の成立を妨害しない

とのこと。虚空や空虚と言われれば何もない殺風景な感じがするかと思いますが、実際は全ての事物、事象を包括する、全ての空間を指すようです。

そしてそれは、このVacancyも、同じ」

彼女によると、Vacancyは虚空——つまり、空間——を操る能力らしい。

操る、っていつでも、火や水を自由に操るのとはわけが違うような気がする。火や水は目で見る事が出来るが、空間とは俺も存在する領域のことで、その姿を見ることがなど不可能だ。

確かに存在するが、目には見えない。

目には見えないが、確かに存在する。

自分に見えないものなど、操れたところで何がどうなっているか分からないだろう。違う部屋でラジコンを操縦するようなもの何じ

やないだろうか、と俺はそう思ったわけだ。

「そんなことはないですよ？ 歴代のV a c a n c yは、空気の相——空相とでもいうのでしょうか、が見えるようになっていたようです。あくまでも、V a c a n c yを保持している間、つまり戦いの間だけ、ということになるようですが」

ふーん。

なるほど、”能力を使うのに必要な”能力つてのもくつついてくるのね。便利な話だ。

超能力お手軽パック、みたいな。

必要な器具や工具も全て入ってる、デ ゴスティーニシリーズみたいな感じか。

・・・どうでもいいな、ホント。

オチがつかなくなりそうなので、話を戻す。

「V a c a n c yの使い方については、先ほど紹介した天使に<sup>エリ</sup>聞いて下さい。彼女の方が、私より詳しいでしょう」

と、彼女はそう告げて、俺の前から消えた。

こんなただっ広い空間に一人だけ残されて、さてこれからどうしようなんて考えているうちに、

黒い世界の白が消え、目の前がいったん真っ暗になって

一瞬の浮遊感の後、

次の瞬間にはマスクをした女性二人が白い空間でこちらをのぞき込んでいる画像に切り替わった。

一瞬の浮遊感は、立っている姿勢から寝ている姿勢に変わったからだと気づく。

それと同時に、俺はそこがベッドの上で、さらに雰囲気と鼻をつく消毒薬の独特の臭いで、そこが病院らしいと気づいた。

腕に、少しの違和感を感じ、そちらを見ると、左腕には分厚

く包帯がぐるぐる巻きにされていて。右腕には点滴、そして。

向こうの世界で見た、紋様がうつすらと消えていくところだった。すでに完全に消える直前だったらしく、それは一瞬だったから看護婦（今は看護師と言った方がいいのか？）さん達には気づかれなかったようだ。正直、そこにあると分かっていなければ確認できなかっただろう。

それに、看護師さんたちは目をさました俺に向かって

「大丈夫ですかー、千葉利明君。見えますかー。見えたらお返事して下さいねー」

そんなことを言っていた。その視線は顔だけに集中していたので気づかれるということもあるまい。

「はい、大丈夫です」

と重傷にしてはやけにはつきりした声（だったと、看護師さん達はそう思っていたらしい）で、俺は無事を知らせる。

話しかけてきた看護師さんが、もう一人の看護師さんに目配せをすると、そのもう一人の看護師さんは頷いて出ていった。

・・・そのあと、家族（っていうか、四姉妹な）が、なだれ込むようにして病室に入ってきて。

ベッドの上の俺にさらなる危害を加えそうだという理由で、俺に声をかけた看護師さんーだと思っていたが、その人は俺の担当医、萩原さんその人だったらしいーにつまみ出された。有紀ネエと親父以外。

まあつまり母さんもつまみ出された。残りの三人が暴れ出すかも知れないから、なんて言ってたけど、どうだかね。俺の頬をいきなり往復ビンタしたやつはこのどいつだったか。

まあそんな感じで、俺は戦いに参加することを誓い、ヴァルキュリアにチカラを託され、エリーに出会い、蘇りを果たした。

それがたとえ、統括者による、仮初めの生であっても。

戦いに参加するための、目的のための、モノのような扱いの命で

あつても。

俺は。

俺は、再び家族に会えて良かったと思った。

そして。

思ったからには、負けられない。そう、再び心に刻み、誓った。

絶対に、勝つ。

日本の平和を守るなんて、大それたことを言うつもりは毛頭ない。大切な人が生き残ってくれば、究極それでいい。

分かっている。

自分がどうしようもなく我が儘で、自己中心で、エゴイストで、救えないほど莫迦だということくらい。

痛いくらい、自分で分かっている。

だから、俺は。

莫迦なりに。

戦って、

絶対に、

勝ってみせる。

誰も俺の勝利を見ない。聞かない。知ることもないだろう。

ゆえに、先にある勝利には祝福も、感謝も、勲章も、名誉もありはしない。あるはずがない。

それでも、いい。

俺は、まだガキだ。

図体は大人でも、まだカネや名誉、栄誉や手柄、名声などには全く興味がない。そういうものは、いらぬ。

ただ。

ただ、そこで。

俺の大切だと思うヒトが、たとえそのヒトにとって俺は大切じゃなかったとしても。



そのヒトが、笑ってくれていれば、それで、いい。

ただの自己満足だと言われても構わない。  
残された、生かされた身にもなってみると言われれば頭が上がる。  
ない。

でも、俺は、自分が傷つきたくない。

大切なヒトが傷つき、死んでいくのを見たくない。

それはただの自己庇護欲。そう言われても俺は反論できない。

他人が傷つくことによって傷つきたくない自分を守るために、他人を守り、自分を傷つける。

端から見れば、可笑しい。おかしいに決まっている。

でも俺は、大切なヒトを失う痛みを知っている。

それは、何事にもたとえられない。一番近いのは、絶望。

それも、近いだけだ。

「利明・・・お姉ちゃん達を、守ってあげて」

懐かしい声。その声は俺の耳に張り付くように残る。

俺は、莫迦だった。

自分のことで精一杯で。姉に追いつきたくて、妹に追いつかなくて。

アイツのことなど、全く気にしてなかった。

むしろ、鬱陶しいと感じていたかも知れない。

いつからか、アイツのことを目の上のたんこぶのように感じていた。

純粹に、邪魔だと、思ってしまった。

俺にやたらと構うアイツ。世話を焼きたがるアイツ。姉たちに負けじと、俺に近づこうとした。

俺は、アイツを拒否した。

姉には逆らえない。が、アイツはほぼ対等だった。拒否は、可能だった。

いつも、一定の距離を置いてアイツと接していた。

一番近くあるべきアイツ。俺はアイツを突き飛ばしたに等しい。愚か、だった。浅はか、だった。

その結果が、アイツを永遠に失うということ。

あの声、あの笑顔、あの手のひら、あの体、アイツの、全て。

もう、感じることは出来ない。何を以てしても、掴むことは出来ない。

もう、失ったものは戻ってこない。手で掬っても、指の間から抜け落ちて形にならない。残るのは、思い出という残滓だけ。

「利明」

あの声で、呼ばれることも、甘えられることも、頼られることも、抱きつかれることも、永劫、ない。

だから俺は。

これ以上を、失うわけにはいかない。

また失えば、アイツに笑われる。バカにされるだろうし、叱責されるかもしれない。

反省を生かせないのは、真の莫迦。本当のアホ。

俺はアイツに誓った。

家族を、大切なヒトを守ると。

アイツは言った。

守れなかったら、本当に怒るからね、と。

だから俺は守る。

全てを懸けて。

だから戦う。

このチカラーVacancyで。

見返りなど、必要ない。

俺が欲しいのは、安寧と、平和と日常。  
そして。

彼女たちの変わることのない、笑顔だけ。

失って傷つく自分が怖い。

偽善で固められた決意は、偽善が故揺るがない。

その罪は深く

後悔は、無限に等しい

誓いは濃く

責務は、重荷

背負って歩くは咎人の定め

払いて進むは戦士たる証

振り返ることは不可

あるのは前進のみ

行き着く先が地獄であろうと

俺は歩みを止めはしない

行く先を壁が阻もうと

俺が立ち止まることはない

俺は死者

既に死するモノ

日光は毒

月光は故郷

闇に染まりし我が剣は

光を引き裂くすなわち反逆

陰に浸かりし我が心は

光に牙剥くすなわち無謀

次なる敵を

更なる破壊を

この身が求むは闇の性

護ることでは守れない

破することでは築けない

我がもたらす破壊と安寧

止められるモノは――温もりにも似た幼な声

## 最近おかしなお兄さん

どうもご無沙汰しています。

千葉澄香です。中学二年生なぞをやっております十四才です。以後お見知り置きを。

皆さんもご存じの通り、私は兄さんの妹です。この家の末っ子です。五女です。

今日、晴れて兄さんが退院いたしました。ぱちぱち。

病院に運び込まれたときは助かる見込みはないだろうと言われていたほど重傷だったのですが、兄さんはたった二週間で退院しました。

・・・え？ 何です？

それはおかしいんじゃないか、って？

ええ、まあ最初は驚きましたよ。

手術室のランプが消えて、中から思い詰めた表情で出てきたお医者さんを見たときはまさか、と思いました。

でも、そのお医者さんが

「手は尽くしたのですが・・・お宅の息子さんは――」  
と、そこまで言ったところで

「先生！ 患者の心肺機能、回復しました！ 正常値より少し低めですが、問題はありません！」

と、看護師さんが中から出てきて言いました。

「なに！？」

とそのお医者さんも血相を変えて戻っていきます。

そして、30分くらいたったでしょうか。

「息子さんは・・・ご無事です」

と中から出てきたお医者さんはそう言いました。その顔は釈然としない表情を浮かべていました。

その理由は、いきなりの回復でしょう。

いったんは活動を完全に停止した心臓と肺。

それが回復したばかりでなく、傷ついた臓器、骨までもあらかた修繕が終わったとも言うように回復していたそうですから。

まあ、私の家族はおかしいです。その一員である私が言うのもなんですが。

兄さんは、姉さんと一緒に、あまり特徴がありませんでした。二人とも、目の下にほくろがあつて、兄さんは右目下に、姉さんのほくろは左の目の下、だった気がします。外見の特徴は、それくらい。

兄さんの特長というのは、その異常な回復力、だったのかも知れません。

それでも少しおかしいというのは私も思いますけれど。

生きていたのだからそれで良かったのではないのでしょうか。

しかし、意外と思い当たる節もあるんですよ？

思えば、兄さんの顔には青年期特有のニキビは一つもないし、怪我をしても2、3日すればけろつとしていることが多かった気がします。

それに、二人とも特徴がなかったわけではないです。

二人ともかつこよく、綺麗だったというのは事実です。特に姉さんは、この家で女の中では一番異性にモテる、有紀姉さんよりもモテていた気がします。

姉弟とはいえ、あまり似ていなかったというのもありましたし、二人の仲が睦まじいというのもあったからでしょうか。

二人は、よく恋人に間違えられました。

登下校中の道で、その道草の公園で。

母に頼まれた買い物、その先のスーパーで。

家族全員で出かけた、デパートで。そこで入った、レストランで。

姉さんはそのたびに嬉しそうな顔をしました。

兄さんは・・・困ったように、照れたようにはにかむのがやっとだったようです。

男のヒトは、そういうのが恥ずかしいからしょうがないんだよ、と姉さんは言っていたような気がします。

私は、あの二人が羨ましかった。

有紀姉さんや花音姉さん、弥栄や私のように、才に溢れていたわけでもない――ふたたび、自分で言うのもなんですから。

あの二人は、才などなくても、私たちにはないものを持っていた。

ですから、姉さんがいない兄さんは、前のようによく笑うことはなくなりました。

ふさぎ込むことすらありませんでしたが、泣くことも、嘆くことも、引きこもることも全くありませんでしたが――少し、尖った気がします。

自分の中にある何かを追い出すように、自分の体をいじめるように――兄さんは、鍛錬、修練に励んでいました。

あんな兄さん、見たことなかった。

日々増えていく傷と痣。

最初に耐えられなくなったのは、兄さんを一番に心配する、有紀姉さんでした。

「利明、なんでそんなに無茶をするの？ そんなことをしたって・

・

「分かってるよ姉さん。そんなこと、俺が一番知ってる」

「じゃあ・・・」

「でも、だめなんだ。約束を守るには、アイツとの約束を――姉



さんたちを守るには、いまのままじゃダメなんだよ」

その目は、何というのでしょうかね。

疲労で濁ってはいたものの、確固たる意志を感じさせる、強い瞳。いつも朗らかだった兄さんとは、別人のようでした。

それは、戦う覚悟を決めたものの顔。

彼は、自分の中で、姉さんとの約束を必ず果たす、そう誓ったんだと思います。

ニキビ一つなかった顔には少し生傷が出来ていました。

多分、それからだったと思います。

今まで見せたことのない、真剣な表情を見てしまったその日から。私は、兄さんを一人の男として見るようになったのだと、そう思います。

それは多分、弥栄も同じだったでしょう。

その次の日から彼女の目は彼の背中しか追っていませんでしたから。

あれから、五年。

兄さんはやっと丸くなってきました。

生傷をつくつてくることはもうなくなりました。それだけで、私たちは安心です。

たまに、無茶をして痣をつくってくることはありますが、それはまあ許容範囲です。兄さんに構う理由が出来ますから、私は歓迎します。

・・・べつに、怪我をして欲しいというわけではありませんよ？あんなボロボロの兄さんはもう見たくない。

守ってくれようとする意志は嬉しいですが、私は兄さん自身も守って欲しい。そう思います。

兄さんがいなくなったら、私たちを守らんとしていなくなってしまうのだとしたら。

私たちは一生後悔します。

その不幸に巻き込まれた自分を、呪うかも知れませんが、支え合つのが家族だと、私はそう思うのです。

それでも、あのときの尖った兄さんを思い出してたまに体が疼きそうになる、というのは恥ずかしいので秘密です。

さて、その兄さんなんですが、最近少しおかしい気がします。最近、といつても入院してから、ですけれど。

独り言が多かったり、出ていった様子は無いのに家の中にいなかったり。私の気のせいかも知れませんが、何かを思い詰めるような表情をすることも多くなつた気がします。

特に脈絡もなく、

「姉さんやおまえ達は、俺が絶対守るからな」

なんて、あの日の台詞を繰り返してみたり。今までは、態度だけで言葉には出さなかつたんですよ？　おかしいですよ。

その言葉に花音姉さんや弥栄はただ赤面したり嬉しそうな顔をするのですが、有紀姉さんは少しおかしいと思つていたようです。さすが。

それで、というわけではありませんが、少し兄さんの動向を探ることにしたわけです。

有紀姉さんは深夜を担当してくれるということですから、私は主にこの時間帯、夕方から夜にかけて、ということになります。

兄さんは日課のランニングをこなしてくる、といったところで私たち全員に止められ、少し拗ねながら部屋に戻っていきました。

なんていうか、アホですね。

他の部分は尊敬に値しますが、自分の体を顧みないところは本当にバカだと思います。失礼ですが。

ということで、兄さんは今部屋にいるはず。

私たちの家は結構お金持ちです。特に姉さんたちはバイトで中々

の額を稼いでいるようで、テレビやパソコンが普通にあります。部屋が広いので普通に置けます。ベッドがあっても。

兄さんも夏休みや冬休みにバイトをしていたようで、パソコンを自腹で買って、テレビチューナーを買ってきてそれでテレビを見ているみたいです。今話題の「i」のつく携帯音楽プレーヤーも普通に持ってます。

というか、それに関しては家族全員が持ってます。お父さんが技術士として幾ばくかのテクニックをあの会社に授けたようで。お礼なのでしょう。人数分のプレーヤーが送られてきました。

兄さんの部屋は三階にあります。兄さんが星を好きになったのも、この部屋の位置が理由かも知れません。ベランダに梯子をつけて、屋根に上がって寝そべるのが好きなんだと言っていました。

・・・たまにそのまま眠ってしまつて風邪を引くこともありましたが。

さて、足音を忍ばせて三階へ。

兄さんの部屋が一番奥の右側です。手前の左右の部屋は有紀姉さんと花音姉さんの部屋です。

間にある電話の子機を置いた棚等を避けながら目標に近づいていきます。

目標まで50センチ。

部屋の明かりはついていますが、ドアの隙間から光が漏れているのが目にとれます。おそらく、部屋にいます。今日は曇っているので星は見えませんが。

聞き耳をそば立てようと、ドアに近づこうとし――

「何やってんだ？ お前」

うひゃあ！？

い、いまのは心の声です。声は出していません。息を呑んだ音は出たかも知れませんが。

見つかってーというかバレてしまいましたか？

………

ふう。兄さんは部屋から出てきません。どうやら大丈夫だったー

「……澄香？」

油断していました。

がちや、とドアが開いて、上を見ると兄さんが不思議そうな顔でコチラを見ていました。

この表情も、なかなか・・・ではなく。

「なんか用か？ 花音ネエがまたなんかやらかしたか？」

「え、あ、いや、そういうんじゃないんだけど・・・」

どうしましょう。いいわけが思いつきません。

普段はほぼ無理矢理理由をつくって兄さんに頼ってます。構ってます。普段の兄さんは失敗などしませんから構う必要は本当のところないですし、私もそこまで抜けてはいませんから、あまり兄さんに頼る必要性がないです。

どうしようかと考えあぐねているとー

「あー、なんか、悩み事か？ 俺で良ければ聞くけど」

「どうだ？という感じで首を少し傾げ、少し微笑む兄さん。」

少し微笑む、なんて変な表現ですが、こんな感じで笑うのが兄さんの常。あまり大笑いしない・・・くすぐられると凄いことになります。

「う、えと、悩み事はないんだけど・・・」

少し、お話ししたいかな、と言ってみました。

演技ですが、半分ほど本音です。

「ああ、別にいいぞ。暇だったし。入って・・・あれ？」

いやにすんなり通してくれました。

いつもはーああ、邪魔者がいるから入れないだけでした。兄さんは別に私たちを拒みません。私たちが皆牽制し合っているだけ

なのだということに今気づきました。

久しぶりの兄さんの部屋。

あまり変わっていないです。意外とマンガ好きな兄さんは同じくマンガ好きの花音姉さんと割り勘定でマンガを買っています。五百冊以上あるんじゃないでしょうか。ちなみに、蔵書量も割り勘です。そんな事情がありますから、一番気兼ねなく、かつ日常的に兄さんの部屋に入れるのはー性格が図々しい、というのもあるのですけどー花音姉さんです。

他に増えたものはないようです。

机、デスクライト、コンポ、本棚、机の横についたパソコンデスク、クローゼット、タンス・・・ありふれたものばかりですね。普通です。普通じゃないのは弓くらいでしょうか。洋風な部屋の雰囲気と和風の紋様の入れ物が見事にマッチしていません。ベリー・アンマツチ。

・・・こほん。

英語は苦手です。

「ほら」

兄さんがベッドのところにあつたクッションを投げてきました。それをキャッチします。汗の臭いが少しします。洗濯しなければ。兄さんはイスに座り、机に脚を投げ出しました。行儀が悪いですが、これが一番ラクなんだとか。私も真似してみました。腰が痛くなりました。

私はクッションを抱えたままベッドに座り、そのまま横に倒れます。

・・・別にフトンのおいまで嗅いでみたいとか思ったわけではありませんよ？そんなつもりはまったく・・・すー。いい香りです。毎日干しているでしょう、柔らかいです。

そのまま兄さんは机を眺めているだけです。

私が話しかけるのを待っているのでしょうか。

あれ？

兄さんを見ていて一つ気づきました。

「ね、そのピアスどうしたの兄さん？」

兄さんがピアスをしているのに気づきました。

はて？ 退院したときはつけてなかったような。

「あ、ああ。気分」

そうではなく。そのピアスをどういった経緯で入手したかを聞きたかったのですが。

少し顔を強ばらせましたね？ 兄さん。お見通しです。

「自分で買ったんだよ。今日び、貧乏な学生がアクセサリーなんか送ってくれる訳ないだろ」

そうでしょうか。むしろ現代だからこそ送るのだと思うのですが。

「そんなことないんだな、これが。現に、俺お前ら以外からこういうものもらったことないんだ」

それはそうでしょうね。兄さん鈍いですから。

本当に、告白されるまで気づかないっていうのが常なんじゃないかと思えるくらいに。

あ、指輪つけてる。

あの指輪は、私と弥栄で去年の誕生日に送ったものです。小さいですが、ターコイズがあらってある、結構おしゃれな指輪です。

「ま、他に貰ったとしても、俺はつける気はないけどね（これ高そうだし、外しててなくしたら大変なもの 心の声）」

.....

こういうことを恥ずかしげもなく言えるのも兄さんのいいところだと思います。あ、ニヤケてきた。いけないいけない。

まあ、今のは嬉しかったですね。シスコンなだけかもしれないませんが、とにかく私が嬉しかったのでそれでいいです。

あれ、私何しに来たんでしたっけ。  
まあいいや。兄さんが嬉しいこと言ってくれたし。良しとしまし  
よう。

最近おかしなお兄さん（後書き）

澄香も結構アホです（笑）

天才とバカは紙一重ってやつですかね（多分違う



## カノジョの弱点・ウィーク・ポイントー

イメージは、振り下ろす爪。たたき上げる拳。薙払う腕。蹴り飛ばす足に、叩きつける頭。

それら俺の中で作り上げられる想像は、ショック衝撃として相手に伝わる。

空間を操る、ってこういうコトだったんだな、なんて今更納得。

ちなみに、可視範囲であれば相手が何処にいても当てることは可能だ。空間を座標として捕らえるというよりも、想像の中で自分なりの空間を作り上げるという感じ。

敵の位置が分からなければ当てることは不可能だけれども、位置さえ分かっしまえば当てられる。そういう能力。

自慢じゃないが、俺の視力は両目とも3に近い。結構遠くのモノの距離感も掴めちゃったりするので、この能力は案外俺にあっているのかも知れない。

ま、それはいいとして。

「はっ・・・はっ・・・はぁー」

結構疲れるんだよ、これ。

超能力ってあこがれてる人も多いんじゃないかと思うが、それに代償はあるっぽい。現実の超能力がサイキックどうなのか知らないが、旨い話なんてこの世の中に存在しないってことだな。ちょっと違うか「ふうっ」

呼吸を整え、前を見る。

形の細かいところは判断が付かない。なんせ500メートル先の

ドラム缶だし。500、なんてとくに陸上競技とかやってる人には大した距離に聞こえないかも知れないが、直線で見るとかなり遠い。ドラム缶はあのテレビとかでよく五右衛門風呂に使われるデカイタイプのやつ。それが少し遠目で見る空き缶よりも小さく見える。っていうか、ほとんど見えない。

視力3に近い俺でさえこの見え方だ。一般人には見えないんじゃないか？ 普通の人は1前後って話を聞くけど。

視力は単純に見えなくなるまでの距離を整数倍するだけなので、たとえば、俺が30メートル先の文字をぎりぎりで判別可能だとしたら、視力1の人は10メートル以上離れてしまつと見えなくなってしまう、というわけ。あくまで基準だし、そもそも聞いた話なので真偽のほどは知らん。

「んー、お疲れ」

向こうにいたエリーが羽をバツバツサと音を立てながら戻ってくる。意外とこの羽、はばたくとうるさい。もちつと優雅に飛んできたりしないもんですかね。イメージガタ崩れ。

しかし、飛行だけに移動は速い。彼女は時速80kmまでなら出せるそう。速い人は150出せるとか出せないとか。そんなにスピード上げたら目的地に着くより先に体がどうかなりそうだけだな。今も、500メートルを四十秒くらいで戻ってきた。時速45キロ。路面電車とかその類よりも速い。

その手には、複数穴が開き、見るも無惨にひしゃげまくったペンキ剥がれかけのドラム缶。最初は新品だったんだが、何回か掠ったらしく、ペンキが剥げ、折れ曲がったりしているうちにそこからさらに剥がれていった模様。

・・・あん？ なんだって？

何が掠ったか、だって？

決まってるじゃんか、<ヴェイク>だよ。

・・・うん？ 今度は、なにになに？

<ヴェイク>ってなんだ、だと？

V a c a n c yだよ、V a c a n c y。  
いちいちヴェイキャンシー、っていうの面倒だろ。

・・・え？ 単に作者がいちいち英語打つのが面倒だからじゃないか、だつて？

知るかそんなん。

俺に聞くなよ。本人に聞いてくれ。

とにかく、俺は<ヴェイク>って呼ぶことにしただけ。

エリーの話じゃ、みんなこうやって略して読むのが普通らしいし。ヴアルキュリアも意地悪いよな。教えてくれれば良かったのに。

「まあ、初めて三日にしちゃ、上出来だわね」

彼女は浮きながら件のドラム缶を品定めするように手で吊りながら色々な角度でそれを眺めて言った。

上出来だつてさ。目良くなかったらここまで出来なかったな、多分。神様の贈り物、ギフトに感謝。

「でも、ちよつと持久力が足りないかな。体力はあなたあるみたいだし、あとは馴れだと思っわ」

持久力ねえ・・・。

これでも一応体力はある方だと思うんだけど。10kmを40分前後で普通に息を切らせずに走ることは出来るくらいには、体力を付けているつもり。水泳だったら、2時間くらいならぶっ続けでも泳げる。無所属、別称帰宅部にしちゃ、上出来だろうと思う。

基準がよく分からないので、もしかすると高校一年生にしては体力が少ない、なんてこともあるかもしれない。

「いやいや、体力はあるみたいだけど、って言ったの私は。あなたに足りないのは、じ・きゅ・う・りょ・く・よ。持久力」

「？ 持久力〃体力じゃないのか？」

「んー、それは普通の運動ではそうなのかもしれないわよ？ マラソンだったり、サッカーだったり、バスケだったり、セパタクロー

だつたり」

なぜに最後だけマイナースポーツ？

バレーとかバドミントンとか見てくれだけは似たようなスポーツもあるだろうに。」

「うるさいわね。いちいちツッコまないでよ」

そういう彼女の頬は少し赤い。いくら高齢でもコイツの場合は精神年齢は外見と一緒にらしい。

「いいじゃんか別に。セパタクローなんてほとんどのヤツがしらねーべ？ 俺なんか最初に聞いたとき何かの必殺技かと思ってたし」  
セパタ・クロー、みたいな。

セパタなんて単語は聞いたことなかったが、造語なんてこのご時世溢れに溢れまくっている。クローは「爪」のクローな。

だから、なんか「の爪！」みたいなのを勝手にイメージしていたので、それが足版バレーボールみたいな競技だと知ったときは驚いた。意外にも有紀ネエと花音ネエはその存在を知っていて、授業でもやったことがあるそうだ。

「ま、花音の独壇場だったわよ、あれは」  
だそうだ。

足だけしか使えないというのが基本ルールらしく、サッカーの経験でもない限り、地面に落とさずにボールをキープし続けるというのは運動神経がよくてもつらいだろう。女子なら尚更じゃないか？  
「もういいのっ！ そんなことは。あんまりしつこいと教えてあげないからねっ」

ありや。

機嫌を損ねたらしい。彼女は頬を膨らませて向こうを向いてしまった。小柄な彼女の体格に、大きな翼が何ともアンバランス。

「悪かったって」

「・・・・・・」

本格的に怒らせてしまったようだ。

案外大人げないな。80才のくせに。15の若造の戯言なんて聞

き流してしまうほどの貫禄がついていてもいいんじゃないだろうか。  
付き合って、というか知り合ってあまり経っていないので怒らせ  
たときの対処法が思いつかない。もとい、見あたらない。

どうしようか。

いつまでそんな怒ってるんだ首疲れないのか、とか思いつつ彼女  
を眺めていた俺の頭に、神降臨。わかりやすく言うと、頭の上に電  
球がぺかーん！と。

要するに、グッドアイデアが浮かびました。

ふふん、腐っても四人の女子と一緒に暮らしている身。怒らせた  
相手が女性だった場合のみ大抵通じる方法を俺は熟知している。多  
分男にや通じないだろうな。そういう方法だ。

さて、思い立ったが吉日。さっそくミッションスタート！

ダダッダッダダン！なんて場違いなBGMが俺の脳裏をよぎった。  
だって、ねえ？

ミッションとかいうと俺これくらいしか思いつかないし。

マト ックスとか、ミッション・イ ポッシブルとかは咄嗟にB  
GMが思いつかん。

向こうを向いたままの彼女の背中にそっと近づく。

・・・デカイ羽が邪魔だな。脇の下から手通すか。

羽が丁度肩のあたりを覆っていて、肩から彼女の前側に手を通す  
のが難しい。

というわけで、羽の下側、彼女の脇の下あたりにねらいを定め、

一気に――

「ひゃわあっ？」

抱きすくめて怒りを有耶無耶にしちゃおう作戦！

「くっ、ちよっ、はなっ」

「んー、意外と軽いし、すー・・・なんかいい二才いすんな、お前」  
うなじあたりに鼻を近づけると、女性特有の甘い香り。人間でも

天使でもそこは変わんないらしい。

「やつ、やめ、くすぐりたいからあ」

「ふー」

「きやう！」

耳に絶妙な加減の息を吹きかけてやった。

耳まで真っ赤にして、彼女の体がビクンとふるえた。ココが弱いらしい。可愛いヤツ。

「じゃーあー、教えてくれるかな？ 意地悪なんてせずに」  
猫なで声。

それを出す合間にも、耳に息を吹きかける。

「お、教える、ひやわ！ 教えるから・・・っ」

「ほんとーに？」

「ほ、ホント！ 本気で！」

「そう。じゃあ、これからもご教授よろしく」

ぱ、と手を離すと、彼女は力なく膝をつき、肩を上下させて荒く呼吸をしながらこちらを軽く睨んだ。心なしか翼が垂れているような。本人の気分によって変わるのかしらん、なんて思ったり。

「大丈夫か？ まさかそんなに効くとはおもってなぶっ」

「うるさいこのバカ！」

う、おおー。見事な左。

ガードは間に合ったが完全ではなかった。柔いガードは腕ごと顔に押し戻されて結果的にダメージ。鼻に当たって結構痛い。

「ほら、行くわよ！」

ばっさばっさと羽を動かして浮く彼女はこちらを見てそう言った。その頬はまだ少し赤い。

つか、どこに行くんですかい？お姉さん。

「次の練習場所！」

そんな怒鳴らなくったっていいだろよ。

「はやく！」

へーへー。せっかちなお嬢さんだ。

ぴん、と俺の中の空気が張りつめる。

足下の空気を引っ張り上げるイメージ。

指先を足の先に向け、引っ張り上げるようにして軽く引く――すこしの重さが指先に引っかかる感覚――成功。

それを引っ張り上げると、俺の体も持ち上がる。空気っていうのは案外力持ち。引っ張り上げる俺自身の力はほとんど必要じゃない。同じ高さに上がってきた俺を見て

「・・・上出来」

彼女は満足そうにそう言った。

「どうも」

そっけなく俺は返したが、結構嬉しい。

「じゃ、行くわよ。その調子じゃ、とばしても問題はないわね？」  
ふふん、と笑って。

確認するように挑発する彼女。

俺は答える。

「No problem」

無問題。

来る敵がどんなのかは知らんが、この時の俺はまだ何とかなるんじゃないか、なんて思っていた。

まあ俺が意味の分からない（なんて言ったらヴァルキュリアやエリーに失礼だけれども）戦争に巻き込まれていようがいまいが、世界は回る。

昨日が終わって今日がはじまり、明日が訪れるそのシステムにはなんら変わりがない。

俺が退院したのは土曜日。で、一日と少しをくヴェイク>の修練

に当てたので、あれよあれよのうちに今日は月曜日。

「ふあああー、つくう」

あくびを無理矢理かみ殺しつつの起床。

基本俺は何処でも寝られる自信があつたんだが、病院のベッドと枕つて、固いわけじゃないんだが、なんか寝心地が悪かった。

・・・ただ単に夜の病院のあの独特の雰囲気嫌だった、つてもあるが。姉たちがいたとはいえ、結構ビビってました。情けないけれど。

つーわけで、病院でもまともに寝ておらず、この土日もほとんどを運動でつぶしてしまい、俺の疲労度&眠気はMAX。

・・・こりゃ、普段学校で寝てなくても「今日は寝よう!」と思ってるだろうな。

三階の洗面所で顔を洗い、髭を確認。最近少しだが伸びるようになってきた。うぶ毛だけ。

特に問題なかったので部屋に戻り、寝間着のジャージとTシャツを脱ぎ捨て、脱衣かごにスローイン。

シャツを羽織って夏服の生地が薄い紺色のズボンをはく。ネクタイは・・・まあいいか。学校ですれば。

親父のお陰でタダで手に入れたミュージックプレイヤーと、最近買った新しいヘッドフォンを持ち、暇つぶし用の文庫本と単語帳以外特に何も入っていない(置き勉です)カバンを肩に掛け、いざ階下へ。

居間に入る。すると

「あ、兄さん、おはよう」

ぺこり、と会釈したのは澄香。

「トシ兄! おっはよー!」

朝からテンション高いなお前。こっちは弥栄だ。

「ああ、おはよ」

適当に返事を返す。スマン、今日は本当に眠くて。

「兄さん眠そうだけど・・・大丈夫?」



わりかし大丈夫じゃない。

「ふわあああ、っと」

本日二回目のあくびはかみ殺さなかった。顎痛いし。

「トシー、朝ご飯食べるのー？」

うーむ。

あ、今日パンか。歩きながらも食えるな。

「んー、食う」

そういうと、母はすぐキッチンから出てきた。

今は眠いので紹介はムリ。また今度な。マジ眠い。

「はい、お弁当」

と、一緒に渡されたハムトースト二枚。

「ありがと。行ってきます」

「あ、待ってトシ兄。私も行くから、ちょっと待って！」

黙殺。

か。  
か。といいつつ、玄関先で待ってる俺を世間はシスコンと呼ぶだろうか。

（多分呼ぶだろうな）

むっ、なんだ今の声。天から降ってきたような。寝ぼけてんのかな。

「おまたせー」

そついいながら出てくる妹二人の姿を確認しつつ、パンを口にくわえて歩き出す。

さ、今日も一日頑張ろうかね。

「でも兄さん、寝るだけなんですよ」  
うるせえよ。

カノジヨの弱点・ウィーク・ポイント（後書き）

澄香は勘がよろしいようで（笑）

## 予兆（前書き）

数学の種別、ローマ数字にしたかったんですが機種依存だとかで載せられませんでした。

## 予兆

さてさて。

妹澄香に「でも兄さん寝るだけなんですよ」といやに胸に突き刺さる、予言(?)めいたお言葉を頂いた俺だったわけだが。

今日は(というかいつも)どちらにせよ寝るつもりだった。澄香は鋭いから凶星を突いて突かれるのは俺にとっても澄香にとってもあまり珍しいコトではない。

バスの中では立ったまま寝るといふ妙技を発揮。

目的地で何故かきちんと目が覚めるという都合が良い能力も身につけた俺。なんか寝るために生まれてきたみたいだな、なんて最近思ったりもする。

最寄りのバス停からおよそ3分ほどの場所に俺の通う学校はある。県下ではそこそこの有名な学校だけれど、全国的にはあまり有名じゃない。かのT大には毎年現役10、浪人10の合わせて20くらいが合格するみたいだ。敢えて格付けするならば中の上と言ったところか。一流でもないが、二流でもない。そんな感じ。

トップ10が合格すると単純計算するならば、俺も十分射程範囲内にあるわけだが、親父の薦めで留学をするかもしれないし、そこら辺はまだ分からん。

ちょうど始業30分前に校門を通過。学校では寝る俺だが、欠席もしくは遅刻を一度もしたことがない。別に不真面目なわけじゃないんだ。本当に眠いから寝ているだけで。いいわけにもならないのは自分が一番分かっているさ。

さ、教室に――

・・・・・・?

んあ？　なんか今季節感到そぐわない感覚が背中を撫でていったんだが。気のせいかな。眠いしな。

それに、空気が重い、というよりこれは鈍い？　っていうのか。上からのしかかる感じではなく、通せんぼをされているような感覚。足が思うように進まない。

ふむ。マジでやばいらしい。

・・・眠気が。

というわけで、では全くないが、当初の予定を変えることなく、半寝の状態で学校へ赴き、机に到着した瞬間に俺は睡眠を開始。高崎さんに寝る直前に何か言われた気がするが、脳内で睡魔が目覚ました状態の俺はステータスでいうならほぼ「気絶」に近い。

見えない、言えない、出来ない、聞こえない。

歩くことくらいなら出来るが、ヘッドフォンから流れる音楽すら聞こえない。そんな状態で人の話を聞けるはずもなく。

イスについた瞬間俺の意識は彼方へ飛んだ。戻ってくるのは早くとも2時間後くらいだろう。

・・・妙だ。この感覚。

ここは向こうではない。私たちが人間の住む世界と定める、私たちにとっても人間たちにとってもあらゆる世界の原義であるはずの領域。

この世界自体は人間にとって都合よく作られているはずであり、今人間としてこの世界に存在する私がこの感覚を覚えるはずがない否、覚えられないのだ。

人間と私たちは、いわば水と油。けっして相容れることはなく、分かり合う、分かち合うことなどおそらく永劫ない。その点で言う

なら、悪魔の方がまだ人間に近い。

世界は、その領域において危険因子および異常を排除するように動く。それはどの世界でも同じで、私たちの住む向こうの世界にも言えることであるし、その先、神々の居住エリアから行けるという平行世界でも同じことが言えるのだらう。

どういうことだ？

校門の外、すなわちこの学校の外は正常。至って普通。人間界のそれだ。この界限、昨日見渡してみたのだが特に異常は感じられなかった。

しかし、だ。

もし、この感覚を正しいとするのなら。

この感覚を信じるとするのであれば。

今、この学校の中は、私たちの居住区や、戦いのためだけに舞台として用意したアナザーワールド、AWと呼ばれる区画と世界としての形態が似通っている。

すなわち。

今、この中は天使や悪魔にとって都合が良く、人間にとっては都合の悪い空間である、ということになる。

おかしい。

たしかそんなことが出来るのは――

・・・考えても仕方がないか。

どちらにせよ、参加者がこの学校にいるのかも知れないということとは確かだ。

おそらく、戦いの火蓋が切って落とされるまでにそう時間はない。そういうことだらう。今確実に言えるのはそれだ。

・・・それにしても。

彼が最初っからこんなに使いこなすことが出来るとは思ってもみ

なかった。

この調子なら、戦争が始まってすぐに尖兵として呼ばれても問題ないだろう。体力もあるようだし、持久力がそれについて来るようになるのはおそらく時間の問題。

聞いてみると、「キュードール」という弓と矢を使うアーチェリーに似た競技を習っているそうで、視力には自信があった、と言っていた。

確かに、あのエイブラは視力が良い方が有利だ。特に、Vacancy――ヴェイクは“ルーム・ドラッグ”と呼ばれる類のエイブラではトツプクラスの威力を誇る。ヴェイクの特性を生かすのに、そういう意味でも彼は選ばれた人間。

エイブラとは、造語ablenation――エイブラネーションの略。簡単に言ってしまうえば超能力のことで、その効果の発動は戦争の間だけに限られる。いわば、統括者から貰った戦うためのチカラ。

なぜそんなものがあるか。

人智を越えるチカラ、超能力がなぜ存在するのか。

それをなぜ統括者という存在だけが与えることが出来るのか。

私が知るはずがない。

明らかに人間であったところの世界での規律と違いがあるのは分かる。が、違いが分かるだけでその理由の如何は80年ぼつちをこっちで過ごしたところで何も変わりはない。

高齢の天使（実に1000を越えた齢の人たち）の一部は知っている人もいるらしいが、そういう人たちは大抵あくなき知識の探求家だったり、変人だったり、何故か人との関わりを避けようとする人だったりすることが多いらしく、人間界に降りてヒトに混じって生活しているらしい。

それも、流浪の旅人のように居場所をコロコロ変えるらしいので、

会うことはまずないだろうと普通は言われている。

それに会ったところでむこうが「自分は天使だ」と明かすはずもない。

向こう――私たちの住む世界では天使は羽も見えるし、こういうとき以外は天使と悪魔以外の存在がいること自体ない。

が、人間界に降りてきてしまうと羽は消え、外観だけ見ればふつうの人間と変わらないうえ、メタモルフォーゼ、いわゆる擬態能力は大体皆持っているので、天使であつたころの容姿とは当然違うだろうし、人間としても何度も姿を変えているのではないだろうか。

そのような理由があつて、人づてに先の話題の根本を説いて貰うことは難しい。かといって、自分で学ぶにはおそらく1000年以上の時を重ねることになるのだろう。気が遠くなりそう。

確かにこのことも気になるが、今はこのだらしない共闘者の世話の方が大事だ。場合によっては私が人間界に出ようかとも思っていたのだけれど、彼に猛烈に反対された。

よく分からないけれど、彼は女性関係のトラブルが多そうだし、本当に懇願されたのでそれを断って強行に出るのはなんだかかわいそうだった。

結局、いつか粘膜による精気搾取をさせてもらうということと同意した。楽しみじゃないといえは嘘になる。彼、美味しいし。

それはともかくとして、今は戦争でエリアVの支配領域を確保することが先決。そのためには彼の養成ももちろんだけれど、そろそろ陣地形成を行う必要もあるはず。

具体的な指示はまたヴァルキュリア様がお出しになられるだろうから、出たら対処するようにすればいい。

学校に着いた瞬間、彼は寝てしまった。

これを好機と見た私は、彼のもとを少しだけ離れることにする。

いったん人間界に降りて。

この学校の中での違和感を直に調べるために。



## 結局。

俺が起きたのは二限目のあとの大きめの休み時間の後半戦。それまでずっと起きなかった。

現在十時半。机に着いたのは確か八時五分くらいだったと思うので、軽く二時間半ほど寝ていたことになる。

が、そこはさすが私立。

たとえ授業中に爆睡していても、成績さえ下がらなければ見咎められることはない。わざわざたたいて起こされることもなく、俺は安寧の時を過ごした・・・と思っていたのだが。

「・・・なにこれ？」

「えっと、さっきの時間で出された課題？」

「課題？つて、なんで疑問形？」

まあ首を傾げる姿も可愛いですけどね。そこ、オヤジって言うな。

「多すぎだろ、これ・・・」

いくらなんでも。

目の前には今まで彼女、高崎さんが持っていたという（スマン）膨大な量のプリント。全て数学で・・・なんだよこれ、微分っておもいつくそ未習範囲入ってんじゃないか。

イジメか？

全部でA4のプリント83枚に解答スペース付きで丁度100問。これを明<sup>しら</sup>明後日までに、だと？

はつきり言おう。ムリだ。

「さっき、つてどっち？ 数A？ 数一？」

なぜか月曜、このクラスは数学が二連続で授業がある。数学嫌いにはたまったもんじゃないだろう。俺は好きだからいいけど・・・

つつてもどうせ聞かないから嫌いだろうが嫌いじゃなからうが変わんなかったらうけどな。

それに、プリントには数学A、B、一、二の全ての分野の問題（幸いなことに三やCはないようだ）が練り込んであり、数学の先生二人はどちらもこんなことを平気でやりそうだ。

俺の予想が正しければ“どっちも”って可能性が一番高――  
「んー、たぶん両方かな」

やっぱりか！

「なんか、あの二人仲がいいでしょ？ 扇先生が竹中先生に千葉クンが昏々と眠ってた、ってことを言ってみたんだよ？ 竹中先生が入って来るなり、おおー千葉は本当によく寝てるみたいだな、高崎これ渡しといってくれ。そこの万年居眠り小僧に」

扇ってというのは数学A、竹中は数学一の教師。

余計なことを・・・。

大体、万年居眠りってそれ死んでんじゃねーか。俺はまだ生きてらい。

そんなところにツツコンでも意味はなく。

俺は目の前に積まれた課題をいつどこでどのように処分するか考えた方が賢明 だと思い、さっそく一問目に取りかかった。

・・・俺が女嫌いになる理由、なんとなく察してくれただろうか。扇先生も竹中先生も女性。おそらく三十路前の。すげえ若いし、美人なんだな、これが。

我が校において人気を二分する先生はこの二人だ。彼女らに目を付けられている俺はなんとなく羨ましがられたり疎まれたりしているらしいのだが、いいことなど一つもない。

構われる、というよりこれはたんにいじられてるだけだ。彼女たちが早く次の標的を見つけてくれないかと天に祈ってみたり。

・・・授業で寝なきゃいいだって？

そいつぁ出来ねえ相談だな。ムリでございます。

だから、他力本願で行くしかない。たとえ授業で寝なかったところで当てられまくるだけだろうし。俺、何かしたか？

「あ、あと、提出間に合わなかったらその次の日の授業から寝てたらチヨーク当てるって」

知ってる。

ちゃんと表紙のところの提出期限の下に書いてあるよ。

“Present for you!” なんてハートマークまで最後につけやがって。

“ついでに私たちの買い物にも付き合って貰います” っと思いきり個人的な用事を公的な理由で押しつけんな。要は提出期限に間に合えばいいわけだろ？意地でも終わらしたる。

三限目は英語。

珍しく起きてることに驚かれ（内職してることはスルーされた）、何回か当てられるもそれを軽くないながら数学に没頭していたのだが、なんか足りない気がしてまわりを見渡してみた。

・・・あ。

エリー、どこ行ったんだろ。

まあいいか。

腹減ったら戻ってくんذار。

アイツの分の昼飯を買うか、弁当をアイツの昼飯にしてしまうか。

ふぁーあ。

ホント眠いな。寝たいのにこの課題。ファック。

嗚呼ろくでもないこの世界。  
たれどすばらしきこの日常。

そんなあの人の怖いところ1

「ぐっ……！」

一人。

「が……っ」

また一人。

「がふっ」

また一人と、倒されていく。

全て、一撃。

必殺。

まさに、圧倒。

実は強い、怒ると本当に手がつけられない、という噂を何度か耳にしたことはあったが、普段のヤツからそんなイメージを思い描くことは不可能だ。

だが。

甘かった。

普段寝ているのはただ眠いだけ。決してやる気がないわけじゃない。

否。

やる気、というよりコイツの元々のポテンシャルは常人のそれを

遙かに上回っている。

才能があるということは俺自身が一番良く知っている。  
が、それを認めたくないという気持ちもあったし、何よりここま  
での才を発揮するとは思ってもみなかったのだ。

怒ったとしても抑えられる。

怒ったとしても大したことはない。

多勢に無勢は叶わない。

そんな甘い考えが、招いた悲劇。

こうしている間にも倒れていく同志。

ヤツは女にも容赦しない。さすがに男子を倒すときのように腹を  
狙いはしないが、首筋に研ぎ澄まされた一撃を振り下ろす。確実に  
仕留めるのに変わりはない。

後ろに跳びすさり、ヤツが放った手刀をすんでのところで避ける。  
まだ動ける仲間に叫ぶ。

「一旦、退くぞ！」

開け放たれたドア。

それまで10メートルもない。

普段は何の感慨も覚えないその距離。家の中を移動するだけでも  
踏破してしまうような短い距離。

それが。

こんなにも遠く――

一步一步を進めるのが遅い。もどかしい。

もっと早く動けと体に命令するも、いつものように動いてくれな  
い。後ろから何かに絡みつかれているかのように。

似ている。

何にだったか。もう記憶に新しくない。

そうだ。

この感覚は、そう。

小さい頃、崖から落ちて、これは助からないなと本能的に感じたときと・・・

「一旦もクソもねえよ・・・お前等はここで終わりだ」

目の前に立ちはだかる敵。

速い。

こちらに精神的な余裕がないということを経験しても速い。コイツ、何かしら大会に出れば地区記録くらいなら残せるんじゃないか？

揺れるネクタイ。

走る体。

ヤツの何も感じさせない瞳と表情がアップで映し出されて。

俺の意識は、刈り取られた。

目の前が、真っ暗になった。

「はーっ・・・はーっ」

マズい。

禁断症状だ。

「眠すぎる・・・！」

寝不足の。

昼休み。

三、四限目をフルに使って、かつ俺の脳味噌を総動員しても、たったの三枚しか終わらなかった。くそう、あと80枚・・・途方に暮れてもいいのだろうか、この場合。

自棄<sup>ヤケ</sup>になってこのままがむしろに課題を進めてしまつか、冷静になって小休止を取るか。

・・・どちらをとっても終わらない気がする。

買い物に付き合うのはどうでもいい。姉たちで慣れているし。荷物持ちだって甘んじて受ける覚悟はある。似合うかどうかを聞かれた際の流し方や褒め方も俺は自分で上手くなったと思っている。

問題は、チヨーク。

寝たらチヨークを当てられるというのはツライ。おちおち寝てられんじゃないか。

多分、この課題を乗り切らないことには俺の安穩な学園生活（寝て過ごすパラダイス）は約束されない。

学年が変わってもあの人たちは色々なモノを駆使して俺の担当を外れないだろう。はあ、なんで俺こんなに女難なんだろう。

「大丈夫？ 千葉くん」

あんまし大丈夫じゃねっすお姉さん。

机の上で頭を抱え、陰気なオーラ全開でぶつぶつと得体の知れないことを呟く俺に優しく声を掛けてくれるのは・・・

「扇先生・・・」

高崎さんじゃありませんでした。残念。

高崎さんは扇先生の後ろにいた。

ま、ちよつと声に年がにじみ出てたからおかしいとは・・・

「ぐえ」

「何か今とても失礼なこと考えなかったかな？ ん？」

「が、がながべでませむ・・・」

首根っこをひっつかまれた。

酷薄に笑う彼女の目は全く笑っておらず、若干つり上がっているようにも見える。



・・・言っちゃ悪いが妖怪みた・・・

「いが!？」

「どうあれがようかいどうえすうつとうえ？」

やたら舌を巻くしゃべり方は、聞いているときは何となく意味を把握できないこともないが、こうやって文章にすると表しにくい。何かタイプミスを連発したみたいになる。

・・・ギブギブ。

これ以上やったら死ぬって、マジで。

「あ、あの、先生。千葉クン、死にそうですよ？」  
グッジョブ高崎さん。

「あ、あらやだ」

ぱ、といきなり手を離すな。

「いて」

イスに落ちて・・・どすん、と音はしなかったが、それくらいの衝撃がモロにオケツにヒットいたしました。尾てい骨が痛い。

それにしても先生、俺の考えてることよく分かったな。

「あなたの考えてることなんてお見通しよ」

・・・

無心だ。無心。

「そんなことしても無駄よん。あなたは私から逃れることなど出来やしないのだから」

「・・・地味に怖いんですけど」

台詞が女郎蜘蛛っぽい。

ステレオタイプ

いやまあ、固定観念にすぎないんだけどさ。

扇先生は心理系統の学問に何故か精通しているらしいので、おそらく人心掌握が並外れて上手いんだろう。そういうことだと思う。ていうか、そういうことにしたい。

先生が超能力者だなんて、おちおち夢も見られない。

「大丈夫よ、私ヒトの夢は覗けないから」

・・・やっぱり超能力なのか？

しかも今覗くって言ったし。そういう自覚はあるらしい。

一方的なテレパシーはデリカシーに欠ける・・・なんか言いづらないなこれ。言い間違えそうだな。

「で、何か用ですか？」

いちいち気にしてても仕方がないので、こちらの考えを読まれることを承知で（読まれないようにすることを諦めたとも言っが）、話を進めることにした。とっとと飯食って課題やんないと。

「たぶん君でも終わんない・・・いやいやなんでもないわよ？」

何か今凄いコトバが聞こえた気がするんすけど。

「気のせいよ。ほら、今眠いんでしょ？」

眠気のことまで把握されている。

「それはそうですけど・・・じゃなくて、何か用ですか？ 用件があるならとっとと済まして欲しいんですけど」

「何よ、ツレないわね」

いや、ツレないも何も。

ツレたことないでしょ。少なくとも俺の記憶にはない。

俺の学校での記憶といたら昼休みか体育の時間か工芸の時間だけだな。あとは八割方寝てる。先生と話してるときはこのように起きているので、記憶にあるはずなのだが、ないということはそういうことだ。

それに。

本人はあまり気づかないのかも知れないが、休み時間、生徒が動き回っている時に教師が教室にどかどかと入ってくることで自体おかしい。そこだけ空気が違ってしまっって異世界のようになる。

休み時間、教師が教室に干渉できるのはドアまでだと俺は勝手に思っている。たぶんみんなもそうなんじゃないかと思うんだが。

実際、今俺の方へかなりの視線が男女問わず投げかけられているし。

それは羨望だったり（主に男子）、疑惑だったり（俺は別にないかもしれないけど）、不審だったり（だから俺はなにもしてないっつ

の)する。

俺は視線にさらされるのが嫌いだ。目立ちたがりというわけでもないし、どちらかというと日陰、孤独の方がラクと感じる方。

誰だ今根暗っていったの。

根暗じゃねえよ・・・多分。オタクっぽいヤツが集まることで有名な天文部に俺がいるのも、星が好きな、だけ・・・。

・・・。

マズい、自分で考えてて俺ってそっち系の人間なんじゃないかと思ってきた！

「大丈夫よ、きっと。そっち系の人間だったらあんなにモテないわよ」

そういう問題か？

ていうか、ちゃっかり心の声は聞かれている。

「すいません、これで三回目なんですけど・・・」

「ああ、何か用か、ってんでしょ？ 別に、用はないわ。あなたの顔がみたくなっただけ」

(空白)

「・・・・・・は？」

生徒に向かって堂々となに言い切ってますかアンタ。

しかもそれ、恋人に対して言う言葉かも知れないけど、高圧的にいうとニュアンスが違ってくるような。

しかもそういうことをデカイ声で言わないで下さいよ。

男子の視線は物理的に痛いし、女子の視線は精神的にイタい。

「あなたが私と裕理で出した課題でどれだけ苦しんでるかなー、って」

あ、そっちか。紛らわしい。違ったニュアンスで良かったわけだ。

要するに、俺の苦しんでる顔を見たかった、と。

・・・サゾが！

俺はマゾじゃねえ！

え、いや、「じゃあサゾなの？」って言われても困るな・・・まだそっちに目覚めてないっていうか。

関係ないけど、裕理、つてのは多分竹中先生の名前だ。扇先生つて下の名前なんて言うんだろ・・・別に興味ないが。

「ご期待通り、苦しんではいますよ」

あ、今度は読まれなかった。

「でも、さすがにクール・ビューティーね。顔に全く出てないわいや、クール・ビューティーって。

男に使うもんじゃないでしょ。しかも俺ビューティーなんだ？男としちゃまだハンサムとかの方が褒め言葉として受け止められる、っていうか。

「冗談よ。でもクールなのは本当でしょ？ 女の子に告白されても顔色一つ変えなかったって話じゃない？」

それは単に姉や妹で女というモノに慣れているからで、ある程度耐性が出来ているからだ。アイツら、恥というモノを知らんのか知らないが、普通に俺に一糸まとわぬ姿を見せつけることもしばしばだ。

まあ、見せつけるようにする時点で恥を知らないというより、それを承知の上のことなんだろう。最初は食器を落とす、イスから落ちる、鼻血を垂らす、などリアクションを取っていたが最近はどう慣れた。

告白なんてしよっちゅう。本気でなくても十分色っぽいから最初は惑わされそうになったが、それも慣れ。

それに、言っちゃ悪いが姉や妹たちはランクが異常に高いので、一般に可愛いと言われるヒトも俺には普通に見えたりする。美人だと逆に俺が引いてしまうしな。

というわけで、俺はよっぽどのことがない限り顔色は変えん。色

恋沙汰に関しては特に。

まあ高崎さんという例外はあるがとりあえずそれは置いておくことにして。

「ま、精々頑張ることね」

「はあ」

なに言ってるんだ。

自分が元凶のくせに。

じゃあねー、と手を振りながら去っていく先生。仕草が若いな・

・まあ実際若いんだが。

「あ、そうだ」

不意に、何かを思い出したように彼女は立ち止まって上半身だけをこちらに向けた。

俺ではなく他の生徒に何か用事があるのかと思ったが、彼女の双眸は明らかに俺を捕らえていた。

そしておもむろに、

「椎香」

などとのたまった。

はい？

しいか？ 詩歌？ 恣意か？

わけわからん。

「シイの木の椎に、香るって書いて椎香、よ」

「え、それ俺に言ってるんですか？」

意味が分からないですね。

「私の名前よ。覚えて置いてね」

・・・・・。

えーと。

やっぱり読まれてたってことか。

・・・。

・・・・・。

・・・・・。

怖  
っ  
！

そんなあの人の怖いところ1（後書き）

続きます。今までは一話ずつ切ってましたが。

## そんなあの人の怖いところ2（前書き）

ランキングに投票して下さい方、本当にありがとうございます。  
これからどうぞよろしくお願いいたします。



そんなあの人の怖いところ2

A diagram consisting of two vertical columns of seven dots each. At the top-left corner, there is a bracket-like symbol (┌). At the top-right corner, there is a bracket-like symbol (┐). At the bottom-left corner, there is a bracket-like symbol (└). At the bottom-right corner, there is a bracket-like symbol (┘).

うむ。

どうしたもののかこの状況。

黙々と箸は進む。だが、口は動いても開かない。

早い話、話題がない。

誘ってきたのは彼女だが、それが精一杯だったらしい。

たまに箸を落としそうになりながら懸命に食事を喉に押し込めている、という感じだ。

他のことを考える余裕などともないように見える。

ましてや、生産性のある話題を探せなどという課題は、今の彼女には酷というものだろう。

さて、どうしたものか。

ふむ、大抵の女子に話しかけるといふことに恥じらいを感じてきたことの無かった俺が今なんでこんなことになっているか、自分で一番不思議に思っている。

「ふむ」なんて偉そうに言ってるじゃねえよ、と知っている方々も大勢いらっしやることだろう。

しかし、  
だ。

一言言わせて貰うとだな。

俺にどうしろや？

ムリだろ。

忘れたのが彼女のみの記憶だったからあまり周りのヤツは気づいてないが、俺、一応記憶喪失ですヨ？

それも、彼女に関することはまるまるすっぱり。スッカラカン。病院の一件で打ち解けた（かもしれない）とはいえ、ステップすっ飛ばしすぎだ。2人つきりでお弁当だなんて。

確かに、彼女に梨を餌付けされましたさ。そういうこともあったとも。

それで二人して赤面して、何か嬉し恥ずかしみたいな空気を味わったのも事実ですよ。ええ、そうですね。だがな。

だからなに？っていう。

そんなことを経験したからといって、少し甘酸っぱい時間を共有したところで、友好の度合いはそんなに急変するものではないのだ。むしろ、なんか、こう、ギクシャクする。

顔を合わせる度にそのことを思い出して二人して赤面。ファーストキスから一夜明けた中学生のカップルじゃあるまいに。自分のことながら。

俺って女性を避けてきただけで実は初心<sup>ウラ</sup>なのか？

・・・なんて思ったりするわけで。

それは別にショックでもなんでもないんだが、何か釈然としない。

人よりも女性、それも美しい、可愛い部類に入る女性と過ごす時間は長いはずなのに、今更「実は経験値ゼロ」だなんて発覚するのは如何なものか、と。

ていうか、そうなる俺にノーリアクションで返された人（かみ砕いていえばフられた人）、可哀想だな。自分のしたことながら、今更に心が痛むぜ。

まあそれはいいとして。

うーむ、と唸る時間（といっても唸るのは心の中でただが）を長くしたところで状況は変わんなさそうだ。唸ることで解決する問題があるのか、ということ自体が問題でもあるが。

とりあえず、この場の気まずさから逃れるという逃避行の意味も含めて状況整理などをしてみようか。

まず、なんでこんなことになったのか、ってどこから回想でも。

扇先生の驚くべき能力（かどうかは知らないが）が発覚し、それに対して恐怖を覚えた俺だった。

そんなものは一過性にすぎず、ころっと忘れた。いずれ対策を練れば済むことだ。幸い、花音ネエがそういう分野に詳しかった気がするので、話を聞いてみるのもいいかも知れない。

とりあえず今は課題だ、課題。残り80ページ。ほぼ2時間使って3ページしか終わらなかった。残りをそのペースでやるとすると・

・  
26、7時間か。不可能じゃないな。

最初見立てていた予定よりもずっと早く終わるということに、俺は少し安心した。

ま、仮定にすぎないからなんともいえないが、最初の10ページは大体計算問題。因数分解やら導関数やら。残りは文章題で、10ページの佳境をすぎれば大分ペースは上がるんじゃないかと思う。

複雑な計算は下手な文章題解くよりも時間かかるからな。

よし、予定通りに今日は寝ることにしよう。

“眠気が勝つてはなんにも出来ない”

これ、俺の座右の銘な。

眠いときに無理をしても意味はない。脳が活動することを拒否しているのだから。

そうと決まったらメシ、メシ・・・っと。

そうだな、今日は風が気持ちよかったし、外で食うか。俺の特等席、普段は閉め切られている屋上ででのランチとしゃれ込むぜベイべ。

屋上の鍵、持ってたかな。

そう思っ、ポケットに手を突っ込んで鍵を探ろうとしたら――

「あ、ああああの、千葉くん！ よかたら、いいいっしょに、おおおお、昼、たたたたたばませんか！？」

すげえ噛んだね今。大丈夫か？

お分かりかとは思うが今声を掛けてきたのは高崎さんだ。

「え、いいけど別に」

特に断る理由もないので。

「ホ、ホントっすか？」

今また噛んだな。

「ホントっす」

ふざけ半分にオウム返ししたのだが、彼女はそんなことは気にも留めてないようで、物凄い嬉しそうな顔をしている。

うーん、やっぱり可愛いな。見てるこっちも嬉しくなりそうな笑い方。好きだぜ高崎さん。とりあえず今はlikeだけど。

Loveに変わるかって？

・・・知らん。

「どこで食う？ お弁当でしょ？」

「あ、はい。私は何処でも」

何処でもいい、と。じゃあ丁度いいな。

「じゃあついてきてくれる？」

今思えば、高崎さんはあまり席を立たない。お弁当を食べる際も、友達のところへ行ったりせず、自分の席で黙々と食べる。

かく言う俺もメシは一人で食べたい人なので（特に移動する気も起きないだけだが）、その意味でいえば今まで俺たちは隣同士で弁当を食らった仲なのだ。

・・・まあ会話もなにも無かったので仲というのには少し語弊があるかも知らんが。

教室じゃいつもと変わらんだろうという建前と、他の奴らの視線が気になるという本音。高崎さんが緊張のお陰で大きな声を出したので、気づいたヤツは絶えず野次馬が発するような視線をこちらに向けていたのだ。

というわけで、レッツ屋上！

ってなわけで今に至るわけだが。

俺たちは屋上に何故がある・・・普段閉め切られているのに、だ・・・ベンチに二人並んで腰掛けている。いわゆる肩が触れそうな距離、ではないが、少なくとも教室で隣同士の距離よか近い。

少し汗をかいた体に吹き抜ける風が心地いい・・・のはいいんだが、空気の気まずさは全く変わらない。

かつ。

しまった。弁当が底をついたか。なるべくゆっくり食べてたつもりなんだが。回想している間に箸がついつい進んでしまったらしい。

なるべく拳動を小さく、弁当を包み直す。

さて、どうしようかな。

一息ついて横を見ると、彼女もこちらを見上げていた。意外と小さいな、高崎さん。空の弁当は抱えてても意味はないと思うぞ。

じー……

「……？」

じー……

「………」

じー……

「えっと、なに？」

見つめ合　とー、素直にー、お喋りー、出来ー　ーいー　っていうメロディが頭の中を旋回する。ええい、やかましい。

「千葉クン……」

「はあ、何でございませよ」

そんなうらやむような目で見られてもね。

「なんで……」

「なんで？」

なんで……なんでしよう。わかりにくいな。

「なんで、そんなに肌が綺麗なの……？　男の子なのに……私よりもツルツル……ずるい」

「いや、ずるいって言われてもね」

何を言い出すかと思ったら。

まあでも確かに化粧品のCMがやたら多いように、女性はそういうことをかなり気にするんだろう。

こう言っちゃなんだが、俺の肌は……多分彼女が言ってるのは顔のことだろうが、確かに綺麗らしい。入院した際、先生に褒められたし。

強いて言うなら姉妹全員が女だからかな。きょうだいスキンケアグッズとやらが洗面所を埋め尽くすように並んでいるのは男の俺にとっては結構圧巻だ。

特に使っても怒られないので、遠慮なく使わせて貰っている。理由を挙げるとすればそれくらいか。

「ていうか・・・」

そう言いながら彼女の頬に手を伸ばす。

「高崎さんも十分スベスベしてるじゃん」

手のひらを頬にあてがって、親指で軽くなぞってみる。

冷たい感じの地肌が指に心地いい。

ニキビ一つ無い肌は例えるなら・・・なんだろうな。柔らかさは固めの餅、なめらかさは肌独特のきめ細かい感じの、としか言いようがない。

すなわち、彼女も十分美肌だ。男の肌に対して美肌という呼称が当てはめられるのかは疑問であるところだけでも。

俺が彼女の言うとおりツルツルなら、彼女はスベスベだな。俺はスベスベの方が好きだから、どっちかっていうと彼女のほうが羨ましかったりするのだが。

しばらく彼女はくすぐったそうに目を細めていたが、突然、  
「っ！」

と息を呑むと共に、ボンツ、という擬音がしっくりくるような早さで赤くなった。冷たかった地肌は一気に温かくなりました。

相変わらずリアクションが可愛いな。癖になりそう。

空気にはなれていなくとも、女性に触れるのにあまり抵抗を覚えないのに変わりはなかった。

・・・なんかスケベみたいだな。

（なにやってんのアンタ・・・痴漢？）

「どうわっ!？」

びっくりした。

マンガじゃないが、本当に喉から心臓が飛び出るかと思った。

（・・・なんだ、エリーか）

俺がいきなり大きな声を出してびっくりしている理由が分からず、

目をぱくりさせてこちらを見る高崎さんの後ろに、そいつはいつの間にか立っていた。いつの間にもいたんだお前。

（なんだとはなによ。失礼ね）

（失礼なのはどっちだ。人を痴漢呼ばわりするな）

（だってアンタその子と付き合ってるわけじゃないんでしょ）

（まあ、そうだけでも）

（だったら痴漢じゃない？ あ、ナンパともいうか）

その二つのワードは意味もニュアンスも全く違うけどな。

（お前、どこ行ってたんだよ）

（ちょっと、ね）

何か齒切れが悪いな。彼女は顔をさりげなく反らした。

（戦争関連？）

（まあ、それはそうね。ちょっと、気になることがあったから）

（気になること？）

（ええ。まあ、家に帰ってからでも話すわ。それより・・・）

（それより？）

彼女は、顔を反らした方向にさらに顎をしゃくった。

（あれ、アンタの友達？　なんか、10人くらいこっち見てるんだけど）

は・・・？

屋上にある二つの出入り口のうち、俺たちが使わなかった方、もう一つの出口のほうに目をやる。

それはちょうどベンチの背中側で。

俺たちからはちょうど死角になっていてまったく気がつかなかった。まあそれをいいことにあいつらはあんなところにいたんだろが。

開け放たれたドアより少しこちらよりにフェンスがあつて、そこに隠れるようにしてそいつらはいた。

・・・大体が見舞いにきたメンバーだな。

たぶん、高崎さんが大声を出したのを聞いて、俺が高崎さんを連



れ出すのを見て、アイツらがここまで来たんだろう。俺が昼休みにここを訪れるのを知っている人間はごく少数で、あのメンバーの中では鵜方しか知らなかったはず。

・・・鵜方め。

「どうしたの、千葉クン？」

少し顔は赤いままだが、彼女は俺の顔が少し歪んでいるのに気がついたんだろう。恐怖からか、単純な疑問からかは知らないが、彼女は俺にそう言った。

「うん？ ああいや、おバカな連中にはお灸を据えてやらないか、と思って」

「？」

彼女は不思議そうに首を傾げた。どうやらアイツらが見えていないようだ。

それは至って好都合。

どちらにせよ、あんなシーン（彼女の頬に手をあてがっている場面）を見られたのだ。よりにもよって、あのままキスに移行するんじゃないか、というような迷場面（誤字にあらず）。

出歯亀に対する制裁＋口止めってところか。

俺が実は穏便じゃねえってところをそろそろ何人かに刷り込んでおいた方がいいだろう。下手につけあがらせると手が回せなくなるしな。

「高崎さん、そろそろ帰る？ なんやかんやであと5分で授業だし」

「あ、うん」

ぱぱっ、と手慣れた感じの手つきで弁当を包み直し、それを手に持って彼女は立ち上がった。弁当は、たぶん彼女が自分で作っているんだろう。

「あの・・・」

「うん？」

座った状態のままの俺に、彼女はうつむき加減で言った。

「明日から、私も、ここで食べても、いい、かな？」

ここ、風が気持ちいいし・・・とほとんど消え入るような声で。

それは、まあ。

俺にとっても都合のいい話で。

「ああ、もちろん」

多分、このときは笑顔で返せた。

「じゃ、じゃあ、先、教室戻ってるね」

ぱたぱたと駆けていく彼女。

（アンタ、あの子にほの字？）

（言い方が古いな・・・）

さすが80才。年季が違うな。

（で、アンタは戻らなくてもいいわけ？）

（ん）

後ろの方を指でさした。アイツら、暇にもほどがあるな。部活の  
昼練とかないのか？

（ああ、なる）

（そういうわけなんで。メシ、食ったか？）

（あ。まだ）

今気づいた、という感じで腹を撫でながら呟く彼女。

（うー、言われたら急におなか減ってきたあ）

（あとで買ってきてやるから、ちよいと待っててな）

唇をつきだしてこちらに飛びついてくる彼女をひらりとかわして、  
後ろを向く。

鵜方と目があった。無論、向こうには見えていないだろうが。

大方、俺が後ろを向いたのもただの偶然としか考えていないだろう。  
う。まあ、普通はそれ以外に考えられないのだが。

さあ、はじめようかね。

音なき闘い。

一方的な、圧倒的な差というものを。

アイツらの目に、脳髓に、底の底まで、染み渡らせる。  
感銘、刻印。

・・・つってもまあ、ただのガキの喧嘩だけだな？  
カッコつけてみただけだ。

「・・・ええん！」

ぱあん、という何かが割れたような音。

竹刀特有の、鞭を打ったときの音とよく似た音。

この音を気持ちいいと思えるようになったのはいつだったか。いつからだったか。

私の家は、代々続く名家だったらしい。それも、政治関連ではなく軍事関連。お代官様ではなく、將軍様。それも結構高位の。

高崎何某なんて武将、聞いたこともないが、武家屋敷のような一戸建ての家や、敷地内にある剣道場のほか、宮城さんの家とほぼ共有状態にあるさまざまな施設を見ると、そうだったのかも、と思わなくもない。

少なくとも、一般の家庭ではないことは確かだし、金持ちの道楽にしたって、建てるにすればもっと別のモノを建てるだろう、と思う。私がお金を持っていたても、こんなモノはまず建てないだろうから。

私の家は、親戚、血縁ぐるみで近所の人たちに武術を教える教室

のようなものを開いている。

学校で弓道部の主将をつとめる宮城さんは、一応私の遠い親戚ということになるらしいが、詳しいことは知らない。少なくとも、関係としては再従兄弟はこよりも離れているみたいだけれど、そんなこと私たちは気にしていない。本人たちの仲が良ければ、それでいいと私たちは思っている。

普通、私たちの家の子供は最初の武術を剣道、柔道の2つから選ぶ。弓道は小学生には純粋な力の問題があり、難しいので、アーチエリーから入る。早い人は中学生で弓道に移るが、高校から、というのが一般的なようだ。

私は、迷わず剣を選んだ。

何故かはよく覚えていない。ほぼ生身の人を投げる、押さえつけるということに抵抗があつたのかも知れないし、体つきをあまりたくましくしたくない、と子供ながらに思ったのかも知れない。立派に成長していく柔道を選択した女の子（この子も親戚）を見て、今では本当に良かったと思っているけれど。失礼ながら。

「一本、だな。お疲れ、茅佳ちか」

そう言つて近づいてくるのは兄の聡そう。高崎家長男。いずれ、この剣道場の師範になる人だ。

インターハイの覇者でもある彼は、推薦で入学した大学に行くことは行っているが、通っているだけで、勉強などほとんどしていないんじゃないかと思う。

まあ、剣道がバケモノじみて強いからそれだけで食べていけるだろう。大学に通っているのもただの見栄だと本人は言っていた。高卒は格好悪い、と。

今、私は兄の審判のもと、大人の人たちに稽古をつけている。年上の人に稽古をつける、だなんて生意気も甚だしいところだと最初

は思っていたのだが。

「お前は強いからいいんだ。年功序列はもう古いだろ？　これから  
は実力至上、だ」

なんていう兄の台詞に、私の彼らに対する申し訳なさや罪悪感と  
いった感情は一蹴されてしまった。

実際、自分でいうのもおこがましいところではあるが、剣道の腕  
には多少の自信がある。

段などは持っていないが、兄曰く

「まー、お前なら3、4段くらいぱつと取れると思うぜ？」  
とのことだ。

私が段を持たないのはただ資格のようなものに興味がないだけで、  
自分が自分の強さに確固たる自信を持っていればいいと思っている  
から。

「でも、一応取れるモンは取つとした方がいいんじゃない？　ほ  
ら、受験とか就職のとき特筆事項にかけろじゃん。就職で有利に・  
・なるかどうかはしらねーけど」  
という兄。

だけど、もう受験は大学受験のあと一回しかないし。一発で受か  
つたら、だけれども。

段、か。

そつえば千葉くんは段所有者だっていったような。

高校に入ってすぐに3段をとったとか何とか。

聞けば、弓道で有段者になるのは、初段と二段に限り、難しくは  
ないらしい。というよりも、高校生は二段が普通なのとか。

良く中る人<sup>あた</sup>が三段、四段をとっていくのだそうだ。景さんも高一  
の冬辺りに三段に昇段していた気がする。

・・・なんだろう。

なんか悔しくなってきた。

周りの人はみんな段持ちで、私だけ段無し。何か、私だけ弱いみ  
たいじゃないか。

お父さんは別にどっちでもいいといっているけれど。  
こういうのは自分の心の持ちようだ、なんて自分でも思っていたけれど。

「茅佳、お疲れ。あとは俺がやるから今日は上がっていいぞ」

よし、決めた。

段、取ろう。

そういつて防具を脱ぐ彼女。

汗を、一つもかいていなかった。

「なんでなんだろうな」。不思議」

妹より強くても汗だくな兄の言葉。

「少し怖いよな。あそこまで極端だと」

高崎茅佳。

剣道着を着ても、汗をかかない少女。

・・・いろんな意味で、怖い。

## そんなあの人の怖いところ2（後書き）

十月二十五日午後12：45づけで11位です（現代FTシリーズ部門）。

投票して下さった方、改めてありがとうございます。

真実は残酷・ファクト・イズ・クルーエル - (前書き)

後半部分が読みにくいかもしれません。  
少し真相に近づきます。



眞実は残酷・ファクト・イズ・クルーエル・

この世界は、理不尽だ。

人間やれば何でも出来る？ そんなはずはない。  
どんなに頑張ったところで、人間に可能なことは物理法則や体の構造といった現実的な領域を出ないのだ。

否、出られないというべきか。

この世界に生まれる。

すなわちそれは、幻想をお預けに、追いつくはずもない、届くはずもない理想を追いかけるだけの人生。

なんて、不毛。

なんて、無駄。

私は、自分で手に入れられるものは全て手に入れた。

この世の中、多少の才と最大限の努力、ある程度の金と容姿が整っていれば大抵のことをするには事足りる。

事足りないのは、この世界にいる限り、人間である限りは出来ないこと。

たとえば、自力で空を飛ぶこと。

たとえば、水の中で暮らすこと。

たとえば、地球を見下ろすこと。

たとえば、100キロで駆け抜ける風と力を感じること。

たとえば、まだ見ぬ深海を垣間見ること。

それはたとえば、人間を辞めてしまえば簡単に出来ることで。

それでも世界は、生きる種の選択を自由にさせてなぐれなくて。

詰まるところ、私は人間であることに飽いていた。

飽きるというのはどんな動物にもあるのだろう。

ただ、三歩歩いて忘れてしまうのは動物だけ。

飽きていた、その事実を忘れてしまうから、彼らは悩まない。

人間も、忘れる。だけど、それはつまらないことだけで、つまらなかつたことは忘れないのだ。

つまらなかつたことは忘れない。つまりは、それに関しては一生飽いたまま。

神は、どうして人間だけを。

どうして特別扱いするかのよう知恵をつけさせたのか。

一部のモノだけを長くすれば、太くすれば、強くすれば、賢くし

てしまったら。

世界のバランスが崩れることなど容易に想像できただろうに。

この世界は理不尽だ。

私たちに中途半端な権限だけしか与えず、さらに力は全く与えない。

私たちに、悩むことを強要している。

知恵は、人間の武器。同時に、最大の弱点。

知恵があるから、余計なことを考える。余計なモノにまで手を回す。

知恵という名の諸刃の剣を与え。

せめぎ合う欲望と葛藤させる。

精神があるが故の自制心。故の悩みと苦しみ。板挟み。

この世界は理不尽だ。

それに気づかせること自体、理不尽であるというのに。

「うおお・・・」

思わず感嘆のため息が漏れた。

感動した。いや、違うか。感銘を覚えた？ これも違うな。

なんていうか、心に色々とか何かが突き刺さってそこから色々溢れた感じが。何かもにやっとしたものが体を満たしていく。

自分で言ってるのに言ってるのか全く分からないのだが、こうとしか言いようがないんだからしょうがない。

まるで、別世界だった。

実際、別世界に分類されるんだろうが。

現代の日本のようなせこましさというか、ゴミゴミした感じとはかけ離れ、土地全体が元からそうあるようにデザインされた感がある。

古めかしい感じは全くしないのだが、古き良き時代に戻ったような感覚を覚えるのは俺だけだろうか。

マンション？ 何それ？ とでもいったげに平屋がずっと並ぶ。

高層なものは全くなく、晴れ渡る空が全開だった。

建物は全て木造。少しだけ森の香りがする。

木造、といっても色々施されているから、木肌が出ていることはないが。

やばい、すっげー清々しい。

人の気分って景観次第で大分変わる。そんなことを実感したうえで納得。思わず笑みがこぼれた。

「ここ、凄い綺麗だな。誰かが設計したりしたのか？」

俺は隣のエリーに聞いたつもりだったんだが。

「気に入っていただけたようで何よりです」

答えた声は、後ろからで、またエリーの物とは別物だった。

声に振り返ると、俺の後ろにいたヴァルキュリアが少し頬をゆるめていた。

ちなみに、彼女が言ったとおりもうここは白黒の世界ではなくなっていた。ちゃんと色彩が施されている世界が見えるわけで。

やっぱり、白黒とカラーじゃ、美しさがだんちだ。

やはり西洋の人だったらしい。透き通るような銀髪、クリクリした碧眼。白黒だった世界では気づかなかったが、細身の割には出ている。

どこが、って？

BとHに決まってるだろうが。

彼女は、凄い。

絶世といってもいいほど美人。傾国とも言えるか。

「お褒めに与り、光栄です。そこまで褒めて下さった方はあなたが初めてですね」

うわーお。

ここにもいたぜテレパシー。

ん。

・・・ってことは。

今の俺の破廉恥に近い（っていうかそのもの）言葉も聞かれてしまったという。

・・・。。。

穴があつたら入りたいdeath<sup>デス</sup>。

今俺がいるのは、S L - - - セプレート・ラインと呼ばれる場所。天使と悪魔の居住区で、この一帯にエリアAやらVやらが存在するらしい。

基本的にエリア間の移動は出来ないらしく、一定の広さでエリア区分が定められているそう。一つのエリアで大体北アメリカ大陸くらいの広さがあるとかないとか。

そんな広い区画を23個も、どこに落ち着けるんだ、世界は思っているよりも狭いんだぞ、なんて野暮なツツコミは毎度の如くしないで欲しい。

俺が一番ツツコみたいんだよ！

だけどさ！

「んー、言ってもいいけど多分アンタじゃ理解できないよ？ 大学なんかで物理学を専攻してたりしたら分かるんじゃないかな。少なくとも、高校生には理解できないわよ」

「私も、失礼ながら・・・そう思います」

なんてさ！

俺のことなど歯牙にもかけないとでも言いたげにズケズケと歯に物着せぬ言い方で言うエリアと、それでも申し訳なさに少し目を反らしながらヴァルキュリアにまでそんなこと言われたら、ツツコむ気も失せるってもんさ！

・・・まあ一時的に爆発してしまったが。

簡単に言ってしまうえば、ここはいわゆる天国ってやつなんだと思う。

さつきからチラホラ羽を持った人間っぽいのが低空飛行しているし。

何となくではあるけれど、空が近い気がする。本当に何となくだが、そんな感じがする。月でも出てくれりゃ分かるんだけどな。何か知らないけど太陽出てないし。明るいんだけどさ。

「なあ、黒い羽のヤツと白い羽のヤツって何が違うんだ？」

けど、俺がもつと気になったのは、行き交うヤツの羽の色が人それぞれってことだ。

黒の方がいくらか多い気がする。整数比7:3ってとこか。

「ええ、ここは私が設計し、私の指示のもと皆さんに協力して貰って作った場所です。ここにはあなたのような日本人を呼ぶことが多いので、それを意識して作ってみました」

・・・ん？

なんか、質問と答えが全くかみ合っていないぞ？

もしかして、上の質問に答えてんのか？ 大分前ですね。タイムラグ激しすぎ。

「あ、いや、そうじゃなくて俺が聞いているのは・・・」

「まあ、生前日本に興味があった人でここを見て喜ぶ人もいるけどね」。外国人の持つ日本のイメージにぴったりなもの」

「ああ、それはそうだろうな。で、俺が聞き・・・」

「日本の方も自分の住んでいたところとはいえ、狭いと感じているようですからねえ」

「そうだな、俺も都心の狭さには驚いたよ。で、あの羽の色が違うのは・・・」

「ホントよね。狭すぎるわ、東京。なんでアンタ都に住んでるわけでもないのに東京の病院に入院してたのよ」

「学校が限りなく東京に近いんだよ。それに、あの近辺にあんまりデカい病院がない、つてのも理由の一つ。それよりも、あの羽――

――

「だめね。引越しなさいよそんなところ」

「そうですねえ。近くに大きな病院がないっていうのは困りますよね。せめて車で10分くらいのところにはあつて欲しいところですね」

「家の近くにはあるよ。歩いて7分のところにな。それよ――」

「ていうか、アンタの家、大きいわよね。お父さん何やってる人？」

「電子工学系の技術士だよ。あのさ、お前らこれもしかしてわざと――」

「へえ、そうなんですか。外国語が出来るお父さんという話でしたが、海外を飛び回っている、ということですか？」

「はあ、そうですね……」

人の話を聞けよ。

よっぽど聞かれない話らしい。

そういや、前もエリーに天使のこと聞いたら話を濁したな。

……なんかあるのか？

ああーもう、余計気になるじゃんか。

「それで、ヴァルキュリア様、陣形のことなのですが……」

「様はつけなくてもよいと何度もいつているでしょう。……それに関しては……」

何かまた別の話してるし。

やだなあもう。

女って身勝手だ。ホント。



「ふふっ・・・」

「何を笑っている？」

「いーえ。なんでもないわ」

「そういう言い方は余計に気になるとずっと前から言っているだろう」

「じゃあ答えなければいいのかしら？」

「そういうことを言っているのではなくてだな、私が言いたいのは・・・」

「しゃべりが過ぎるぞ。マクロ、ミュート」

「はい」

「・・・申し訳ございません」

「とつととこつちに来い。・・・たく、エリアSやらVやら、今回は穩健派にやたらいいのが集まったな。どう見る？」

「どうもこうも、ただの偶然にしか私には見えませんが？」

「まあ、お前の言うとおり偶然もあるだろうが・・・」

「やだ、ミュート。忘れたの？ 私たちみたいなエリアの眷属の近くで命を落とすと、そのエリアに招かれやすくなる、って」

「ああ、それくらいは覚えているさ。魂が我々の発する波長のようなものに感化されてそうなる、と。しかし、それは関係ないのではないか？」

「どうして？」

「どうして、って。」

相手は穩健派筆頭、エリアSとエリアV。筆頭を務めるだけに有用な力を備えているし、統括者、闘いに於いて指揮を取る人物も有能だと聞く。

我々のように過激を名乗るのならまだしも、穩健を語るのであれば、今お前が考えているようなことをするようには思えない」

「甘いわねー。ミュート」

「何がだ」

「ねー、モロク様もそう思うよねー」

「ああ、まあな」

「・・・何故です？」

「そんなに眉をひそめるな。別にお前をバカにしてるわけじゃあない。・・・ホントだぞ？ 疑わしい目で見るな。怖いから」

「では、甘いとは如何な理由で？」

「ふむ・・・天使も、悪魔も、我々のような死神や神も元々は人間だという話はしたよな？」

「はい。確か、死んで魂だけになって霊子としてバラバラにならず、魂としての形を保っていた場合のみ、ここに招かれる、と」

「そうだ。お前はたまたまこの戦いの準備期間のうちに死んだ。その場合はな、魂としての形を保っているかどうかは関係ない」

「それも聞きました。霊子としてバラバラになる前に無理矢理にという形にはなるが任意にエリアに召喚できる、と」

「そう。でだ。」

「ちょっと話がずれたが、俺も元々は人間だ。本名を明かすつもりはないがな。死神なんて大層な呼ばれ方してるが、何のこたねえ、悪魔の成り上がりだ。」

「神の奴らも、当然そう。まあ例外は何人かいるみたいだが、大体がもとは人間だ。たしか、エリアSの・・・なんだったっけアイツ。セバステアヌスだったか。セバスチャンっていうと怒るんだよね。何かの映画に出てくるヤドカリの執事を彷彿させる、ってワケ分かんねえコト言つてさ」

「・・・それはなんとなく分かる気がするね」

「・・・まあ、な」

「何だお前ら、分かるのか。」

「・・・まあそれはいいとして、だ。俺らももとは人間だ。確かに俺らの死活問題でもあるとは言え、かつて同志だったヤツをこっちの個人的な理由で殺すようなアレはねえ。」

大体、魂見るまでそいつがどんなエイブラに当てはまつか分かんねえしな。そんなことしてたら一國滅ばさねえと希望のエイブラに当てはまるヤツなんか出てきやしねえ。要は運なんだよな、エイブラに関しては。

エイブラは最弱でも、そこを頭使って何とかすんのが統括者の役目だ。もとは人間だったヤツはそこら辺を分かっている。

・・・が、だ。

それを全く理解してない奴らがいます。誰でしょうか？」

「・・・天使からの神、ですか？」

「人間から天使になった奴もいるんだぞ？ていうか、神は天使からしか成れねっつの。神は天使の昇華したカタチだからな」

「そうですね・・・」

「マクロ、分かるか？」

「んー・・・」

「純粋な天使、じゃないっすかね？」

「当たり前」

「純粋な天使・・・？」

「まあ、世の中にはそういうヤツもいるってこった。

で、こいつらが厄介なのは人間を何とも思っていないこと、よくて下僕ぐらいだろうな。

そして、特定のエイブラに当てはまる人間を見抜くことが出来るらしい、ってこと」

「らしい？」

「詳しくは分かってねえ、ってことだよ。自分の能力をわざわざ口に出すヤツなんているか？」

「まあ、確かにそうだよな」

「・・・なるほど、分かりました」

「お、分かったか。さすが聡明なミュート君」

「からかわないで下さい。」

・・・しかし、そうだとするならあちらの方がどちらかといえば過激派なのでは？」

「まあな！。」

まあでも向こうは標的が分かってるからピンポイントに人を殺す。こっちはそんなもん分かりやしないから手当たり次第に数を殺るしかない。

どっちに殺意がこもってるかって言うとも明らかに向こうだが、数殺してるのはこっちだからかな。どちらにも非はある。どっちにも相手を責める理由あるんだ。

難しいとこだよな！。

向こうにしてみりゃ、人間の平和を掲げてるわけだからさ。戦争なんてのは以ての他なわけ。それでも、平和な中での健全な国民を自らの目的のために平和という大義名分を以てして殺しちまうわけだ。

平和、ってヤツをはき違えてやがる。

さながら、俺らは発展途上国、奴らは先進国ってとこだな。自らの利益と保守に一生懸命になりすぎだ、アイツらは」

「まあしょうがないじゃないですかね、そこは。こんなとこに来たって人間は争うだけ、ってことでしょ」

「それも悲しいところではあるが。まあ、私は生き返れば何でもいい。勝てば生き返られる、そういう話だったな、モロク殿」

「ああ。勝った見返りとして俺が出来る範囲のことはしてやる、っていうのが本当なだけだな。大体みんな生き返りたがるからな」

「そうか。私もその大多数のウチの一人だ。安心しろ」

「ははっ、何に安心しろと？」

「ねーねー、これ、何の写真？」

「ん？ ああ、新しく入った敵のエイブラ。と、本人の写真」

「へー。あ、エリアVって日本がテリトリーだっけ」

「ああ、そうだ。エリアSはどこだったか・・・ロシアの方だったか」

「へー、みんなカッコいいー、きれー」

「お前はそういう感想しか漏らせないのか。まあ、たしかにそのスラッシュの女は上玉だと思うが」

「このシヨックって人も中々の好青年だねー。笑顔が素敵。ねー、ミュートはどんなのが好み・・・ってあれ？」

「・・・興味ない。とっとと終わらせろ」

「あやや〜」

「まあ、確かにそういうのは苦手そうだな、お前」

「・・・余計なお世話です！」

「およ？」

「どうした？」

「・・・いや、ちょっと知り合いがいたもんで」

「へえ、数奇な運命なこと。どいつ？」

「これです」

「知り合いをこれ呼ばわりするなよ・・・エリアV。ヴェイキャンシーか。ああ、コイツ、能力は強いぞ。気をつけとけよ。まあ、本人が強いかは知らんが。」

「・・・ていうか、やたら男前だな。ム力つく」

「ははーそうですね。変わんないや。目の感じとか。背E高くなっただなー、オイ」

「なんだ、幼なじみか？」

「そんなんじゃないですよ」

「そつなのか、やたら親しげだが？」

「勿論ですよ。当たり前じゃないですか」

「じゃあなんだ、許嫁かなんか？」

「いえいえ。そんなんでもありません……愛しい愛しい、我が弟。  
愚弟でございますよ」

## 曇惑と妥協

「ね、トシ・・・」

見つめ合う二人。女は男の名を呼び、妖艶な笑みを口の端に浮かべたまま、期待を込めた視線を送っていた目を閉じた。  
艶っぽい唇が男の目の前にある。

「う、うぬ・・・うぬぬぬぬ・・・」

一方、男は何かに苛まれるように唸るのみ。

その額にはイヤな感じの汗がダクダクと。サウナにでも入っているような大粒の汗を流していた。冷や汗と脂汗が混じっているだけなのだが。

「き・て」

待ちきれない、といった感じで女は閉じていた目を開いて。

そのとどめともいえる弾頭を男に投下。

目は潤み、手は男の首にまわされる。

段々とその距離は近づいていって・・・

「や・・・」

脇で見守るようにしていたもう一人の女がこれ以上は耐えられない、と近づいていく二人を止めようと口を開いた。

が、尻すぼみになっていく彼女の言葉に、二人は気づかない。

その距離、あと10センチほど。

互いの吐息がふれあう距離になって、ついに・・・

硬直。

「うがああああああ！ やっぱ無理！ ぜつつたいムリ！」  
男が汗を散らし、悲痛そうに叫んだ――

「ぜはーっ、ぜはーっ」

しゅこー、ってな感じで酸素スプレーが欲しい今日この頃です。  
千葉利明です。

今苦しげに胸元を押さえております。

「もー、意気地なしなとこは全く変わってないのね」

すいませんね。こちらら青春真っ盛りの15才なもんで。  
こら、誰だ今ヘタレって言ったの。

「ほっ・・・」

有紀ネエは有紀ネエで何か知らんが安心したように息をついているし。

まあ、妹弟のキスなんて見てられたもんじゃなかるう。気持ちはずからんでもない。

「昔はお姉ちゃん、お姉ちゃんって可愛かったのに・・・」

「あ、私もそれは思った。最近ちよつとツレないわよね」

二人して何を。

ていうか、有紀ネエにもツレないって言われちゃったよ。本当にそうなのか？ ノリが悪い、ってヤツかも。

「反抗期かしら」

そうだとしたらそれは遅すぎるな。

何かそれをウリにした芸人、居たような・・・最近見ないな。まあどうでもいい。



しかも今ハモったし。さすが双子だ。雰囲気は似てないけど。

「んーじゃ、交渉は決裂、ってことで・・・」

「ちよつとまってそれはカンベンして」

即座に反応した。

もうむしろ、脊髄反射の域。

「今おねーさまに見捨てられてしまうと俺はもしかすると休日を家族のために返上できなくなるんですけど」

「・・・それはマズいわね、花音」

「確かにまあそうだけれどもね。ていうか、なんで？ 補習でも食らった？ 千葉家長男のクセに」

え、それなんか関係あんの？

「何よその釈然としない顔」

「・・・別に」

よかった、ウチの家族にはテレパシーはいないらしい。

「そういうわけじゃないんだけどさ」

「じゃあ何、この課題？ アンタ成績良いって言っても寝てばっかだからただ単に先生に目つけられただけじゃないの？」

「うーん・・・花音ネエ黙ってりや可愛いのに、言葉遣いが男勝りで俺の心は今ちよつと荒んでるんですけど」

「・・・」

おい、なんでそこで顔赤らめて俯くんじゃ。

「じゃ、じゃあ可愛く言えば、可愛いって言ってくれる？」

弟になに言わせようとしてんだ。しかも四歳も年下の。

それでも一応考えてみる。姉思いの弟だと誉めて欲しい。

「・・・」

可愛い口調の花音ネエ、か・・・。

あれ？

全く想像が出来ないんですけど。

「・・・・・・・・」

有紀ネエと目があつた。

有紀ネエも同じことを考えていたらしい。お互いに苦笑い。

「ちよつと有紀、今失礼なこと考えてたでしょ。トシも」

「そんなことない（わ）よ」

またハモりました。今度は俺と有紀ネエだけど。

あれから。

結局、なんだかんだで（エリアVに遊びに行ったりして）課題の提出まで一日となつてしまつていた。あと三十枚。明日までに終わらせるなんて絶対にムリだね。うん。

自分が悪いんじゃないか、って？

HAHAHA・・・なに言いやがりますか。

そもそもこんな無茶な課題だったのが悪い・・・ってそれも俺が寝てたからだっけか。

・・・・・・・・。

いやいや、そもそもいつもは寝ててもこんな課題出されることないのに、なぜ今回だけ出されるんだ。そうだとするとこれは先生の陰謀だそうに違いないそうに決まつてる・・・はあ。

いいわけって、ちよつと悲しいね（今更）。

しかし、この後の安穩な生活のためにも、課題は終わらせるのが吉。ていうか、終わらせないと死。学校で寝れなくなったら俺はどこで寝ると？

というわけで、急遽応援を要請した。

模試に於いてほぼ伝説となつた、千葉連名を打ち立てた二人の双

子に。

ちなみに、千葉連名とは。

ある模試に於いて全ての科目、全ての順位に於いて一位と二位を千葉という名前で埋めたこと。二位と三位の差は20点ほどで、模試史上、まれにみる現象だとか何とか。

勝ったのは勿論有紀ネエだったが、花音ネエはその一週間前までインターハイに出場していたのだ。普段からも一応学習は欠かさなかったとはいえ、一週間であのレベルまで持つて行く姉を俺は人間業とはとても思えなかった。スーパーマンさながらだ。

で。  
その失礼ながらも人間とは思えない頭脳の力をお借りするべく協力を要請したら、

「熱くとりけるようなキス」

が交換条件だとか言い出した（もちろん花音のほう）。  
それで冒頭に至る、ってわけだ。

結局条件（という名の公開処刑）は施行されなかったが・・・  
ヘタレとか言うな。しつこいぞ。

「まあ、可愛い弟の為だし」と花音ネエ。

「見せてみなさい」と有紀ネエ。

嗚呼すばらしき姉弟愛。

素で泣きそうになりました。

「「そのかわり」」

「そのかわり？」

「「今週末、買い物に付き合いなさい」」

「「うい・・・」」

結局、買い物に連れてかれるのには、変わらないんだなあ、と。  
まあ姉貴たちの方が幾分かマシだ。慣れているというのもあるし、  
そこまで年が離れてないので。

「・・・いいけどさ。何買うの？」

下着とかはカンベンして欲しい。

妹たちと・・・っと、やっぱやめよう。これはあんまり話すべき  
でもないし回想すると俺が自己嫌悪に陥りそうだからやめておく。  
各人、ご想像にお任せいたします。

「行った先での気分で」

「決めるわ」

ふうん。

まあ、そういう店にふざけ半分にも入ろうとしたら、全力でB  
ダッシュ（逃走）することにしよう。

姉たちの協力が得られたので、俺は一旦課題を取りに部屋に戻っ  
た。

「ねえアレル」

「なあにサレル」

「お母様が」

「お母様が？」

「早く決めなさい、って」

「何を？ 私たちの将来？」

「冗談じゃなくてさ。分かってるでしょ？」

「うん、まあ」

「うんまあ、って・・・何やってんの？」

先ほどから素っ気ない返事しか返さない片割れに、少年・・・ま

だ幼く、女の子と間違われてしまいかもしれない容姿をしている・  
・は、振り返った。

二人は背中を合わせるようにして座っていて、互いの声は聞こえていたものの、何をしているかまでは把握できていなかった。

「・・・ねえアレル」

「何よサレル」

「女の子なんだからさ、一応」

いいながら、サレル・・・少年の方は、ため息をついた。  
なぜなら・・・

「いいじゃない、痒いんだから」

とか言いながら、小指を耳に突っ込んで、耳の穴をほじっているのだから。

「まあ僕しかここにいないからいいんだけどさ」

それでも、なあ・・・と思ってしまふ少年、サレルだった。

せっかく可愛い容姿が台無しだ、とも思う。

彼女は、自分の分身のようなもの。生まれた順番が違うだけで、誕生日は・・・正確に把握しているわけではないが、違うのではないかと思う。

彼らは、気づいた頃からここにいる。

知覚を記憶として認知できるようになってから、とも言える。

物心つくまえから居たのかもしれないし、物心ついた後の記憶がないだけなのかもしれない。どちらかは分からない。分かるはずもない。

ここは、閉ざされている。

どこにも繋がっていないし、空間に限りはない。行けども行けども同じ世界が広がっているだけ。

とは言っても、子供の体力。疲れ果てるまで歩き通したところで

精々、5キロというところなのだが。

最低でもそれだけ、しかも自分たちがいた場所を中心に広がっているらしい、というのは子供ながらに知っていた。

分かっていた、ではなく。

知って、いた。

何故か。

その理由。

声、だった。

たまに聞こえてくる。頭の中で響くように。

それは耳元でささやかれているようで、大変くすぐったくもあったのだが、何もない世界での少年たちの安らぎでもあった。

声は、自分を母親だと言った。

母親とは何か、と少年は問うた。

生みの親、と声は言った。

親とは何か、生むとは何か、と少年は問うた。

何もない世界。

すなわち、情報媒体がいつさい存在しない。

彼らの知識は声からのものだった。

何故声の言うことを理解できたのか。

そもそも、その声は何語をしゃべっているのか。  
外の世界はあるのか。そこにあるのは何か。

彼らは、教えられていない。

声が、教える必要なし、と判断したからだ。

余計な知識は余計な疑問を生み余計な行動を引き起こす。

声にとって、彼らの余計な行動はあまり好ましくないものであり、  
閉ざされた空間という異常な環境下での絶対者という形をとっている。

ただ、彼らはそんなことを知る由もない。

知れるはずもないのだ。

絶対者がいうことは絶対であり。  
逆らうことを知らないが故の絶対。

彼らは声を母と呼び、母と思う。

声が自分はそのような存在であると、明言するから。

疑問などない。

ある意味で徹底された管理生活を送らされている彼らに、そんな  
ものありはしない。

「で、なんだっけ」

小指についた耳垢をふつ、と息をかけてとばしつつ、少女……アレルはサレルに向き直る。

「なんだっけ、じゃないよ。決めなきゃ、いつにするか」

いつ、という言葉にアレルも反応した。思い出したようだ。

「ああー、何か言ってたね。よく覚えてないけど」

「……まあそんなことだろうと思ってたけどさ」

自分よりもズボラな感が否めない少女を見て、少年はため息をつく。

声によれば、こういう時にしっかりしているのはオンナ……女であると聞いた少年は、首を傾げていた。

目の前で盛大にあくびを放つ少女を見据えながら。

（やつぱり、違う気がする……）

そんな彼の疑問などつゆ知らず、彼女は二度目の大あくび。

見てられない、という感じで少年は首を振った。

と、あくびをし終えた彼女は。

ごろん、と彼の横に寝そべった。

「ちよつとアレル、まだ話は終わってないんだけど？」

「ふわわ……もう私眠い。サレルも寝ましょ？ 眠いでしょ？」

おのれ人を自分の眠気に巻き込むな、と思いつつも、アレルに腕を引つ張られたサレルは渋々と横になる。

「お休み……」

自分が上にした方の脇と首とに手を回され、がっちりアレルにホールドされたサレルは、起きあがるに起きあがれない。

まだ少し考え事をしたいのに、このままでは眠ってしまう。

彼女の吐息が鼻にかかる。

「はあ……」

しょうがないな、とも思う。

こんな安心しきった顔で眠られては、起こすこちらに罪悪感がわき上がりそうだ。



悪いのはどちらかというと考え事もせず寝てしまった彼女なのだが。

「じゃあ、14回、目が覚めたらでいいかな？」

と独り言のように漏らす。

アレルに聞いたところで、サレルの好きにしなよ、と言われるだけだ。それでも一応、夢に旅立つか旅立たないかのところにいるだろう彼女に話しかけてみる。

「、う・ん」

うん、と聞こえた。

ということにした。

全く適当ではあるが、彼らは普段からこうなのでサレルのほうもそれで納得して目を閉じる。彼女を少し自分の方に寄せるのも忘れない。

サレルの今日の課題はこれでこなされたことになる。

しかし、彼らは知らない。

生体としては人間と変わらない彼ら。おおよそ23〜24時間を一回のサークルとして活動する。

それを外の世界では「一日」と呼び。

またそれを14回繰り返すことは「二週間」であるということ。

無論、サレルが14という数字を出したのは偶々だ。自分とアレルの年齢を足しただけで。

そして、彼らがたとい外の世界でそれを「一日」と呼び、それを14回繰り返すということは「二週間」という事象であるということを知っていたとして、まだ知り得ないことがある。

それがたった一ずれるだけで。

多くの人間の命運、果ては「元人間」のそれも左右するということ。

彼らは知る由もなく。

安らかに寝息をたてながら。

夢へと旅立っていく。

無知は罪である、と人は言う。

しかしそれが。

人為的に作られたものなのであれば。

無知は無垢であることに変わりない。

## 襲撃・レイド・オン・

「いや、ここには来てないよ。少なくとも私が居たときにはね」

「やー？ 見てないな。事務室にいるかも知れないよ？ 何かコピーしなくちゃいけない物がある、って言ってた気がするから」

「・・・いや、ここにはいらしてないよ。まだお帰りになってもないみたいだね」

ふん・・・？ どうしたものでろう。

探せばいつも二人のうち一人は見つかるのだけれど。今日に限って二人とも見つからないのはどういうこと？

せっかく口実の為に、私の学校での学力に見合っているだろうレベルの問題を見繕ったのだけれど。なにぶん、いつも適当に手を抜いているものだから加減のほどが分からない。

二人が彼を、どういう意味で、かは知らないが、好いている、気に入っているらしいというのは後輩に聞いた。

好いている、というよりも“深窓の寝太郎”の異名を持つ彼をただ単に心配しているだけなのかも知れないが。真相のほどは分からない。

「研究室にもう一回いってみなよ。それでも居なかったら放送で呼

び出したげるから」

「あ、別にそこまでは・・・」

そんな急用でもないの。

私は、その事務員さんに礼を言いながら軽く会釈をして、事務室をあとにした。

とにかく、だ。彼女たちを捕まえないことには始まらない。

彼女たちをエサにすれば、彼はほぼ確実に釣れる。

その後輩の話によれば、今日彼は課題を提出することになっていそう。居眠りをしていたから課題を課されたらしい。

普段授業ですら眠っている彼が、数学の授業のない日にわざわざ先生のところに課題を出しに行くとも思えない。だから放課後のこの時まで待っていたのだ。

・・・と。

「・・・・・・・・つと、ごめんなさい」

人にぶつかってしまった。

考え事をしながら歩いていたからか、前から人が歩いてくるのに気づかなかった。

それに、詫びの言葉が出るのも遅れた。

「いえ、こちらこそ・・・」

と。

倒れかけていた私に手を添えてくれていたその人は。

千葉利明その人だった。

「大丈夫ですか？」

私は少し背が低い。反対に、彼はとても背が高い。

彼は少し腰を屈めてわざわざ私と視線を合わせるようにして言った。

「あ、うん。大丈夫」

私がそういうと彼はごめんなさい、と軽く会釈をして去っていった。

たっ、たっ、と駆けていく。

彼――千葉利明が、今日課題を出されているというのは間違いないようだ。今手に持っていた分厚い紙の束がおそらくそれのことだろう。

間違いない。

今日、だけだ。

彼女らが薦んで彼にアプローチするのはいつものことだろう。だが、その逆は普段起こりえない。

好機。というか、おそらく最初にして最後の、彼に勝ち目のある戦いを私が挑める機会。

（アイツか、ヴェイキャンシーとかいうのは）

私の共闘者、カルロスが話しかけてきた。

（多分、ね。彼、この前二週間ほど入院してたらしいわ。そのときの回復力が半端じゃなかった、って）

（なるほどな。統括者や共闘者のチカラか。確かに、闘いに参加するにや、ちと遅いからな。是が非でも治しておきたかったんだろうよ）

（・・・勝てる、かな？）

（まア、アイツのエイブラは強い・・・っつーか応用が利くらしいんだよ。長期戦は逆に不利だ。こっちのチカラは単純だから、な）

（先手を取らないと、ダメだ、ってことね・・・）

（それだけで勝てるかは知らねえが・・・まあいざとなったら俺も助けてやる。もっとも、相手側の共闘者もそこそこやるやつだったらムリだが）

（期待しないで待っとくわ）

（・・・お前は、溜めた初弾も含めて、撃ち尽くすまで全て当てる。見たところ奴はそこまでタフなわけじゃなさそうだ。初弾でほぼ確実に、怯む）

（・・・・・・）

（そこに一気に積みかける。一回で何発撃てるようになった？）

（・・・15、6）

（出し惜しみはするな。再動<sup>リサージ</sup>までに時間が多少かかるだろうが・・・  
一発も撃ち漏らさなければ、絶対に仕留められる）

（・・・分かった、わ）

（とつとその先公とやらを探しに行こーぜ）

私の両手は、既に武器。

願うだけで、祈るだけで、思うだけで、念じるだけで。  
人を、倒せる。殺せる。

現実味のない、かつ言いよのない緊張。

それでも、心臓は、空回りするように跳ねる。

でも、やらなくちゃ・・・。

私は・・・大事な物を、

また、失ってしまう。

「・・・やってやるわ」

事務室の前で止まっていた足をまた動かし始める。次はグラウンドにでも行ってみよう。

固まった決意。

今まで、何度も悩んだ。

だけど、やるしかない。

大切な物を、守るため。私の生まれ故郷を、戦地にしないように。

・・・必ず、仕留める。

心の中で、繰り返し繰り返し、呟いた。

くそつ。

どこだ？ どこにいる？

「これだけさがしてもいないなんて・・・」

あり得ない。



そんなに広い場所ではないのだ、この場所は。

残るは数学の教師の研究室だけ。この学校では職員室というものがなくて、それぞれの教科毎に部屋が割り振られ、研究室という名前が付いている。名前だけで、そんな大仰なものではないが。

普通なら、この時分、そこにいるはず。

なぜ、いない？

先ほど入った事務室。

そこにも居なかった。

普通出張とかでない限りは、先の研究室か事務室にいるのではないだろうか。確か彼女らは部活の顧問はうけもっていないかったはずだ。

考え得る場所をピックアップしてみる。

グラウンド、放送室、Aエールム、視聴覚室――

「きやつ・・・」

ドン、と胸の辺りに何かが当たった。

それが人だとすぐに気づいた。当たり前だ、すこし柔らかかったし。

上履きのラインの色から二年生だと分かった。しかも女。どこかで見たことがあるような……。

まあ、同じ学校に居りゃどっかでは会っわな、と自己完結し、よるけた彼女を支える。

「大丈夫ですか？」

と一応聞く。

確かにぶつかりはしたが、倒したワケじゃないし。

「……………」

彼女は俺の顔を眺めながら一瞬呆けた後、

「あ、うん。大丈夫」

と今度は俯いて言った。

早く家にかえっていろいろ済ませたい俺は、その女生徒の言葉を信じて、その場を立ち去ることにした。

・・・何か様子がおかしかったが、おそらく俺の気のせいだろう。

最近変なことに巻き込まれすぎて、過敏になっているのかも知れない。

悪い兆候だ。

そんなことを、分厚い数学の課題を片手に、そのときの俺は考えていた・・・ような気がする。

「だー、くそ！」

誰もいない教室。

一人で少し控えめに叫ぶ俺。

「課題だせつつったクセになんで居ねえんだあの二人は！」

たまらずバァン！ と課題を教卓に投げつける。

打ち付けたことによる風で上の部分が少しだけ舞い上がったそれはすぐに戻る。なぜかその存在自体が俺に挑発をしかけているように感じ、イライラが増長した。

（なァーに荒れてんのアンタは）

ヒョイ、と空間を割るようにして出てきたのはエリー。向こうにいたらしい。

（・・・なんでも、ない）

カバンを開けてファミリーボトルに入ったガムを三粒、一気に口に放り込む。落ち着いてモノを考えたいとき、俺はいつもこうしている。

（別に早く帰る必要なんてないんじゃない？　今日は確かアンタ何もなかったでしょ？）

まあ、確かにそうだ。

人がいないのをいいことに、俺の口は盛大に音を立てながらガムを咀嚼する。入れすぎたな。ミントだから少し辛い。

（でもさ、何かやってることが徒労に終わる、っての、何かムカつかないか？）

（あー、まあ、ね）

そういうコイツはタバコなんぞを吸ってやがる。天使になると、タールやらニコチンやらの影響をあまり体が受けなくなるんだとか。俺は吸ったことないんでよう分からんが、頭がスッキリする感じがするのは本当らしいから、早い話がいいことどりってとこだらう。

一応年齢80を越えているわけだしな。実質的には法律違反じゃない。見た目的には完全にアウトだけれども。

今だっすっげー違和感があるが、それをコイツにいったところでどうにもならない。ということで、黙認になるわけだ。

（しかしなあ・・・）

やっと落ち着いてきた頭で考えてみる。

今日授業があったからそのときに出しておくべきだった。生憎、俺は例の如く爆睡していた。

過ぎたことを言ってもしょうがない、っていうのは分かっているんだが、こんなことになるのならもっと早くに出しておくんだっ  
た、と今更ながらに後悔される。

ていうか、帰ってないのは恐らく事実なんだろう。事務員さんが  
そんなことで嘘を吐くとは思えないし。教員の出入りはIDカード  
で管理されているらしいので――規定時間内までにカードを通さ  
ないと本人携帯宛てにメールが届く仕組みらしい――そこら辺は  
間違いないはずだ。

よもや図書室で暇をつぶすなど彼女らがするはずもなし。

どこかの部活の顧問だったっけか？覚えてない。

これだけ捜していないというのは、そう例えば――

隠れている、とか。

（ああーそれ、あるかもね）

（いやいや・・・）

ないだろ、絶対。

そんな大人げないことを、彼女らがするとは思えない。

（んー、でもさ・・・）

（なんだよ？）

タバコを携帯灰皿にぺいつ、と放り込み（やっぱり似合わない）、  
人差し指を顎の辺りに当ててうーん、と唸るエリィ。

（あの二人、多分本気だよ？）

（本気？・・・何が）

（アンタに買い物につき合わせる、っていうの）

（はぁ？）

そんなわけー

（ないって、言い切れる？　まあ、本気で恋をしてるかどうかはしらないけど、さ）

（いや、だって・・・）

頭を押さえる。考える素振りなんだが、あまりのことに頭がついていけない。

（あの人たち、教師だぞ？　生徒にそんなこと本気でー）

（逆に、教師だから、だと私は思うけど。学校に所属している限りは教師は絶対だからね・・・どうとでも、脅せるんじゃない？）

（そんな、バカな話ー）

いや、ないとは、言い切れない、のか？

（よく考えてもみなさいよ。普通ーっていうか、私が学校なんかにいた頃とは全然違ってるとでしょうけどー普通はさ、課題を出したことで、覚えていたんだったらわざわざ見つからないようなトコに、いないでしょ）

（まあでも、あの二人は逸脱してるし・・・）

（逸脱してるから、でしょ？　さっきも似たようなこと、言ったけどさ）

逸脱してるから、か。  
なるほど。

・・・って感心してる場合じゃねえ。

(それってヤバくない？ 世間的に、社会的に、それと・・・倫理的に)

あれ？ 倫理って合ってるか？ ・・・まあいいや。

(んー・・・まあアンタはどっちかっていうと被害者だから)

(いやそういう問題でなくて)

(じゃあどついう問題？)

・・・と、言われてもな。

(もう埒が明かないわね。いいわ、私も捜す)

ヒョイ、と今度は現世うつしよに降り立つ。

その姿は・・・まあ、普通の子、って感じだった。

背は普通。少し細め。なるほど、この学校の雰囲気合っている  
感じた。違和感がない。

メタモルフォーゼ  
形質転換での変身。ヒトならざる身の、チカラ。

(隠れてるかも知れない、つても念頭に入れて、もう一回捜しましょう。さっきはああ言っただけど・・・早く帰った方がいいと思うわ)

(ああ。分かってる)

二人して、ドアに向かう。

（アンタはそっち。こっちは私が捜す。居たら引き留めておくから、呼んだらすぐ来なさい）

エリーは西側の校舎を、俺は北側の校舎を、ということになった。

隠れん坊は隠れるのが専門だった俺は、探す側のことなど考えたこともなかった。どこに隠れてそうだな、とか検討もつかない。

・・・どうしようか。

まあいい、動かないと始まらない。

俺は、さっきも覗いた教室を今度は一応中に入って捜してみたら外に出る、ということを繰り返しながら、北側の校舎へと向かった。

北校舎はいわば――なんというのだろう、普通の教室、HRとかがまったくなくて、家庭科で使う調理室と調衣室、保健室や、情報室と予備情報室（同上）、また、授業を行う教室から一番離れているということもあるのだろう、防音を施した音楽室や軽音楽部の部室などがある。

授業さえ終わってしまえばここを訪れるのは音楽部の連中のみ。この学校は文化系は脆弱で、あまり人気がないらしい。他の学校がどうか知らないが、人数比でいったらかなり少ない部類だと思う。



そんなわけで放課後も訪れるヤツが少ないこの校舎。なるほど、確かに盲点ではあった。

しかし、音楽部の部室でもある音楽室には若干入りづらい。

それに、廊下などは普段生徒が使わないだけあってあまり掃除も行き届いておらず、隠れようとするにはもってこいの場所といえはそうなるのだろうか――

「さすがに、ねえだろ」

如何せん、埃っばすぎる。

女性が座り込んだりするにはちょっと……という感じに。

それでも、廊下の奥まで行ってみたりする殊勝な俺を誰か誉めて欲しい。

「……あ」

ぴーん、と俺の頭に電球が光った……気がした。

もしかしたらあの場所かも、と。

まあ、それだったら隠れているとは言えないかも知れないが。

来た道に戻って窓を覗く。

上の方を仰ぐが……ここからはさすがに見えないか。二階だし。殆どが死角みたいなものだ。

確信があるわけじゃないが、あそこにいる……気がする。

可能性のありそうな、まだ捜していない場所――一円と十円ばかりの財布の中に百円を見つけたような、そんな感じの、うれしいとも何ともつかない感情。自然と脚は速まる。

北校舎を戻り、中央の校舎に戻る。

連絡通路を出たところにある階段からも行けたはずだ。  
二段ずつ階段をすっ飛ばし、三階も通り過ぎて――

少しだけ広い、踊り場に出る。

そう、屋上。

普通の生徒の出入りは禁じられている。教師の引率がない限り、ここには立ち入ることは出来ない・・・ある集団に所属する生徒を除いては。

屋上に部室がある、天文部。

鍵は部員全員に配られる。大抵ロッカーの鍵と一緒にしてある、つまりは、常に持っている。

鍵穴に鍵を差し込んで、回す。

やけに掴んだノブが冷たい気がしたが、こんなもんだとノブを回して戸を引いた。

「・・・・・・・・」

両端に転落防止用のフェンス。

訪れる生徒もないクセになぜかおいてあるベンチ数脚。

真ん中辺りにやたらと存在感を示す、天井の円い、それなりに高い天文塔。

そして、何故か（・・・）――

橙とは言い難い、自然にはこんな色ができあがらないだろうという、紅い紅い、空。

「・・・っ」

赤は情熱。逆に、紅は冷血。

そこは、寒かった。悪寒が、背中をゆっくりと、ぞろり、ぞろりと。虫のように這い回る感覚。

感じる気温が、ではない。冷たい。何も無い――まるで、全てが死に絶えてしまったような――

どうなってる？

ココにくる前はこんな色じゃなかった。確かに夕焼けではあった気がするがこんな毒々しい、禍々しい色ではなかった。

と、そこで。

一つ、思い当たる。

思い当たった刹那。

「・・・・・・！」

何かが聞こえた。

それが何だったかを、知る間もなく。

脚が、地面を。

体が宙を。

離れて舞った。  
弾けて飛んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0916c/>

---

デッド・バラード

2010年12月12日10時45分発行